

国立大学法人お茶の水女子大学
ジェンダー研究所

IGGS

2019年度 事業報告書

Institute
for
Gender Studies
Ochanomizu
University

ジェンダー研究所

2019年度事業報告書によせて

グローバル女性リーダー育成研究機構長／理事・副学長 佐々木 泰子

ジェンダー研究所は、創立以来40有余年の実績をさらに発展させるべく、2019年度も、先端的研究プロジェクトの推進、国際シンポジウムや学術セミナーの開催、特別招聘教授プロジェクト、学術雑誌の刊行、教育プログラムの実施、研究所成果の発信等に精力的に取り組みました。年度終盤からの新型コロナウイルス感染症蔓延により、いくつかの事業を延期せざるを得ない状況となったことは残念でしたが、いずれについても、日程や形態をオンライン形式に改めての実施が検討されており、その開催が待たれます。

また、2019年は、関係者の訃報が続く悲しい年でもありました。本研究所の前身で、日本初のジェンダーに関する総合的・国際的な研究を行う機関として1996年に設立されたジェンダー研究センター初代センター長の利谷信義本学名誉教授が8月に、そして2代目センター長の原ひろ子本学名誉教授が10月にご逝去されました。利谷先生は、法学者としてのお立場から「男女平等の是正は、女性のみならず、男性にとっても必要である」として男女平等社会の実現に向けてご尽力され、初代センター長としてセンター発展の礎を築かれました。原先生は、1979年にお茶の水女子大学家政学部に着任されて以来、本学ならびに日本における女性学・ジェンダー学の教育および研究の発展に多大な貢献をされました。原先生から刺激を受け、それを糧に本学から社会に活躍の場を広げた卒業生も少なくありません。また、日本学術会議をはじめとする学術組織の活動でも、日本における女性研究者の地位向上に力を注がれました。ここに改めて哀悼の意を表し、襟を正し、先生方のご功績を継承し、さらに発展させる研究、教育実績を積み重ねていく決意です。

そのような中、年度末には、2015年10月以来、4年半にわたり所長としてジェンダー研究所のイニシアチブをとられた石井クンツ昌子先生がご退職されました。この場を借りて、先生のこれまでのご貢献に感謝申し上げますとともに、これからも忌憚なく御叱正を賜りますようお願い申し上げます次第です。

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行は、大学における研究、教育の現場に大きな影響を与えています。如上のとおり、ジェンダー研究所における国際的教育研究拠点形成事業も例外ではありません。しかし、このような状況だからこそ、創意工夫と研究意欲を発揮して、これからの事業展開に臨む所存です。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくようお願い申し上げます。

ジェンダー研究所2019年度の活動を振り返って

ジェンダー研究所長 石井クンツ 昌子

早いもので、2015年に本学にグローバル女性リーダー育成研究機構が開設され、機構の一つの柱としてジェンダー研究センターがジェンダー研究所に改組されてから5年が経ちました。以降、毎年、様々な形でジェンダーに関連する事業や研究を行ってまいりました。2019年度も、所長、専任教員、研究員、研究系スタッフ、事務系スタッフが協力して研究プロジェクト推進や国際シンポジウム等の開催に積極的に取り組みましたことをご報告いたします。

本研究所のメインの事業である特別招聘教授プロジェクトでは、2018年夏にお招きしたノースカロライナ大学のバーズレイ教授に、非常に有意義な国際シンポジウムやIGSセミナーを開催していただきました。バーズレイ教授には本学の大学院生の授業を担当していただき、更に論文指導や英語の指導をしていただくなど、大変好評でした。ジェンダー研究センター時代からタイトルを引き継ぎ刊行している『ジェンダー研究』は、「安全保障とジェンダー」を特集とした第22号を発刊し、国内外から高い評価を得ることができました。

昨年度に報告しましたノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センターとの共同プロジェクト「ジェンダー平等/ダイバーシティ：ノルウェー・日本共同研究」は2019年4月に開始しました。このプロジェクトの一環であるMobility（研究者及び院生の交流）事業では、本学の博士課程院生と修士課程院生各1名が昨夏にNTNUのあるトロンハイムに滞在して、NTNUの教員のアシストを受けて、自身の研究のための情報収集をしました。また、同年9月には石井クンツ教授（所長）、申准教授（専任教員）、小玉教授（運営委員）、吉原RFがNTNUを訪問して、ワークショップやミーティングに参加し、出版予定のAnthologyについての詳細な打ち合わせ等を行ってきました。お互いの研究や今後のプロジェクト計画などについてより深いレベルでの相互理解ができ、同時に、NTNUの研究者の素晴らしいホスピタリティに触れることができた1週間の滞在でした。これらの事業の他にも、IGS所属の研究者の皆様にはご自身の研究を進めていただきました。また、本研究所の歴史の記録を保存するための女性文化資料館創設以来の事業記録電子化も着実に進んでいます。

毎年、様々な国際シンポジウムを開催してきましたが、2019年度も3つの国際シンポジウムと10以上のIGSセミナーと研究会を開催することができました。この中には、トランスジェンダーなど時宜を得たトピックに関する内容のシンポジウムもあり、一般の方々を含む多くの参加者からいただいた感想からも、貴重な学びの機会を提供させていただいたと確信しています。

本報告書を通して、2019年度のジェンダー研究所における事業の詳細をご理解いただければ幸いです。本研究所事業の充実は、所員の努力のみではなく、学内そして学外の各方面からの協力を得て実現されています。ここに、改めまして、心からの感謝の意を表します。

【目次】

1. ジェンダー研究所 2019 年度事業概要	7
ジェンダー研究所概要	
2019 年度事業概要	
2. 研究プロジェクト	13
2019 年度研究プロジェクト成果報告	
(I) 政治・思想とジェンダー	
(II) 生殖・身体とジェンダー	
(III) 経済・移動とジェンダー	
2019 年度外部資金獲得状況	
学会等活動一覧	
3. 国際シンポジウム・セミナー	43
2019 年度 国際シンポジウム・セミナー概要	
主催国際シンポジウム詳細	
哲学者と皇太子妃：冷戦期日本における自由と愛と民主主義	
トランスジェンダーが問うてきたこと：身体・人種・アイデンティティ	
共催国際シンポジウム詳細	
踊る中国：都市空間における身体とジェンダー	
主催 IGS セミナー詳細	
冷戦初期の日本におけるファッションショー外交：フェミニスト視点からの批判的考察／生殖医療技術と男性性／J.S.ミルにおけるデモクラシーと女性参政権／「ジェンダーと開発」を問い直す：ダイアン・エルソンとの対話／ノルウェーの性別自己決定権法制とトランスジェンダーの経験の複雑性／日本における女らしさの表象／持続可能な社会をめざすエンパワメントの教育：ジェンダーの視点から／フランスの視点からの思想史ワークショップ：家族、社会、ジェンダー／インドネシアにおけるジェンダーと政治：2019 年総選挙分析／映画『性別が、ない！』上映&パネルディスカッション：性別二元制規範を考える／コンドルセの政治社会像と女性への視点	
主催 IGS 研究会詳細	
グローバル化と平和／お茶大・東大院生合同セミナー：トランスジェンダーが問うてきたこと：身体・人種・アイデンティティ／Exploring How Women’s Contraceptive Choices Can Be Influenced by Their Views on Abortion	
後援シンポジウム	
日本フェミニスト経済学会 2019 年大会：東南アジアの経済成長とジェンダー：女性の移動・労働・定住	
4. 特別招聘教授プロジェクト	87
2019 年度特別招聘教授プロジェクト概要	
ジャン・バーズレイ特別招聘教授プロジェクト	

5. 国際研究ネットワーク.....	93
2019 年度国際研究ネットワーク構築概要	
1) 海外研究交流	
2) 国際共同研究プロジェクト	
3) JAWS・AIT	
4) INTPART プロジェクト	
5) 国内外招聘研究者一覧	
6. 教育プロジェクト.....	121
1) 専任・特任教員担当講義	
2) 2019 年度修士論文博士論文要旨	
7. 学術成果の発信.....	127
1) 学術雑誌『ジェンダー研究』	
2) プロジェクト報告書 IGS Project Series	
8. 文献収集と公開・史料電子化・ウェブ発信.....	133
1) 文献・資料の収集と公開	
2) IGS 史料電子化プロジェクト	
3) ウェブサイトでの情報発信	
9. 社会貢献.....	137
【資料】	
①構成メンバー.....	144
②研究プロジェクト一覧.....	156
③協力研究者一覧.....	163
④国際シンポジウム・セミナー・研究会一覧.....	167
⑤寄贈図書一覧.....	172
⑥電子化イベント一覧.....	175
⑦国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則.....	180
⑧国立大学法人お茶の水女子大学特別招聘教授に関する規則.....	182
⑨『ジェンダー研究』編集方針・投稿規程.....	183
⑩ジェンダー研究所ウェブサイト プライバシー・ポリシー.....	185

1.

ジェンダー研究所 2019 年度事業概要

ジェンダー研究所概要

2019 年度事業概要

▶ジェンダー研究所概要

グローバルなジェンダー研究の拠点としての活動を伸展

お茶の水女子大学ジェンダー研究所は、日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、国際的な学術ネットワークの構築を主要目的とし、高水準の国際的研究プロジェクトの実施、国際シンポジウム等の開催、国際的教育プログラムの実施、学術雑誌の刊行、研究教育成果のグローバルな発信と社会還元を推進している。

ジェンダー研究所の創立は1975（昭和50）年の女性文化資料館設立に遡る。以降、女性文化研究センター（1986（昭和61）年）、ジェンダー研究センター（1996（平成8）年）と改組を重ね、日本のジェンダー研究の発展に貢献してきた。そして、お茶の水女子大学が創立140周年を迎えた2015（平成27）年、「ジェンダー研究所」と名称を改め、「グローバルリーダーシップ研究所」と共に、「グローバル女性リーダー育成研究機構」構成研究所となった。ジェンダー研究所は、これまでに培ってきたジェンダー研究・教育および国際的な学術ネットワーク構築の実績を資源に、グローバル女性リーダー育成研究機構における中核的な研究機関として、学際的かつ先駆的な研究をより推進し、グローバルな研究成果発信と学術ネットワーク構築に務める。

[参照:本報告書180～181頁 資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」]

ジェンダー研究所（Institute for Gender Studies (IGS)）の沿革と本学ジェンダー研究教育の動き

1875	東京女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）開校
1949	お茶の水女子大学設立
1975	女性文化資料館設立
1986	女性文化研究センター設立
1993	大学院人間文化研究科博士後期課程人間発達学専攻「女性学講座」を創設
1996	ジェンダー研究センター（IGS）設立（国内大学初の「ジェンダー研究」を目的とする研究施設）
1997	大学院人間文化研究科博士前期課程発達社会科学専攻「開発・ジェンダー論コース」設置
1998	大学院人間文化研究科博士後期課程「女性学講座」を人間発達科学専攻「ジェンダー論講座」に改組
2003	21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア（F-GENS）」採択
2004	国立大学法人 お茶の水女子大学設立
2005	大学院人間文化研究科博士後期課程「ジェンダー学際研究専攻」設置
2006	大学院人間文化研究科博士前期課程「ジェンダー社会科学専攻」設置
2007	大学院人間文化研究科を人間文化創成科学研究科に改組
2015	グローバル女性リーダー育成研究機構 ジェンダー研究所設立

▶ジェンダー研究所 2019年度事業概要

先端的ジェンダー研究の充実と国際的な発信へ

2019年度も、研究活動が活発に行われ研究成果も充実している。主な成果としては、1)『ジェンダー研究』22号の刊行、2)ノルウェー科学技術大学(NTNU)ジェンダー研究センターとの組織間連携による共同研究の推進、3)研究所史料電子化プロジェクトの進捗、4)国際シンポジウム開催が挙げられる。

研究プロジェクトは昨年度3分野に再編成したが、今年度はその各分野が独自の成果をあげると共に、より有機的に連携し、研究所としての研究成果をあげるに至っている。国際シンポジウムと関連分野のIGSセミナーを企画し、広く研究成果を発信した。研究プロジェクトからなる論文や学会報告も、積極的に行われた。また新たな外部資金の獲得もあった。

構成メンバー

所長、専任教員、特任講師、特任リサーチフェロー、アカデミック・アシスタントの人数は前年度体制が継続された。前年度末で退職した特任リサーチフェローの後任を公募した結果、2018年度に研究協力員として研究所事業に参加していた平野恵子氏が採用された。基幹研究所属の教員のうちから任命される研究員には、新たに戸谷陽子文教育学部教授が就任し、人文科学系の研究者の増員がなされた。特別招聘教授は前年度からの継続が1名。研究所の各事業に積極的に参加し、充実した国際的研究教育交流が持たれた。前年度に引き続き、足立眞理子本学名誉教授が客員研究員として研究プロジェクトに参加した。

[参照:本報告書 180~181頁 資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」
144~155頁 資料①「構成メンバー」]

研究プロジェクト

研究所の柱となる研究プロジェクトは、昨年に引き続いて(I)政治・思想とジェンダー、(II)生殖・身体とジェンダー、(III)経済・移動とジェンダー、の各分野において独自に進めるとともに、相互の有機的な連携において研究成果を達成してきている。2019年度は5件の外部資金(科学研究費)が新規に獲得され、またノルウェーリサーチカウンシルINTPARTの下でのノルウェー科学技術大学(NTNU)ジェンダー研究センターとの共同プロジェクト「ジェンダー平等/ダイバーシティ:ノルウェー・日本共同研究」が開始された。研究資金別にみると、IGS研究プロジェクトとして所属研究者それぞれが進めている共同研究・個人研究が7件、研究代表者または分担者として外部資金を獲得しての研究プロジェクトが14件、これに特別招聘教授のプロジェクトが2件加わり、昨年度を上回る総計23件のプロジェクトが進められている。それぞれのプロジェクトでは研究会やセミナー、国際シンポジウムを開催したほか、学会発表や投稿論文、書籍刊行による成果発信もおこなわれた。

[参照:本報告書 13~42頁「研究プロジェクト」]

国際シンポジウム等の開催

主催国際シンポジウム2件、共催国際シンポジウム1件、主催IGSセミナー11件、主催IGS研究会3件、後援国内シンポジウム1件を開催した。IGSセミナーは、招聘教授、特任講師・リサーチフェローによる企画が中心で、テーマやゲストスピーカーの顔ぶれは多様性に富んでいる。一覧からは、ジェンダー研究の学際性や、研究と社会のつながりのありようが見て取れる。また、学内外から相当の参加者数を得る成果を挙げている。

女性の政治参画や生殖医療、トランスジェンダーなど多くの最新時事問題が取り上げられたことに加え、ポーヴォワール、中国における身体とジェンダー、トランスジェンダー研究の最前線、近世近代日本における女性性、生殖医療技術と男性性、インドネシアにおけるジェンダーと政治など、過去や現在の問題を検討吟味して、未来へと繋げていくような企画が並ぶのは、本研究所ならではの成果である。

シンポジウムやセミナーの開催は、研究発表や事業成果の社会還元のみならず、研究者同士の交流、共同研究機会の構築および研究ネットワーク拡充の機会ともなっており、2019年度も国内外から40名ほどのゲストスピーカーを迎えて、活発な交流活動を展開することが出来た。

[参照:本報告書43～86頁「国際シンポジウム・セミナー」]

特別招聘教授プロジェクト

前年度から継続し、ジャン・バーズレイ氏(米・ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授)が任についた。担当する大学院講義、国際シンポジウムの企画開催、大学院生向け英語セミナーでは、国際性の高いジェンダー表象研究が取り上げられた。その他の研究所事業にも積極的に参与する高いコミットメントの姿勢は、院生や研究者たちにとって大きな刺激となり、研究所の事業活動の活性化に貢献した。

[参照:本報告書182頁 資料⑧「国立大学法人お茶の水女子大学特別招聘教授に関する規則」および87～92頁「特別招聘教授プロジェクト」]

国際研究ネットワーク

2019年、IGSの研究者は、台湾、韓国、香港、インドネシア、タイ、イギリス、フランス、デンマーク、ノルウェー、アメリカにある計24もの教育研究機関の研究者らと研究交流および共同研究を行った。

そして2019年度は5つの国際共同研究プロジェクトを展開した。国際共同研究プロジェクトの中でも特に以下のプロジェクトに注目されたい。2018年にIGSとノルウェー科学技術大学(NTNU)ジェンダー研究センターが共同申請したノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金(INTPART)の採択により2019年度からはじまった共同研究プロジェクトでは、IGSおよびNTNUの研究者や大学院生らが互いの研究機関を訪問して研究発表を行ったり、オンラインでの研究交流を行った。またIGSとNTNUの研究者による共同著書の出版をめざすアンソロジープロジェクトが進行中である。2000年から日本とアメリカで政治学分野でジェンダー研究を遂行する日米の女性研究者らが集まって研究交流を行っている「日本-アメリカ女性政治学者シンポジウム」(JAWS)のプロジェクトでも、2019年度は若手研究者がアメリカの学会誌に論文を投稿した。またIGSがタイのアジア工科大学院大学(AIT)とすでに19年も継続的に実施している国際教育交流プログラム「AITワークショップ」でも、アジアの次世代ジェンダー研究者の養成やネットワーク構築におおいに貢献している。

[参照:本報告書93～119頁「国際研究ネットワーク」]

教育プロジェクト

例年同様、所属教員による学部・大学院等での講義・演習、特別招聘教授等による大学院生対象英語セミナーが実施された。講義科目は学部向けに「ジェンダー 8 政治・政策とジェンダー」「グローバル化と社会」「グローバル化と労働Ⅱ」「グローバル文化学総論」、大学院向けに「ジェンダー学際研究報告」「ジェンダー学際研究論文指導」「特別講義」「ジェンダー政治経済学」「ジェンダー社会科学論」「ジェンダー立法過程論」「フェミニズム理論の争点」「開発・ジェンダー論特論」「国際社会ジェンダー論演習」「ジェンダー基礎論」「ジェンダー社会経済学」、サマープログラムには「Special Lectures in Humanities and Sciences III」「Summer Program in English III」が開かれた。

バーズレイ特別招聘教授は、大学院講義「男女共同参画国際演習Ⅰ」を担当し、1920～30年代の文化世界を中心にした「モダンガール」のジェンダー表象についての演習が行なわれた。研究所所属教員は、学内各所において教育の国際化に貢献している。

所属教員指導の博士前期課程ジェンダー社会科学専攻「開発・ジェンダー論コース」修了者の修論テーマは、災害報道におけるジェンダー問題の考察、博士後期課程ジェンダー学際研究専攻の学位取得者の博論テーマは、冷戦後安全保障の再構築と国際ジェンダー平等規範であった。

[参照:本報告書 121～125 頁「教育プロジェクト」]

情報発信・社会還元

『ジェンダー研究』は、前号 21 号から本格的な学術雑誌に刷新された。新雑誌では、論文投稿資格がジェンダー研究所関係者に限らない一般に広げられことから投稿数が飛躍的に増大し、また世界各地より投稿がみられた。今号もその傾向が続き、投稿論文数が増加している。22 号は「安全保障とジェンダー」と題する特集に加え、特別寄稿論文、投稿論文、書評論文を擁し、2019 年 7 月に刊行された。

文献収集・資料整理分野では、寄贈図書・資料の受入のほか、所属研究者らの著書や、主催シンポジウムやセミナーの関連書籍の購入を進めた。また、2017 年度より開始された、ジェンダー研究所創立以来の事業記録の電子化プロジェクトも引き続き実施されている。本プロジェクトはデジタルアーカイブの構築を目標としており、完成後には、本学における女性学・ジェンダー研究の歴史を一望できるようになる。加えて、学術雑誌『ジェンダー研究』の刷新に伴い、昨年度より設置に取り組んでいた専用サイトを公開した。本特設サイトの公開により、『ジェンダー研究』の過去掲載論文へのアクセスが容易になったほか、投稿フォームや執筆要項の掲載など、『ジェンダー研究』への投稿を検討する応募者に必要な情報が本サイトに集約された。

社会貢献の面では、一般公開のシンポジウム等開催による事業成果社会還元のほか、所属研究者は、行政機関や非営利団体からの講演依頼等を積極的に引き受け、またその成果が新聞ほかメディアに多数掲載されるなどして、各々の研究成果の社会還元を努めている。

[参照:本報告書 127～132 頁「学術成果の発信」、133～136 頁「文献収集公開・史料電子化・web 発信」、137～141 頁「社会貢献」]

2.

研究プロジェクト

2019年度研究プロジェクト成果報告

(I) 政治・思想とジェンダー

(II) 生殖・身体とジェンダー

(III) 経済・移動とジェンダー

2019年度外部資金獲得状況

学会等活動一覧

▶ 2019 年度研究プロジェクト成果報告

学際的、先駆的ジェンダー研究を目指して

ジェンダー研究所は2015年以来、「グローバル女性リーダー育成研究機構」の中核的な研究機関として先端的ジェンダー研究に取り組んできた。その前身であるジェンダー研究センター時代は、21世紀COEプログラム『ジェンダー研究のフロンティア』（2003～2007年度）の成果をはじめとして、優れた業績をあげた。ジェンダー研究所はこの研究成果を継承・発展させるとともに、伝統的な学問分野に縛られない学際的で先駆的なジェンダー研究を志し、引き続き日本のジェンダー研究の発展へ貢献することを目指している。ジェンダー研究所は、アジアにおけるジェンダー研究の拠点を目指し、国際的な共同研究と、その成果発信を積極的に進めており、蓄積された研究成果は広く社会へ還元していく。

3分野の先端研究領域の発展と国内・国際共同研究をリード

ジェンダー研究所は現在、(I) 政治・思想とジェンダー、(II) 生殖・身体とジェンダー、(III) 経済・移動とジェンダーの3つの分野において先端研究を進めている。この3分野は、独自性を維持しながら有機的につながったプロジェクトであり、総合的な研究成果を達成することを目的に推進されており、今後も、学内研究員、客員研究員、研究協力員の協力を得ながら、研究成果をあげていきたい。各研究分野における今年度の成果として、研究会の実施、IGS セミナー実施、国際シンポジウムの実施、成果出版物の刊行、国際共同研究の実施、国際ネットワークの構築、国際学生交流が行われた。また、研究所メンバーらの論文執筆、学会発表、講演なども活発に行われた。個々のプロジェクトの研究成果については、本書17～39頁を参照していただきたい。

国際シンポジウム、IGS セミナー、研究会を開催及び学術雑誌『ジェンダー研究』の刷新

各研究分野における質の高いシンポジウムやセミナーの開催と、『ジェンダー研究』の刊行により、ジェンダー研究の成果発信に力を入れた。

研究者及び一般市民を対象として、時宜にかなうテーマの国際シンポジウムやセミナーを複数開催し、聴衆との議論の場も設けることで、研究成果の社会還元に努めた。加えて、特別招聘教授の企画によるセミナーや国際シンポジウムも開催し、ジェンダー研究の国際的な成果を共有することができた。

前年度に新しい体制において再出発した本研究所刊行の学術誌『ジェンダー研究』は「安全保障とジェンダー」のテーマの下で第22号を刊行した。第22号は、特集論文4本と、特別寄稿2本、そして投稿論文5本、書評15本という構成において、2019年7月に発行された（本書128～131頁参照）。第22号は、国際政治学やその関連領域においてフェミニスト・パースペクティブを明確に打ち出していくことの意義を示しており、ジェンダー研究のさらなる発展に寄与するものといえる。

2019 年度研究プロジェクト 3 分野別一覧

(I) 政治・思想とジェンダー
IGS 研究プロジェクト 「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究
IGS 研究プロジェクト 「東アジアの越境的女性運動」研究
IGS 研究プロジェクト リベラル・フェミニズムの再検討
科学研究費基盤研究 B (課題番号: 18H00817) 女性の政治参画の障壁: 国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査
科学研究費基盤研究 C (課題番号: 19K12604) ジェンダークォータの政治学: 制度化と抵抗
科学研究費基盤研究 C (課題番号: 19K01570) 18 世紀末ブリテンにおける女性論の諸相: 功利主義的フェミニズムの可能性
(II) 生殖・身体とジェンダー
IGS 研究プロジェクト 生殖医療とジェンダー
IGS 研究プロジェクト 性に関する情報と実践—性教育に関する研究
科学研究費基盤研究 C (課題番号: 18K00034) 諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究
科学研究費基盤研究 C (課題番号: 16K12111) AID で生まれた人の「出自を知る権利」を保障するための教材作成に関する研究
公益財団法人トヨタ財団 2016 年度研究助成プログラム (B) 個人研究助成 生殖補助技術で形成される家族についての研究
(III) 経済・移動とジェンダー
IGS 研究プロジェクト 資本と身体のジェンダー分析: 資本機能の変化と『放逐』される人々
IGS 研究プロジェクト 送出し国から見た国際労働力移動のジェンダー分析
科学研究費基盤研究 A (課題番号: 19H00607) 移民受入れ国-送出し国の政策相互連関: 国際社会学からの比較研究
科学研究費基盤研究 B (課題番号: 17H02247) 新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー: インド・フィリピン・中国の国際比較
科学研究費基盤研究 B (課題番号: 19H01578) 再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯
科学研究費基盤研究 C (課題番号: 19K12603) 香港における移住女性の再生産労働力配置: 「グローバル・シティ」のジェンダー分析
科学研究費基盤研究 C (課題番号: 17K02067) 現代インドネシアにおける「移住・家事労働者」の変容
科学研究費基盤研究 C (課題番号: 17K02051) インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合

(I) 政治・思想とジェンダー

「政治・思想とジェンダー」研究では、東アジア地域における民主主義の有り様と政治代表性の関係について国際比較研究を行う他、国境を越えて連帯する女性運動、及びイギリスの自由主義フェミニズム思想の発祥について考察する。国家、市民社会、思想という異なる次元からジェンダー秩序に基づく既成権力の在り方を明らかにするとともに、それに対抗する思想や運動を総合的に研究する。

2019年度は、日本学術振興会の科学研究費助成事業に新規研究プロジェクトが複数採択される(科学研究費基盤研究 C)など、これまでの研究をさらに進化させることができた。また前年度に引き続き、関連研究会やセミナーも実施した他、成果物も刊行した。

IGS 研究プロジェクト

「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究

【研究担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【概要】

東アジア地域はその経済発展の成果により国際的に注目されているが、政治の民主化の道筋は一様ではない。本研究プロジェクトでは、日本、韓国、台湾の民主主義の有り様と政治代表性の関係について、ジェンダー視点に立脚した国際共同研究により比較分析する。議員を対象としたアンケート調査、政党、議員、市民社会関係者へのインタビューや現地でのフィールドワークを実施するほか、定期的な国際シンポジウムや研究集会を開き、研究交流を促進する。東アジア地域において、政治代表性の男性優位性が続くメカニズムを明らかにし、政治制度におけるジェンダー公平性・多様性を実現させる政策も検討する。

2019年にはECPG (European Conference on Politics and Gender) で3カ国の研究者が集って研究成果を点検した。3カ国の議員アンケートの結果を分析した研究論文を学術雑誌に掲載したほか、今後も3カ国比較の共同研究成果を発表していく予定である。また、政治分野に限らず東アジアの#MeToo運動の広がりについても共同研究を進めた。2019年度からは「科研費Cジェンダークォータの政治学：制度化と抵抗」(本報告書20頁参照)が採択され、さらに充実した研究が進められるようになった。

【研究内容・成果】

論文	Shin, Ki-young, "An Alternative Form of Women's Political Representation: <i>Netto</i> , A Women's Party in Japan," <i>Politics & Gender</i> 16 (Special Issue 1 (Special Symposium on Women's Parties)) March: pp.78-98, 2020
論文	Hasunuma, Linda and Ki-young Shin, "#MeToo in Japan and South Korea: #WeToo, #WithYou," <i>MeToo Political Science</i> . Routledge.(転載)
論文	申琪榮, 「From Gender Quotas to Gender Parity in Legislatures」(韓国語論文) 『梨花ジェンダー法学』2019年、11号、pp.207-243
調査報告書	申琪榮, 「大韓民国の事例」『令和元年度諸外国における政治分野への女性の参画に関する調査研究』、内閣府男女共同参画参画局調査報告書。2020年3月。
調査報告書	申琪榮, 「コラム～台湾における女性の政治参画とクォータ制度」『令和元年度諸外国における政治分野への女性の参画に関する調査研究』、内閣府男女共同参画参画局調査報告書。pp.162-168. 2020年3月。
国際学会報告	Shin, Ki-young and Chang-ling Hwang, "Who Opposes Quota and Why?: Survey Analysis of Korean and Taiwanese National Legislators," European Conference on Politics and Gender, University of Amsterdam, July 4-6 . 2019
国際シンポジウム登壇	「#MeToo in Japan and Korea」、台湾国立大学 Global Asia Research Center 国際シンポジウム『東アジアのMeToo運動』、2019年10月28日
IGS セミナー企画・登壇	韓国济州平和研究院と共同セミナー (本報告書80頁参照) 『Shared Visions for Korea-Japan Relations: Globalism, Peace, and Gender Issue』
国会図書館講演	申琪榮, 「持続可能な政治代表性は得られるのか——クォータ制の15年」、国会図書館研究会報告、2019年7月29日

科学研究費基盤研究 B (課題番号: 18H00817)

女性の政治参画の障壁: 国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査

【研究代表者】 三浦まり (上智大学教授)

【研究分担者】 申琪榮 (IGS 准教授)、Noble Gregory (東京大学教授)、
ステイール若希 (名古屋大学特任准教授)、MCELWAIN KENNETH (東京大学准教授)
大山礼子 (駒澤大学教授)

【期間】 2018~2020 年度

【概要】

女性の政治参画に対する障壁を国会議員および主要政党の都道府県支部への調査を通じて明らかにする。国際的な研究成果に基づいて、とりわけ「政党の候補者リクルートメントと公認決定過程」に焦点をあて、郵送調査と政党関係者へのインタビュー調査を組み合わせ、政治参画に関する男女差、政党差、地方差はどのように見られるかを考察する。

2019 年は前年実施した国会議員アンケートの結果を国際学会で報告した。また、県連へのヒアリングを始めた。さらに、上智大学にて地方政治や県議会に関する研究会を数回開催した。

【研究内容・成果】

書籍 (共著)

申琪榮、「女性候補者のなり手を増やすための試み——パリテ・アカデミーの実践が示唆すること」、辻村みよ子・三浦まり・糠塚康江編著『女性の参画が政治を変える——候補者均等法の活かし方——』、pp.101-114、信山社。

講演記録報告書

申琪榮、『若年女性の政治参加』(第 95 回公開講演会)、人文研ブックレット No.65、同志社大学人文科学研究所、2020 年 3 月 17 日。

国際学会報告

Mari Miura and Ki-young Shin, “The Impact of Gender Parity Law in Japan: Survey Analysis of Japanese Diet Members,” 2019 Asian Election Studies International Conference, Oct. 29, Taiwan. 2019.

シンポジウムでの講演

申琪榮、講演タイトル「政治リーダー養成の試み——パリテ・アカデミーの実践が示唆すること」、シンポジウム『男女共同参画社会基本法とジェンダー平等: 施行から 20 年を振り返る』2019 年 11 月 15 日名古屋大学

科学研究費基盤研究 C (課題番号: 19K12604)

ジェンダークオータの政治学: 制度化と抵抗

【研究代表者】 申琪榮 (IGS 准教授)

【期間】 2019~2021 年度

【概要】

本研究は、議会のジェンダー公平な代表性を確保するために導入されたジェンダー・クオータ（女性候補者割当制）の効果と、その制度が女性の政治的的代表性に及ぼす影響を韓国の事例により分析するものである。1年目の2019年度は、候補者リクルートメント過程におけるジェンダー・クオータ制度の運用実態を明らかにするために、データ収集、聞き取り調査を実施し、制度運用状況を評価した。

研究成果は、東アジアの研究者らとパネルを組み European Conference on Politics and Gender (ECPG) にて報告した (2019年7月アムステルダム)。11月には内閣府の国際調査研究に参加する機会を得て、韓国における女性議員の参画状況とクオータ法について現地調査を行った。国会議員、中央選挙委員会、国会調査員、政党関係者、女性団体、専門家などにインタビューを行い、最新のデータを手に入るとともにクオータ法、選挙法の運用について聞き取り調査を実施することができた。その詳しい内容は、内閣府の報告書にまとめた。

また、国際共同研究で実施した韓国の議員アンケートデータを分析し、これまで韓国のクオータ法が思ったほどの成果を出していない理由を、法律の側面と議員の認識の側面双方から分析した論文を韓国の学術雑誌に発表した (2019年12月)。その他、2020年4月に実施された韓国の総選挙に至るまでの、選挙法改正や候補者リクルート関連のデータ、「女性の党」の誕生などに関するデータを収集した。

【研究内容・成果】

論文	申琪榮, 「From Gender Quotas to Gender Parity in Legislatures」 (韓国語論文) 『梨花ジェンダー法学』 2019年、11号、pp.207-243
国際学会発表	Ki-young Shin and Chang-ling Huang, “Who Opposes Quota and Why?: Survey Analysis of Korean and Taiwanese National Legislators” European Conference on Politics and Gender (国際学会) 2019. July 4-6.
国際研究集会招聘発表	Ki-young Shin and Soo-hyun Kwon, “Gender-based Public Funding for Political Parties: Why Doesn't It Work in South Korea?” Research Workshop on Gender and Financial Cost of Elected Office Worldwide (Bergen University, Norway), 2020. Jan.23~25.
調査報告書	申琪榮, 「大韓民国の事例」 『令和元年度諸外国における政治分野への女性の参画に関する調査研究』、内閣府男女共同参画局調査報告書。2020年3月。

IGS 研究プロジェクト

「東アジアの越境的女性運動」研究

【研究担当】 大橋史恵 (IGS 准教授)

【概要】

今日の女性運動は、路上や広場、公共交通機関、大学キャンパス、議場、ジャーナリズム、サイバー空間など、さまざまな場で実践され、課題解決に向けた国際的連帯とアクションを生み出している。本研究は東アジアにおけるそのような越境的女性運動の展開について考察するものである。具体的には (1) ILO「家事労働者のためのディーセント・ワークに関する条約」(第 189 号条約) に関連する労働運動、(2) 反軍事化をめぐる女性たちの運動、(3) 中国の女権主義者たちのトランスローカル／トランスナショナルな運動に目を向ける。

【研究内容・成果】

国際シンポジウムの開催	<p>中国女性史研究会との共催において国際シンポジウム「踊る中国：都市空間における身体とジェンダー」(2019 年 6 月 22 日) を企画開催。近現代中国の都市空間において女性の「踊る身体」がどのような意味をもってきたのかを討議した。ジェンダー研究所からは大橋が司会として、特別招聘教授のジャン・バーズレー氏がコメンテーターとして参加した。詳細は以下の通りである。</p> <p>報告：</p> <p>游鑑明 (中央研究院近代史研究所) 「近代中国における女子体操」</p> <p>星野幸代 (名古屋大学人文学研究科) 「1920~30 年代上海ガールズ・ショー・ビジネスの隆盛と衰退」</p> <p>大濱慶子 (神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部) 「移動、越境する社交ダンス：上海租界から北京中南海へ」</p> <p>コメント：</p> <p>Jan Bardsley (お茶の水女子大学ジェンダー研究所)</p> <p>江上幸子 (中国女性史研究会)</p> <p>(本報告書 53 頁参照)</p>
論文	<p>大橋史恵「大娘たちとくともに歩む」という〈闘い〉 — 中国山西省における日本軍戦時性暴力問題をめぐる運動」、『ジェンダー研究』(22)、pp.81-91、2019 年</p>
国際学会報告	<p>OHASHI, Fumie. “Situated in Dislocation: Rural Migrant Domestic Workers’ Mooring Strategies in Urban China”, Paper presented at the 2019 IAFFE Annual Conference, Glasgow, United Kingdom, June 27, 2019.</p>

IGS 研究プロジェクト

リベラル・フェミニズムの再検討

【研究担当】板井広明（IGS 特任講師）

【概要】

本研究プロジェクトの目的は、ベンサムやウルストンクラフト、J.S.ミルといった第1波フェミニズムあるいはリベラル・フェミニズムの思想・運動を再検討することにある。リベラリズムの公私二元論を前提にしたリベラル・フェミニズムは乗り越えの対象でしかないという捉え方が一般的だが、リベラリズムにおいて、「公」に対する「私」の領域は単に個人的自由の空間であると放任されるのではなく、不正義が存在すれば介入が正当化される空間でもあった。本研究では、ベンサムの女性論に関する草稿研究と、J.S.ミルの *The Subjection of Women*, 1869 のテキスト読解と『女性の隷従』新訳の作業を進め、リベラル・フェミニズム再検討の機運を盛り上げることを狙う。

【研究内容・成果】

訳文検討会

隔週でオンライン訳文検討会（メンバー：小沢佳史氏（九州産業大学）、山尾忠弘氏（慶應義塾大学））を開き、J.S.ミル『女性の隷従』第2章の一文一文の原意を汲み取り、当時の社会的背景や他の思想家との関連などをチェックしつつ読み進め、訳文を完成させた。

IGS セミナー開催

IGS セミナーとして、2019年10月7日に、「J.S.ミルにおけるデモクラシーと女性参政権」を企画・開催した（本報告書60頁参照）。
報告者：山尾忠弘（慶應義塾大学・院）「J.S.ミルにおけるデモクラシーと女性参政権」
討論者：村田陽（同志社大学）、平石耕（成蹊大学）

政治・思想とジェンダー 研究プロジェクト

科学研究費基盤研究C (課題番号: 19K01570)

18世紀末ブリテンにおける女性論の諸相：功利主義的フェミニズムの可能性

【研究代表者】板井広明 (IGS 特任講師)

【期間】2019～2021年度

【概要】本研究は特にJ.ベンサムの女性論と家族論を中心に、18～19世紀の功利主義フェミニズムの諸相を明らかにする。従来看過されがちであった功利主義哲学の論理とフェミニズム思想の関わりを明らかにするために、「最大多数の最大幸福」を標語に社会改革を構想したベンサムが、各人の幸福最大化のために、両性への平等な権利付与、女性に抑圧的な社会に存在する権力関係の改革、期限付き結婚制度の確立を主張するに至った思想形成過程を考察する。このようにしてベンサムの功利主義フェミニズムを『新ベンサム全集』の最新テキストや未公開の草稿から再構成し、19世紀の多様なフェミニズムに対する功利主義の思想的インパクトを明らかにする。

【研究内容・成果】

英国調査

2019年8月中旬から下旬にかけて、ロンドン大学UCL所蔵のベンサムの結婚論に関する草稿調査を行なった。この調査を通じて、とりわけ期限付き結婚制度に関するベンサムの思想形成過程が跡付けられた。

IGS セミナー開催

関連するIGSセミナーを2つ企画・主催した。

1. “A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives: Family, Society, and Gender.” 2020年1月30日 (本報告書70頁参照)

報告者：ガブリエル・ラディカ (リール大学、横浜国立大学客員教授)、アン・ブルノン＝エルンスト (パンテオン・アサス大学)、オフエリ・スイミオン (ソルボンヌ・ヌーヴェル大学)、討論者：関口佐紀 (早稲田大学)、重田園江 (明治大学)、高桑晴子 (お茶の水女子大学)。

2. 「コンドルセの政治社会像と女性への視点」2020年2月14日 (本報告書78頁参照)

報告者：永見瑞木 (大阪府立大学)

論文

ITAI Hiroaki, “Surveillance and Metaphor of “Tribunal” in Bentham’s Utilitarianism” *Revue d’études benthamiennes*, 16 (Bentham Studies in Japan Today), 2019, <https://doi.org/10.4000/etudes-benthamiennes.6132>

(Ⅱ) 生殖・身体とジェンダー

これからの日本社会の持続的な発展のためにも、女性の社会進出が期待され、実際に様々な方面で活躍する女性が増えてきている。しかし、まだ日本では女性が職業キャリアと育児を両立できる環境が十分整っていないため、一定のキャリアを築くまで結婚や出産を控える女性は少なくない。その結果、女性の初婚年齢や第一子の出産年齢が高くなり、それに伴って不妊治療を受けるカップルの数も急増している。第三者の精子や卵子を利用した不妊治療や代理出産を求めるカップルも増加傾向にあり、加えて、男性不妊が抱える問題も近年では注目されるようになってきている。

セクシャルマイノリティの人々もここ数年、日本社会で顕在化しはじめ、これに伴い、身体・セクシャリティ・ジェンダーをめぐって、これまで以上に活発な議論が展開されるようになってきている。

2019年、「生殖・身体とジェンダー」の研究プロジェクト分野では、生殖医療に関連する問題を中心に研究プロジェクトをすすめる、それに加え、日本の性教育の現状と問題、避妊や中絶に対する女性の意識、セクシャルマイノリティの人々の現状を踏まえた上でのセクシャリティの再考など、合計5つの研究テーマを設定してプロジェクトを展開した。そしてこれらの研究テーマについて、倫理的・社会的側面、ならびにジェンダーの視点から、多くの国内外の研究者と議論や情報を交わし、研究交流を深めた。

IGS 研究プロジェクト

生殖医療とジェンダー

【研究担当】 仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【概要】

生殖医療は大きく①望まない妊娠や出産を回避するための医療技術（避妊・人工妊娠中絶）、②妊娠・出産を望みながら通常の生殖行為ではそれが叶わない者を支援するための医療技術（不妊治療、生殖補助技術）、③生まれてくる命を選別する医療技術（出生前診断・産み分けなど）の3つに分けることができる。生殖医療の進歩はめざましく、第三者の精子や卵子、代理出産を利用した生殖医療技術の是非について社会や専門家集団の間での検討が不十分なまま、一般社会での利用が広まりつつある。また生殖医療の問題は産む性である女性たちに焦点を当て議論されることが多いが、男性の存在にも目を向ける必要がある。そこで2019年は不妊治療や出生前検査に関連する問題を男性側の視点からも掘り下げ、さらに避妊や中絶をめぐる問題や性別二元制規範にも目を向け、プロジェクトをすすめた。

【研究内容・成果】

IGS セミナー企画・運営	<p>テーマ：『生殖医療技術と男性性』（2019年7月26日）</p> <p>菅野摂子（立教大学）と斎藤圭介（岡山大学）を招聘し、それぞれから「男性の生殖を問う理由と研究の意義」、「出生前診断に男性はいかに向き合ってきたのか」と題する報告を受け、参加者と議論した（本報告書58頁参照）。</p>
IGS 研究会報告	<p>テーマ：『Exploring How Women's Contraceptive Choices Can Be Influenced by Their Views on Abortion』（2020年1月24日）</p> <p>イギリスのオープン大学のレスリー・ホガート氏を招聘し、日英の避妊と中絶の状況について情報交換および議論した。IGSからは仙波が“Contraception and Abortion in Japan”と題して報告した（本報告書84頁参照）。</p>
IGS セミナー企画・運営	<p>テーマ：『性別二元制規範を考える』（2020年2月12日）</p> <p>映画『性別が、ない！』の上映のあと、石丸径一郎（お茶の水女子大学）、藤原和希（label X）、長谷川渚紗（お茶の水女子大学）をパネリストとして迎え、性別二元制規範についてパネル討論を実施した（本報告書76頁参照）。</p>

IGS 研究プロジェクト

性に関する情報と実践——性教育に関する研究

【研究担当者】 仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【概要】

世界的に子どもへの性教育は不可欠であるという考え方が浸透しつつある。国連が発表している *International Technical Guidance on Sexuality Education* でも、正確な性教育はリスクある性行動を減少させる効果があると述べられている。日本でも性教育の重要性が認識されるようになってきているが、今なお、性教育の中で「性交」「避妊」「中絶」などを取り上げることに対して抵抗感を持つ政治家や専門家が存在し、それが子どもの性行動の現実を即した性教育の足かせともなっている。また性的マイノリティの人々の存在や状況、不妊の現実を性教育の中でとりあげているところもまだ少なく、とりあげても一部の情報にすぎない場合もある。これらは子どもたちの人生においても重要な情報であり、これからの性教育のあり方を考える上で大きな課題となっている。

【研究内容・成果】

学会登壇

日本人口学会第71回大会、香川大学教育学部、企画セッション『性に関する情報の伝達と人口』（2019年6月1日）
ディスカッサントとして登壇し、登壇者5名と性教育について議論

生殖・身体とジェンダー 研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 C (課題番号: 18K00034)

諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究

【研究代表者】 仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【期間】 2018~2020 年度

【概要】

日本の精子提供はこれまで匿名で実施されてきた。近年、卵子提供にも注目が集まる中、ドナーの匿名性の是非について議論される機会がこれまで以上に増えると予測される。本研究は国内での議論に向けて、出生者の出自を知る権利を法で保障する国について、法制定までにどのような議論があったか、および法施行後の状況を明らかにするものである。

【研究内容・成果】

<p>国際学会での報告</p>	<p>台湾国立大学 Global Asia Research Center (GARC) 主催シンポジウム <i>New Reproductive Technologies and Global Assemblages: Asian Comparative Perspectives</i> (2019 年 5 月 17 日-18 日)</p> <p>“Abolishment of Donor Anonymity: What Can Japan Learn from the Experience of Victoria States, Australia and New Zealand?” を報告。</p>
<p>デンマークにて現地調査を実施</p>	<p>2019 年 9 月 9 日から 11 日にかけてコペンハーゲンにて、オールボー大学の Stine Adrian 氏、ロキレス大学の Rikke Andressen 氏の協力のもと情報収集し、European Sperm Bank を実際に訪問して、精子バンクのシステムや精子ドナーの情報管理システム、出生者からの問い合わせに対する対応などについて情報収集した。</p>
<p>ノルウェーにて現地調査を実施</p>	<p>2019 年 9 月 12 日~9 月 15 日、コペンハーゲン、オスロを訪問し、現地の研究者から、ノルウェーの法律 <i>Lov om humanmedisinsk bruk av bioteknologi</i> (Act on human medical use of biotechnology-バイオテクノロジーのヒト医療への利用に関する法律) が制定された際に、ドナーの匿名性を廃止し、精子提供で出生した人の出自を知る権利が盛り込まれた経緯等について情報収集。</p>

生殖・身体とジェンダー 研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 C (課題番号:16K12111)

AID で生まれた人の「出自を知る権利」を保障するための教材作成に関する研究

【研究代表者】 清水清美 (城西国際大学教授)

【研究分担者】 仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【期間】 2016～2019 年度

【概要】

日本では提供精子による人工授精が 70 年以上も実施され、精子提供者は匿名を原則としてきた。しかし諸外国では、子の福祉を考慮し、ドナーの匿名性を廃止する動きが広がっている。本研究は精子提供の利用や精子ドナーになることを検討している人が、出生者の出自を知る権利の保障の重要性を理解できるような資料の作成を最終目的とする。

【研究内容・成果】

勉強会での報告	すまいる親の会 (AID で子を持った親の会) の勉強会 (2019 年 12 月 21 日、城西国際大学) にて、『子どもへのテリングを考える—イギリスの事例から』と題して報告。
科学研究費助成事業の研究成果報告書の執筆と発行	仙波由加里「子どもへのテリングを考える—イギリスの事例から」『私たちが大切にしたいもの—AID で家族になった人達の告知への思いと実践—』(2020 年 3 月、科研事業、清水 (代表)、久慈、仙波) pp.106-115)

公益財団法人トヨタ財団 2016 年度研究助成プログラム (B) 個人研究助成
生殖補助技術で形成される家族についての研究

【研究担当】 仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【期間】 2017 年 5 月～2020 年 3 月

【概要】

近年、日本でも、生殖補助医療がますます一般化し、技術の需要も技術での出生児数も年々増加している。本研究では特に、第三者が介入する生殖技術で形成された家族について、国内外の家族へのインタビューを通して、家族の成り立ちを子どもたちとどのように共有し、家族関係を築いているのかを探る。

【研究内容・成果】

報告書の作成と発行

トヨタ財団 2016 年度研究助成プログラム報告書『血のつながりを越えて 提供精子・提供卵子・養子でできた家族の物語』(2020 年 2 月、仙波由加里、人間と歴史社)

投稿論文の掲載

仙波由加里「どのような人が理想の配偶子ドナーとなりうるか—ニュージーランドと英国のドナーたちの経験から—」『生命倫理』(Vol.29 No.1) 2019 年 9 月、pp.69-84.

(Ⅲ) 経済・移動とジェンダー

「経済・移動とジェンダー」の研究プロジェクトでは、グローバル化の下での生産領域・再生産領域・金融領域のマクロな変容を見据えつつ、人びとの経済的営為や移動と滞留をめぐる主体的意識といったマイクロ次元での変化、ローカルな法秩序や制度、人びとのネットワークといったメゾレベルでの変化がどのように起きているかをジェンダー視点から分析する。

2019 年度には平野恵子がメンバーに加わったことで、「経済・移動とジェンダー」の研究領域はますます活性化した。7 月には日本フェミニスト経済学会 2019 年度大会の共通論題「東南アジアの経済成長とジェンダー：女性の移動・労働・定住」において平野が報告を行い、大橋史恵が討論者を務めた。10 月にはフェミニスト経済学の発展を牽引してきたマクロ経済学者のダイアン・エルソン氏を講師に招いて、国際ワークショップを実施した。平野を含む 3 人の討論者による報告とエルソン氏による講評をふまえ、開発とジェンダーの枠組みをいかに再評価するかをめぐって質の高いディスカッションを行うことができた。2020 年 2 月には、大橋と平野が執筆者として参加した『家事労働の国際社会学——ディーセント・ワークを求めて』（伊藤るり編著、人文書院）が、日本学術振興会の研究成果公開促進費を受けて出版された。同書は「国際移動とジェンダー研究会」（Research Collective on International Migration and Gender、通称 IMAGE 研）が、15 年以上にわたって取り組んできた移住家事労働者に関する国際的・学際的な共同研究の成果である。なお、IMAGE 研はジェンダー研究所の前身であるジェンダー研究センターを拠点に 2000 年に立ち上げられたグループである。この共同研究の蓄積が、ジェンダー研究所における「経済・移動とジェンダー」プロジェクトの精力的な活動につながっている。

IGS 研究プロジェクト

資本と身体ジェンダー分析：資本機能の変化と『放逐』される人々

【研究担当】 足立眞理子 (IGS 客員研究員)

【メンバー】 大橋史恵 (IGS 准教授)、板井広明 (IGS 特任講師)

【概要】

本プロジェクト「資本と身体ジェンダー分析：資本機能の変化と『放逐』される人々」は、グローバル金融危機以降の資本の中核機能の変化を分析する。サスキア・サッセンの「放逐 expulsions」概念に着目して、従来の身体断片化や排除／包摂の概念では把握不能な「放逐」の「常態化」をジェンダー分析の視点から行う。

【研究内容・成果】

シンポジウム登壇

国際基督教大学 緊急シンポジウム「学問の自由とジェンダー研究：ハンガリー政府のジェンダー研究禁止問題と日本からの応答」（2019年6月8日）における足立眞理子の登壇。

論文

足立眞理子「お茶の水女子大学ジェンダー研究センターの経験 排除と過剰包摂のポリティクス」、『世界』(927)、岩波書店、2019年、pp.232-240.

論文

足立眞理子「ローザ・ルクセンブルク再審：新しい収奪の形態をめぐって」『思想』(1148)、岩波書店、2019年、pp.5-22.

経済・移動とジェンダー 研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 B (課題番号: 17H02247)

新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー：インド・フィリピン・中国の国際比較

【研究代表者】堀芳枝 (獨協大学教授)

【研究分担者】大橋史恵 (IGS 准教授)、足立眞理子 (IGS 客員研究員)

長田華子 (茨城大学准教授)、落合絵美 (岐阜大学特任助教)

小松寛 (千葉大学特任研究員)

【期間】2017～2019 年度

【概要】

本研究は 2000 年代に入ってフィリピン、インド、中国でサービス部門の国際分業として展開し始めているビジネス・プロセス・アウトソーシング (BPO) の国際資本移転の動向と女性の労働、社会変容についての国際比較をおこなう。最終的には新興アジアのサービス部門の国際分業論の構築をめざす。

【研究内容・成果】

シンポジウム登壇	日本フェミニスト経済学会 2019 年大会 (於: 北とびあ (東京都北区)、2019 年 7 月 13 日 (土)) の共通論題として「東南アジアの経済成長とジェンダー：女性の移動・労働・定住」を企画した。本プロジェクトの研究代表者である堀芳枝が座長および報告者を、足立眞理子と大橋史恵が討論者を務めた。ジェンダー研究所からは平野恵子も報告者として参加している。(本報告書 86 頁参照)
報告書刊行	研究代表者と研究分担者全員が執筆した論文が所収された報告書『新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー インド・フィリピン・中国の国際比較』(2017-19 年度 JSPS 科学研究費補助金、研究成果報告書、研究代表 堀芳枝 (獨協大学)) が 2020 年 3 月に刊行された。
研究会開催	2 回にわたって研究会 (非公開) をおこなった。1 回目の研究会 (2019 年 7 月 12 日) には巢内尚子氏を招いてベトナムにおける BPO 産業の動向についてヒアリングしたほか、研究分担者のうち長田・落合が中間報告をおこなった。2 回目の研究会 (9 月 21 日) では研究分担者全員が中間報告をおこない、今後の研究の発展に向けてディスカッションをおこなった。
論文	落合絵美「シンガポールにおける女性の老後——年金制度が内包するジェンダー・インパクト」『We Learn』(781)、2019 年、pp.8-9。
書評	堀芳枝「書評と紹介 太田和宏著『貧困の社会構造分析：なぜフィリピンは貧困を克服できないのか』『大原社会問題研究所雑誌(724)』、2019 年、pp.74-78.

経済・移動とジェンダー 研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 B (課題番号: 19H01578)

再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯

【研究代表者】 定松文 (恵泉女学園大学教授)

【研究分担者】 小ヶ谷千穂 (フェリス女学院大学教授)、大橋史恵 (IGS 准教授)
 平野恵子 (IGS 特任リサーチフェロー)、伊藤るり (津田塾大学教授)
 徐阿貴 (福岡女子大学准教授)

【期間】 2019～2021 年度

【概要】

本研究は、再生産労働の国際分業が進展する日本において、次の二点に焦点を当て実証的に検討する。第一に歴史的視点からの雇用主—派遣企業—労働者の非対称的な関係、第二に家事・ケア労働者が有する限定的社会関係資本から選択する行為や集合行為による、労働者を取り巻く制度の変容。

【研究内容・成果】

論文	平野恵子, 2019, 「インドネシア人移住・家事労働者を取り巻く「非・安全」な制度への取り組み」『学術の動向』24 (6)、pp.20-23.
学会報告	平野恵子, 「インドネシアの移住・家事労働者——出稼ぎ、都市化、組織化」日本フェミニスト経済学会・共通論題「東南アジアの経済成長とジェンダー——女性の移動・労働・定住」於北とぴあ (東京都) (2019 年 7 月 13 日)
現地調査	介護福祉士の専門学校 (神奈川県) を訪問・見学したほか、校長、教員や中国人の学生らへの簡単なヒアリングを実施した。
研究会	3 回にわたって研究会 (非公開) をおこなった。第 1 回研究会 (2019 年 5 月 18 日、於お茶の水女子大学) では分担者全員による今後の研究全体についての打ち合わせをおこなった。第 2 回研究会 (7 月 14 日、於津田塾大学) では坂井博美氏 (南山大学) に日本の高度経済期における「女中」についての講義をしていただいた。また研究代表者の定松文が日本における家事労働の先行研究の系譜を整理し、ディスカッションをおこなった。第 3 回研究会 (12 月 15 日、於津田塾大学) では 2019 年度中におこなった調査の中間報告をおこなった。

経済・移動とジェンダー 研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 C (課題番号: 19K12603)

香港における移住女性の再生産労働力配置: 「グローバル・シティ」のジェンダー分析

【研究代表者】大橋史恵 (IGS 准教授)

【期間】2019~2021 年度

【概要】

本研究は、香港社会において異なる移住女性による再生産労働力がどのように配置されてきたかを、中国人家事労働者と外国籍家事労働者およびその雇用主を対象としたオーラル・ヒストリーの聞き取りから明らかにするものである。香港が輸出志向工業化路線から東アジアの金融・貿易サービスの中枢を成す「グローバル・シティ」へと転換した時期は、外国籍の家事労働者の受け入れが拡大していくとともに、主に広東省に出自をもつ中国人女性の労働力配置に変化が生じた時期と重なる。1980 年代末から今日までの香港の社会経済構造の変動において、トランスナショナルにあるいはトランスローカルに移動して家事労働者になった女性たちはどのように受け入れられたのか。異なるケアの担い手たち（移住女性）と受け手たち（雇用主）の「ケアの記憶」を通じて香港の再生産領域の変化をとらえたい。

初年度にあたる 2019 年度は、香港における民主化運動の激化と重なり、「ケアの記憶」についての聞き取りは実現しなかった。しかしアーカイブでの調査を通じて新たな知見を獲得するに至り、その成果を 2020 年 2 月に刊行された『家事労働の国際社会学』所収の論文に部分的に反映させることができた。

【研究内容・成果】

書籍 (共著)

大橋史恵「香港社会の家事労働者——『中国』と『外国』の狭間における文壇と連帯」伊藤るり編著『家事労働の国際社会学——ディーセント・ワークを求めて』、人文書院、2020 年、pp.108-138.

現地調査および学術交流

2019 年 10 月末から 11 月初旬にかけて香港で現地調査を行った。家事労働者の労働運動の組織化をサポートしている HKCTU (香港職工盟) のフィッシュ・イップ氏への聞き取りをしたほか、図書館等のアーカイブから 1960 年代から今日までの香港社会における中国人家事労働者と外国人家事労働者についての資料調査を行った。また、香港浸會大学における学術交流会に参加した。

IGS 研究プロジェクト

送出し国から見た国際労働力移動のジェンダー分析

【研究担当】 平野恵子（IGS 特任リサーチフェロー）

【概要】

国際労働力移動は、グローバルな政治経済状況や受入国における移民政策のみならず、送出し国の政治、経済、文化といった種々の要因に規定される。本研究では、二つの事例研究から、送出し国からみた国際労働力移動を考える。具体的には、1) 墨米間の労働力移動、2) 2019年インドネシア選挙（大統領選挙、総選挙）における海外雇用政策の争点化。

【研究内容・成果】

IGS セミナー企画・運営

“Gender and Politics in Indonesia after 2019 Election”

講師：Dr. Ani Widyani Soetjipto（インドネシア大学教員）

討論：大木直子（IGL）、司会：平野恵子（IGS）

言語：英語

2020年1月30日にインドネシア大学教員でジェンダーと政治を専門とする Ani Widyani Soetjipto 氏を招き、2019年に実施された総選挙分析をジェンダーの観点からおこなうセミナーを企画、開催した。討論は、Soetjipto 氏と同じくジェンダーと政治が専門の大木氏が担当した。高校生を含む幅広い年齢層の参加者がインドネシアにおけるジェンダー課題や女性候補者の現状について学ぶとともに、日本におけるクオータ制度導入の可能性について議論した。（本報告書 73 頁参照）
なお、本セミナーの内容は次年度 IGS ブックレットとして刊行予定である。

経済・移動とジェンダー 研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 A (課題番号: 19H00607)

移民受入れ国-送出し国の政策相互連関: 国際社会学からの比較研究

【研究代表者】 小井土彰宏 (一橋大学教授)

【研究分担者】 伊藤るり (津田塾大学教授)、上林千恵子 (法政大学教授)

鈴木江理子 (国土舘大学教授)、塩原良和 (慶應義塾大学教授)

宣元錫 (大阪経済法科大学等研究員)、柄谷利恵子 (関西大学教授)

定松文 (恵泉女学園大学教授)、園部裕子 (香川大学教授)

森千香子 (同志社大学教授)、北川将之 (神戸女学院大学教授)

毛利さとみ (恵羅さとみ) (成蹊大学研究員)、眞住優助 (金沢大学講師)

堀井里子 (国際教養大学助教)、平野恵子 (IGS 特任リサーチフェロー)

【期間】 2019~2021 年度

【概要】

本研究は、移民をめぐる諸問題を、受入れ国および送出し国における諸政策の動的連関が及ぼす影響から考察する。分担者は、インドネシアの海外雇用政策分析を担当し、2019 年度は、労働省など政策担当者に聞き取りを実施する。

【研究内容・成果】

現地調査

2019 年度は、インドネシアにおいて現地調査を実施した。技能実習(介護)および特定技能に関わる仲介業者にインタビュー調査をおこなった。また、監督官庁の一つである BP2MI (インドネシア人移住労働者保護庁) へのインタビュー調査もおこなった。

科学研究費基盤研究 C (課題番号: 17K02067)

現代インドネシアにおける『移住・家事労働者』の変容

【研究代表者】平野恵子 (IGS 特任リサーチフェロー)

【期間】2017~2020 年度

【概要】

本研究は、インドネシアにおける「移住・家事労働者」の変容を、移民政策および国内家事労働者の派遣形態の変化から検討する。

本研究の3年目にあたる2019年度は、2年目までに得られた知見を学術誌論文や書籍所収論文において発表するとともに、暫定的な調査知見を学会にて報告し今後の研究につなげるためのフィードバックを得た。また、本研究の調査課題のうち、①移住・家事労働者を「技能化」することの含意、②新中間層をターゲットとした新たな派遣型家事労働サービスについて、インタビュー調査および現地の観察を実施した。

【研究内容・成果】

論文	平野恵子, 2019, 「インドネシア人移住・家事労働者を取り巻く「非・安全」な制度への取り組み」『学術の動向』24 (6)、pp.20-23.
論文	平野恵子, 2020, 「移住家事労働者が帰還後ジャカルタで家事労働者になるとき」『インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合 (報告書)』 pp.17-26.
書籍 (共著)	平野恵子, 2020, 「第3章インドネシアにおける移住・家事労働者の権利保護——『技能化』と組織化」伊藤るり編著, 『家事労働の国際社会学』, 人文書院, pp.82-107.
学会報告	平野恵子, 2019, 「インドネシアの移住・家事労働者——出稼ぎ、都市化、組織化」日本フェミニスト経済学会・共通論題「東南アジアの経済成長とジェンダー——女性の移動・労働・定住」於北とぴあ (2019年7月13日)
セミナー報告	平野恵子, "Gig-economy and Unionization in Reproductive Labor" in IGS Seminar on "Gender and Development Revisited: Dialogue with Dian Elson" at Ochanomizu University (2019年10月22日) (本報告書62頁参照)
学会報告	平野恵子, "Returning home: when Indonesian migrant domestic worker become local domestic worker" in SEASIA Biennial Conference 2019 at Academia Sinica, Taipei (2019年12月7日)

経済・移動とジェンダー 研究プロジェクト

科学研究費基盤研究 C (課題番号: 17K02051)

インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合

【研究代表者】 中谷潤子 (大阪産業大学准教授)

【研究分担者】 平野恵子 (IGS 特任リサーチフェロー)、北村由美 (京都大学准教授)

【期間】 2017～2019 年度

【概要】

本研究は、インドネシア人移住労働者の再統合について、帰還後のライフステージ構築の過程を、本人や家族、コミュニティメンバーへの聞き取り調査をもとに明らかにする。分担者(平野)は特に、ジャカルタ首都圏における家事労働者組合で、移住家事労働を経験する組合員に帰還後の職業選択につき聞き取りをおこない上記課題を明らかにした。

最終年度である 2019 年は、Academia Sinica (台北)において共同パネル報告を実施するとともに、3 年間の成果を報告書『インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合』にまとめ刊行した。

【研究内容・成果】

論文

平野恵子, 2020, 「移住家事労働者が帰還後ジャカルタで家事労働者になるとき」『インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合 (報告書)』 pp.17-26.

学会報告

平野恵子, "Returning home: when Indonesian migrant domestic worker become local domestic worker" in SEASIA Biennial Conference 2019 at Academia Sinica, Taipei (2019 年 12 月 7 日)

▶ 2019 年度 外部資金獲得状況

国内外における競争的研究資金の高い獲得実績

国際的研究拠点形成のための共同研究や連携プロジェクトの実施のための研究資金は、ジェンダー研究所の研究基盤形成のために欠かせない。お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構や研究所の共通課題に加え、研究所所属の教員及び研究者は、独自に個別研究課題を設定し、多くの外部資金を獲得して研究活動を行っている。2019 年度からはノルウェーリサーチカウンシル国際共同研究助成金（INTPART）を受けて、ノルウェー科学技術大学とジェンダー研究所の国際共同研究「ジェンダー平等／ダイバーシティ：ノルウェー・日本共同研究」を開始した。

またこの他に 2019 年度は新規採択を 5 件獲得した。5 件とも国内最大の科学研究支援機構、日本学術振興会（JSPS）の研究助成による新規採択であり、しかもこのうち 3 件はジェンダー研究所内教員等研究者が研究代表者をつとめるものである。具体的に見ると、科学研究費基盤研究 A（課題番号：19H00607）「移民受入れ国-送出国の政策相互連関：国際社会学からの比較研究」（研究分担者：平野恵子）、科学研究費基盤研究 B（課題番号：19H01578）「再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯」（研究分担者：大橋史恵、平野恵子）、科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K12604）「ジェンダークオータの政治学：制度化と抵抗」（研究代表者：申琪榮）、科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K12603）「香港における移住女性の再生産労働力配置：「グローバル・シティ」のジェンダー分析」（研究代表者：大橋史恵）、科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K01570）「18 世紀末ブリテンにおける女性論の諸相：功利主義的フェミニズムの可能性」（研究代表者：板井広明）である。

継続採択として、研究所教員等研究者が研究代表を務める課題は、科学研究費基盤研究 C（課題番号：18K00034）「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究」（研究代表者：仙波由加里）、科学研究費基盤研究 C（課題番号：17K02067）「現代インドネシアにおける『移住・家事労働者』の変容」（研究代表者：平野恵子）、公益財団法人トヨタ財団 2016 年度研究助成プログラム（B）個人研究助成「生殖補助技術で形成される家族についての研究」（研究代表者：仙波由加里）である。また、科学研究費基盤研究 B（課題番号：18H00937）「「男性性のゆらぎ」の現状と課題」（研究分担者：石井クンツ昌子）、科学研究費基盤研究 B（課題番号：18H00817）「女性の政治参画の障壁：国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査」（研究分担者：申琪榮）、科学研究費基盤研究 B（課題番号：17H02247）「新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー インド・フィリピン・中国の国際比較」（研究分担者：大橋史恵、足立眞理子）、科学研究費基盤研究 C（課題番号：16K12111）「AID で生まれた人の「出自を知る権利」を保障するための教材作成に関する研究」（研究分担者：仙波由加里）、科学研究費基盤研究 C（課題番号：17K02051）「インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合」（研究分担者：平野恵子）には、研究所メンバーが 2019 年度も研究分担者として参加した。

外部資金の獲得は、研究所が質の高い研究を行うために欠かせないが、単なる研究資金を調達すること以上の意味を持つ。競争的資金への挑戦は、研究所のメンバーらが各自専門領域で優れた成果を目指す動機を付与するとともに、分担者として研究所共通のプロジェクトや国内外の研究ネットワークに参加し、先端研究者らとの交流を進める機会を提供する。総じて、今年度研究所構成メンバーによる優れた外部資金獲得状況は、そのような好循環に基づき、研究所の研究活動が高く評価された結果と捉え、来年度につなげたい。

競争的外部資金による研究プロジェクト一覧

プロジェクト名称	期間（年度）	担当
科学研究費基盤研究 A（課題番号：19H00607） 移民受入れ国-送出し国の政策相互連関：国際社会学からの比較研究	2019～2021	平野 (分担者)
科学研究費基盤研究 B（課題番号：18H00937） 「男性性のゆらぎ」の現状と課題	2018～2020	石井 (分担者)
科学研究費基盤研究 B（課題番号：18H00817） 女性の政治参画の障壁：国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査	2018～2020	申 (分担者)
科学研究費基盤研究 B（課題番号：17H02247） 新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー インド・フィリピン・ 中国の国際比較	2017～2019	大橋 足立 (分担者)
科学研究費基盤研究 B（課題番号：19H01578） 再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜 と連帯	2019～2021	大橋 平野 (分担者)
科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K12604） ジェンダークオータの政治学：制度化と抵抗	2019～2021	申
科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K12603） 香港における移住女性の再生産労働力配置：「グローバル・シティ」のジェ ンダー分析	2019～2021	大橋
科学研究費基盤研究 C（課題番号：19K01570） 18 世紀末ブリテンにおける女性論の諸相：功利主義的フェミニズムの可 可能性	2019～2021	板井
科学研究費基盤研究 C（課題番号：18K00034） 諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関 する研究	2018～2020	仙波
科学研究費基盤研究 C（課題番号：17K02067） 現代インドネシアにおける『移住・家事労働者』の変容	2017～2020	平野
科学研究費基盤研究 C（課題番号：16K12111） AID で生まれた人の「出自を知る権利」を保障するための教材作成に関す る研究	2016～2019	仙波 (分担者)
科学研究費基盤研究 C（課題番号：17K02051） インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再 統合	2017～2019	平野 (分担者)
公益財団法人トヨタ財団 2016 年度研究助成プログラム (B) 個人研究助成 生殖補助技術で形成される家族についての研究	2017～2019	仙波
ノルウェーリサーチカウンスル国際共同研究助成金 (INTPART) ジェンダー平等／ダイバーシティ：ノルウェー・日本共同研究	2019～2021	石井・申・ 大橋・仙波

2019年度 学会等活動一覧

石井クンツ昌子 (所長)

日本家族社会学会 (会長)、日本学術会議：連携会員／社会統計調査アーカイブ分科会 (委員長)／WEB 調査の課題に関する検討分科会 (幹事)／新しい社会的課題の解決に関する総合的検討分科会 (幹事)／人口縮小社会における問題解決のための検討委員会、日本社会学会: *International Journal of Japanese Sociology* (査読者)、日本家政学会家族関係部会、社会学系コンソーシアム (評議員)、福井県男女共同参画審議会 (会長)、National Council on Family Relations (Legacy Circle Member)、*Child Studies in Diverse Contexts* (編集委員)、中央大学社会科学研究所客員研究員

申琪榮 (准教授)

International Political Science Association、American Political Science Association、European Conference on Gender and Politics、International Association for Feminist Economics、日本政治学会 (分野別研究会「ジェンダーと政治研究会」、企画委員、書評委員)、日本フェミニスト経済学会、日本社会政策学会、ソウル大学日本研究所『日本批評』海外編集委員、釜山大学女性学研究所『女性学研究』編集委員、ソウル大学比較地域秩序研究会共同研究員、日本比較政治学会、「女性・戦争・人権」学会

大橋史恵 (准教授)

International Association for Feminist Economics、日本社会学会、関東社会学会、日本フェミニスト経済学会 (幹事会役員、『経済社会とジェンダー』編集委員)、ジェンダー史学会 (常任理事)、現代中国学会、中国女性史研究会、経済理論学会分野別ジェンダー分科会

板井広明 (特任講師)

経済学史学会、日本イギリス哲学会、社会思想史学会、政治思想学会、日本フェミニスト経済学会 (幹事)、日本有機農業学会、経済理論学会 (分野別ジェンダー分科会コアメンバー)

仙波由加里 (特任 RF)

日本医学哲学・倫理学会 (国際誌編集委員)、日本生命倫理学会 (評議員)、日本生殖看護学会、European Society of Human Reproduction and Embryology (ESHRE)

平野恵子 (特任 RF)

International Association for Feminist Economics、日本社会学会、国際ジェンダー学会 (理事・評議員)、日本フェミニスト経済学会 (監査)、移民政策学会、アジア政経学会、東南アジア学会

3.

国際シンポジウム・ セミナー

2019年度 国際シンポジウム・
セミナー概要

主催国際シンポジウム詳細

共催国際シンポジウム詳細

主催 IGS セミナー詳細

主催 IGS 研究会詳細

後援シンポジウム

▶ 2019 年度 国際シンポジウム・セミナー概要

専門性の高い学際的なイベントを広く一般に公開

2019 年度も、IGS では精力的にシンポジウム、セミナーを開催した。主催国際シンポジウムでは、冷戦期における女性の新たな可能性の模索と、身体・人種・アイデンティティを主軸にトランスジェンダー研究の最前線というテーマで多彩な登壇者を迎えた。共催国際シンポジウムでは、19 世紀末以降の中国の都市空間における女性の解放を「踊る」行為に着目してとりあげ、議論が行なわれた。セミナーでは、招聘教授による 1950 年代のファッションショーのフェミニスト的考察について、生殖領域シリーズのセミナーでは生殖補助医療と男性性について、専門性の高い報告が行なわれた。また 19 世紀ブリテンの思想史、開発とジェンダー、トランスジェンダーの経験、日本における女らしさの表象、インドネシアの政治分析を取り上げたものや、6 人の登壇者による 19 世紀仏英のフェミニズム再考といったセミナーもあり、学内外から多くの参加者を集めた。本研究所の事業は男女共同参画社会の実現に資する、相応の社会的貢献になっていると思われる。国際シンポジウムや理論・歴史・実証の諸分野にまたがるセミナー企画は、国内外の研究ネットワークの構築とジェンダー研究の発展に確実に貢献しているといえる。

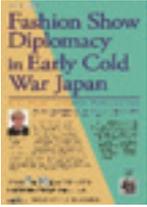
IGS 主催 国際シンポジウム

イベント名	参照
 <p>国際シンポジウム（特別招聘教授プロジェクト） 哲学者と皇太子妃：冷戦期日本における自由と愛と民主主義 The Philosopher and the Princess: Freedom, Love, and Democracy in Cold War Japan</p>	47 頁
 <p>国際シンポジウム トランスジェンダーが問うてきたこと：身体・人種・アイデンティティ Transgender Questions: Body, Race and Identity</p>	50 頁

IGS 共催 国際シンポジウム

イベント名	参照
 <p>国際シンポジウム 踊る中国：都市空間における身体とジェンダー 舞動的中國：城市空間的的身體與性別</p>	53 頁

IGS 主催 IGS セミナー

	イベント名	参照
	IGS 英語セミナー（特別招聘教授プロジェクト） Fashion Show Diplomacy in Early Cold War Japan A Critical Feminist Perspective （冷戦初期の日本におけるファッションショー外交：フェミニスト視点からの批判的考察）	56 頁
	IGS セミナー（生殖領域シリーズ） 生殖医療技術と男性性	58 頁
	IGS セミナー J.S.ミルにおけるデモクラシーと女性参政権	60 頁
	IGS 英語セミナー Gender and Development Revisited Dialogues with Diane Elson （「ジェンダーと開発」を問い直す：ダイアン・エルソンとの対話）	62 頁
	IGS 英語セミナー（INTPART プロジェクト） Legal Gender Recognition & Messy Trans Experiences in Norway （ノルウェーの性別自己決定権法制とトランスジェンダーの経験の複雑性）	64 頁
	IGS セミナー 日本における女らしさの表象	66 頁
	IGS セミナー 持続可能な社会をめざすエンパワメントの教育 ジェンダーの視点から	68 頁
	IGS 英語セミナー A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives Family, Society, and Gender （フランスの視点からの思想史ワークショップ：家族、社会、ジェンダー）	70 頁

IGS 主催 IGS セミナー

	イベント名	参照
	IGS 英語セミナー Gender and Politics in Indonesia after 2019 Election (インドネシアにおけるジェンダーと政治：2019 年総選挙分析)	73 頁
	IGS セミナー (生殖領域シリーズ) 映画『性別が、ない!』上映&パネルディスカッション 性別二元制規範を考える	76 頁
	IGS セミナー コンドルセの政治社会像と女性への視点	78 頁

IGS 主催 IGS 研究会

	イベント名	参照
	IGS 研究会 Shared Visions for Korea-Japan Relations Globalism, Peace, and Gender Issue (グローバル化と平和)	80 頁
	IGS 研究会 お茶大・東大院生合同セミナー トランスジェンダーが問うてきたこと 身体・人種・アイデンティティ	83 頁
	IGS 研究会 Exploring How Women's Contraceptive Choices Can Be Influenced by Their Views on Abortion	84 頁

IGS 後援 シンポジウム

	イベント名	参照
	日本フェミニスト経済学会 2019 年大会 東南アジアの経済成長とジェンダー 女性の移動・労働・定住	86 頁

▶ 2019年度 主催国際シンポジウム詳細

IGS 国際シンポジウム（特別招聘教授プロジェクト）

哲学者と皇太子妃

冷戦期日本における自由と愛と民主主義

【日時】2019年5月19日（日）13:30～16:30

【会場】国際交流留学生プラザ多目的ホール

【コーディネーター】

ジャン・バズレイ（IGS 特別招聘教授／ノースカロライナ大学
チャペルヒル校教授）

【司会】大橋史恵（IGS 准教授）

【基調報告】

ジャン・バズレイ

「ロマンスの追憶が映し出す現在：60年後に振り返る 1959年皇
太子ご成婚」

ジュリア・ブロック（エモリー大学准教授）

「日本におけるボーヴォワール：『第二の性』の反響をたどる」

【コメンテーター】

北村文（津田塾大学講師）

ゲイ・ローリー（早稲田大学教授）

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英（同時通訳）

【参加者数】72名

【趣旨】

1950～60年代の経済成長と、女性の教育機会の拡大、女性雑誌の隆盛、そして中流意識の浸透は、女性たちに新しい可能性をもたらした。彼女たちにとっての新しい選択肢とは何だったのか？女性たちが自由、自己探求、愛という「夢」を実現させるには何が必要だったのか？本シンポジウムでは、フランス人フェミニスト哲学者のシモーヌ・ド・ボーヴォワールと美智子皇太子妃を取り上げ、この問いに迫る。自己表現、セクシュアリティ、社会との関わり方といった面では極端に異なる両者だが、いずれも、当時、大きな社会的影響力を持っていた。また、冷戦という時代背景を踏まえることで、哲学者と皇太子妃に関する議論から、1950～60年代の国際情勢の渦中に日本が自らをどのように位置づけたのかを見出すことができる。

【開催報告】

2019年5月19日（日）、お茶の水女子大学にて、国際シンポジウム「哲学者と皇太子妃：冷戦期日本



における自由と愛と民主主義」が開催された。本シンポジウムは、ジャン・バーズレイ特別招聘教授の企画によるものである。バーズレイ教授とエモリー大学のジュリア・ブロック准教授が基調報告を担当し、津田塾大学の北村文講師、早稲田大学のゲイ・ローリー教授がコメンテーター、ジェンダー研究所の大橋史恵准教授が司会を務めた。

戦後の新しい民主主義と経済成長は、1950～60年代の日本の若い女性たちに新たな希望をもたらした。当時の新しい女性の生き方のモデルとして注目を浴びた中には、フランス人哲学者のシモーヌ・ド・ボーヴォワールと美智子皇太子妃がいた。女性たちに経済的自立の必要性を説き、結婚という形式に縛られない恋愛を体現したボーヴォワールと、皇太子の妻となり、理想の主婦として家庭を守る美智子妃の姿は、一見正反対のようではあるが、女性たちに、自由と自己探求と愛という「夢」を提供したという点が共通していた。そのイメージの相似と相違について、バーズレイ氏は美智子妃について、ブロック氏はボーヴォワールについて、それぞれ報告した。

バーズレイ氏は、美智子妃が女性たちに与えた夢は、「プリンセスになること」であったと解説した。平民出身の女性が恋愛結婚により皇太子妃になるというのは、戦前ではあり得なかったシンデレラストoryである。1959年のご成婚は、「プリンセス」が象徴する若さと美しさと華やかさ、そして戦後民主主義の成果の投影であったといえる。そして母となった後も、皇室の慣例から脱し、自ら進んで子育てや家事にいそしんだ。専業主婦として公務に励む皇太子を支える「プリンセス主婦」の姿は、1960年代の戦後家族のモデルとなった。自由と自己探求と愛という「夢」を皇太子妃として実現させた「プリンセス像」を、メディアは熱心に取り上げ称賛し、世の若い女性たちはそれに憧れ、そのような生き方をめざしたのである。

それを良しとしなかった女性たちもいた。ブロック氏は、妻になり母になるという「キャリア」を拒絶する女性たちにとって、ボーヴォワールが『第二の性』で示した、経済的自立と職業的成功から得られる「自由」のビジョンは魅力的であったと説明した。戦後の急速な変化が一段落した1960年代、日本社会も政府も保守化の傾向をみせていた。プリンセス主婦の登場はこれに時期を同じくする。戦後の民主主義改革により男女平等が実現されると信じて育った世代は、目の前に立ちはだかる、「良妻賢母」的「女らしさ」を押しつける慣習の壁にぶつかることになった。実はボーヴォワールも同じような経験をしていたということが、1961年に日本語訳が出版された回想録『娘時代』に記されている。その壁を乗り越えて、経済的にも知的にも自立した立場を確立したこと、そして、サルトルとの自由な恋愛関係が、ボーヴォワールへの憧れを喚起したのである。

しかしその一方で、その女性解放の議論は「母性」や「女らしさ」の否定であると解釈し、ボーヴォワールを批判するフェミニストも存在した。ボーヴォワールが『第二の性』で「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」と強調した点は、現在は、「ジェンダー」として論じられている概念である。しかし、1953年に出版された日本語版の訳出には、この理解が不十分なための誤訳があり、結果として、ジェンダー規範を批判した文章が、女性の身体を否定するような表現に変えられてしまっていた。1986年のボーヴォワールの死に続く再評価、日本における女性学・ジェンダー研究の進展、「決定版」と銘打たれた『第二の性』の新訳本の刊行といった一連の動きのなかで、誤訳に起因する誤解は解消され、日本のフェミニストたちはボーヴォワールの思想を再発見するに至った。21世紀の今も、フェミニスト理論の重要文献としてボーヴォワールの作品は読み継がれ、根強く社会に残る旧来のジェンダー規範に挑もうとする現代女性たちにも勇気を与えているといえる。



コメンテーターの北村氏は、無意識に行ってしまいがちな、「日本人女性」カテゴリーによる一般化の危険性について論じた。美智子妃に憧れた女性たちも、ボーヴォワールを崇拝した女性たちも、「日本人女性」ではあるが、その生き方や考え方は対照的である。さらには、同時代を生きた女性たちのうちには、その2つの「都会の中流階級」グループに含まれない女性たちもいた。農村に目を向ければ、男性と肩を並べて農業に携わりながら、家事や子どもの世話にもっと時間を使いたいと思っている女性たち

がいた。いわば、ボーヴォワール流の自立と自由を獲得していながらも、美智子妃流の主婦になりたいと思う女性たちである。「日本人女性」として一括される中には、実は、多様性のみならず、階級構造や権力関係が存在するのだ。ボーヴォワールの哲学が先駆けとなった第2波フェミニズムと呼ばれる運動は、こうした女性の多様性を見過ごしていた。「女性」の定義については、近年のトランスジェンダーをめぐる社会課題への取り組みの中で活発に議論されている。ひとつのカテゴリーを提示する際には、必ず、そこには誰が含まれ、誰が排除されているかの疑問がつきまとう。北村氏自身、「『日本人女性』を語ることはできない」、という点に焦点を当てた研究を進めているとのことである。

これに続くローリー氏のコメントでは、ボーヴォワールが残した言葉の、現代における価値が論じられた。1966年の来日時、日比谷公会堂で行われた講演の題は「女性と知的創造」である。この中でボーヴォワールは、政治、哲学、芸術などのあらゆる分野で、女性が挙げた業績が少ないのは、能力の問題なのではないと説いた。読み書きが良くできた紫式部に対し、父親が、お前が男ならよかったのにと嘆いたことを例にあげ、男児ならば野心を持つように育てられ、女兒にはそうした期待がかけられない、といった社会的な原因こそが、女性の職業的な成功を阻んでいると指摘した。このように、知的創造とは、社会的に条件づけられているものであるからこそ、チャンスを得るために戦うことが大切だと、女性たちを鼓舞したのだ。ボーヴォワールが指摘したジェンダーの問題は、今なお挑戦が続けられている社会課題である。そして同時に、ジェンダー以外の要素によるマイノリティ、複数のマイノリティ要素により困難を抱える「インターセクショナルリティ」の社会課題なのである。半世紀前になされた自由と自己探求についてのボーヴォワールの提言は、21世紀となった現在の社会課題を考えるうえでも価値の高いものであり、大学教育の場でこれが読み続けられることに大きな意義がある。

質疑応答では、基調講演およびコメントで提示された議論がさらに深められた。実存主義哲学やセクシュアリティ、ジェンダー平等指標などが話題にあげられたが、特に、「翻訳」については、研究者として翻訳に取り組む立場でもある登壇者たちから、様々な発言があった。原文にある含みや文化背景もあわせて他の言語に翻訳することは、実際、難しい作業である。翻訳とは、単なる機械的な言葉の置き換え作業ではなく、翻訳者という媒体を通じた伝達である。そこには必ず、翻訳者の視点というものがあるため、「中立性」についての疑問がつきまとう。こうした異文化の交差における課題は、国際的な調査研究や成果発信をする研究者が、常に心に留め置く必要のある点であろう。冷戦初期の日本のジェンダーの様相というテーマに限らず、参加者にとって学ぶところの多いシンポジウムであった。

記録担当：吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー）

IGS 国際シンポジウム

トランスジェンダーが問うてきたこと 身体・人種・アイデンティティ

【日時】 2019年12月15日（日）14:00～17:30

【会場】 共通講義棟1号館304室

【総合司会】 申琪榮（IGS 准教授）

【挨拶】 石井クンツ昌子（お茶の水女子大学教授／IGS 所長）

【基調講演】

スーザン・ストライカー（イェール大学学長フェロー／女性・ジェンダー・セクシュアリティ研究招聘教授）

「How “Transgender” Travels: Thinking About Gender Variance in a Global Context」

【パネル司会】 石丸径一郎（お茶の水女子大学准教授）

【パネリスト】

清水晶子（東京大学教授）

「Imported Hatred?: Japan’s Transphobic Feminism in Transnational Context」

井谷聡子（関西大学准教授）

「On the ‘Feminist’ Discourse of Trans-exclusion from Sport」

ナエル・バンジー（トレント大学助教授）

「Troubling Trans: Necropolitics, Trans Bodies, and Genealogies of Governance」

【主催】 ジェンダー研究所

【共催】 東京大学清水晶子研究室、科研費 挑戦的萌芽研究「性的少数者の政治と多様な諸身体の連帯および共存をめぐる現状分析と理論構築」

【言語】 日英（同時通訳）

【参加者数】 119名

【趣旨】

お茶の水女子大学は2020年度からトランスジェンダー女性の入学受け入れを表明している。それをきっかけに日本でもトランス女性をめぐる激しい議論が巻き起こった。トランスジェンダーが可視化されることにより、従来の「女性」ジェンダー、セックスの考え方に画期的な変容の可能性もたらされると同時に、身体、アイデンティティ、セクシュアリティをめぐる複雑なパワー関係も浮き彫りになりつつある。本国際シンポジウムはトランスジェンダー研究の第一線で活躍している研究者が集まり、トランスジェンダーの歴史や論争が突きつけてきた課題を議論する。

【開催報告】

フェミニズムとトランスの権利運動は、多くの点で目標や関心を共有しているにもかかわらず、しば





しばしば緊張と摩擦も生み出してきた。女子大のトランス女性受け入れをめぐる主としてオンライン上で台頭している攻撃的なフェミニスト言説は、2つの運動の間の緊張とよりよい関係について、深く考える必要を示している。社会の高い関心を反映して、本シンポジウムには数日のうちに多数の申し込みが殺到した。

4人のパネリストは、トランスナショナルでインターセクショナルな視

角から、トランスジェンダーをめぐる論争をときほぐし、ジェンダー、セクシュアリティ、レイシズムにもとづく抑圧からの解放をめざす政治にとって、なぜトランスの人びとの解放が重要な課題であるのかを示した。

スーザン・ストライカー氏は基調講演で、トランスジェンダーという語と概念が、グローバルな空間と歴史のなかでどのような変遷を経てきたのかを、4つのナラティブを通してたどった。すなわち、(1) ジェンダー・ヴァリエーション（既存の性別に適合しない）人びとが、いかに病理化に抵抗して自らのためにトランスジェンダーという言葉を使うようになったのか、(2) 英語圏のフェミニストたちが、いかにジェンダーという概念を、トランスセクシュアルに関する医療心理学の議論から取り入れてきたのか、(3) アメリカの新帝国主義的な世界秩序の下で、トランスジェンダー概念がいかに国境を越えて流通することになったのか、(4) トランスジェンダーの人びとを危険視するような陰謀論的議論がいかに台頭してきたのか、である。

このような幅広い領域と歴史にわたる検討を通じて、ストライカー氏は、トランスジェンダーという概念はフェミニズムによる発明などではなく、セックスから区別されるジェンダーという概念それ自体が、インター／トランスセックスの人びとについて説明すると同時にその存在を封じ込めようとする医療心理学の試みから生じてきたことを指摘する。ストライカー氏の議論はまた、トランスジェンダーとフェミニズムをめぐる論争が、いかに歴史的な植民地主義、新自由主義的な差異の管理、自民族中心的なナショナリズムの台頭と切り離すことのできない関係にあるかを明らかにした。だからこそトランスの人びとの解放は、二元論的性秩序だけでなくレイシズムや植民地主義からの解放をめざすあらゆる運動にとって重要な課題なのである。

清水晶子氏は、近年日本のSNS上で台頭しているトランス嫌悪的なフェミニスト言説が、トランスナショナルな性格をもっていることを指摘したうえで、しかし、こうした言説は必ずしも海外から日本に「輸入された」とはいえないという。「フェミニズムはクィアを生み出し家族を破壊する」という2000年代初頭のジェンダー・バックラッシュに対し、保守的なフェミニストがとった反応は、「普通の女性たち」のために性的マイノリティとクィア政治を切り捨てるという防御的なものであった。清水氏は、右派の運動がトランス排除的なフェミニスト言説と接近する危険性を指摘し、主流派フェミニズムに真剣な注意を払うよう促した。

井谷聡子氏は、スポーツ競技という、もうひとつの厳格なジェンダー二元制にもとづく領域におけるトランス包摂をめぐる議論に焦点をあてた。国際オリンピック委員会（IOC）がトランスジェンダー選手の包摂に関するポリシーを明らかにして以来、スポーツにおけるトランスジェンダーの可視性は飛躍的に高まった一方で、バックラッシュも激化している。女子競技にトランス女性が参加することを「生物学的女性」にとってアンフェアであり危険だと主張するフェミニスト言説の担い手は、女性の権利やゲイ・レズビアンを擁護する人びとであるが、こうした主張は、男性は本来的に女性よりも優れているというセクシズムのみならず、植民地主義と人種主義にもルーツをもっている。このような差異にもとづく排除論の一方で、「生物学的女性」と「同じである」ことを根拠にした包摂論もまた、「真の」女性という基準を捏造し、クィアの身体を消し去るように作用しているのである。

ナエル・バンジー氏は、トランスジェンダーの可視性が高まる中で、どのトランスジェンダーの身体が、いかに可視化されているのかという問いを提示する。トランスフォビアの犠牲者は非白人のトランス女性に集中しているにも関わらず、犠牲者を公に悼むトランスナショナルな運動において可視化されるのは多くの場合白人であり、トランスフォビアとレイシズムの交差は後景に退いてしまう。その一方で、非白人のトランスジェンダーの暴力的な死はグローバルな空間でしばしば過剰に可視化され、想像された親密性のために消費されているのである。こうして、「9.11」後の世界において、「あそこ」における人種化されたトランスジェンダーの暴力的な死は、トランスジェンダーの権利が擁護される「ここ」の優位性をつくりだすとともに、トランスジェンダーをとりまく構造的な暴力を不可視化することになるのである。

ディスカッションでは、日本におけるトランスジェンダーをめぐる言説や、新自由主義とナショナリズム、メディアによる可視化／不可視化といった論点をめぐって活発な議論が交わされた。トランスフォビク言説とともに、「日本はつねにゲイ／トランス・フレンドリーな社会だった」という言説もまた排除を正当化しているという指摘、新自由主義的な政治において、マイノリティの権利が資源をめぐる競争として問題化されているという指摘は特に重要である。

シンポジウムを通して、シス女性とトランス女性、あるいはフェミニズムとトランス運動の対立とみえるものを、多様な抑圧が交錯する権力構造のなかでとらえなおしていく必要がさらに明らかになった。歴史的でトランスナショナルな広がりをもつ研究と運動の進展がいつそう期待される。

記録担当：本山央子（お茶の水女子大学ジェンダー学際研究専攻）



▶ 2019 年度 共催国際シンポジウム詳細

国際シンポジウム

踊る中国

都市空間における身体とジェンダー

【日時】 2019 年 6 月 22 日（土） 13:00～17:00

【会場】 本館 306 教室

【コーディネーター／司会】 大橋史恵（IGS 准教授）

【趣旨説明】 前山加奈子（中国女性史研究会）

【研究報告】

游鑑明（中央研究院近代史研究所）

「近代中国における女子体操」

星野幸代（名古屋大学人文学研究科教授）

「1920-30 年代上海ガールズ・ショー・ビジネスの隆盛と衰退」

大濱慶子（神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部教授）

「移動、越境する社交ダンスー上海租界から北京中南海へ」

【コメンテーター】

ジャン・バーズレイ（IGS 特別招聘教授／ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授）

江上幸子（中国女性史研究会／フェリス女学院大学国際交流学部名誉教授）

【共催】 ジェンダー研究所、中国女性史研究会（日本）

【言語】 日中（逐次通訳）

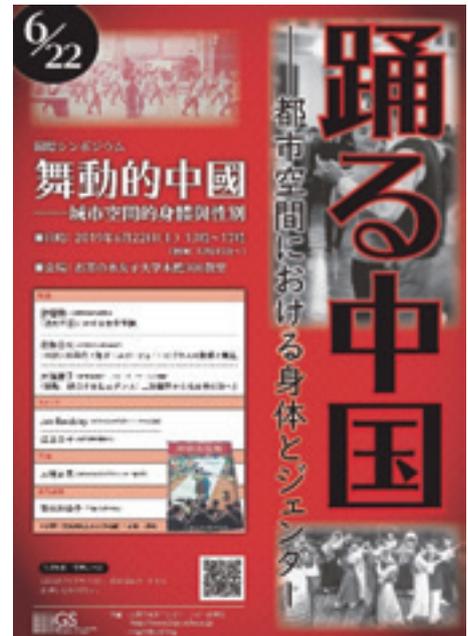
【参加者数】 67 名

【趣旨】

19 世紀末から中国の女性たちは、伝統的な風習であった纏足を解き、都市空間に活動の場を広げていった。このような女性の身体活動の大きな変化を象徴する「踊る」行為に着目し、女子学校の体操、上海のガールズ・ショー・ビジネス、社会主義下の娯楽文化へと生まれ変わった社交ダンスの側面からの報告を行う。それぞれの「踊る」女性たちを通して見えてくるものは何か、身体とジェンダーの視点から読み解くことを目指す。

【開催報告】

報告に先立ち、前山氏は趣旨説明の中で先行研究の少ない分野での三報告の貴重さに言及し、また予備知識として中国の慣習であった纏足について紹介した。纏足は前近代において中・上層クラスの女性に求められたジェンダー的な身体（静的な肢体、嬌羞する姿態）の中国における表れである。発育の不健全な活動に適さない肢体と貞節を守る女性を理想とする社会見識が、女性の動的行為を抑制したとの説明がなされた。纏足からの解放が踊る身体への第一歩であった。





游氏の報告は多数の貴重な写真や挿絵を使用し、学校教育が導入した女子体操がどのように中国女性の身体文化を変化させたかを明らかにした。

星野氏の報告は黎錦暉が主宰したガールズ・ショー・カンパニー、明月歌舞団の盛衰とそこで養成され、後に

映画女優に転身した王人美、黎莉莉の動向を追うことで、国語教育とショー・ビジネスとの結びつき及び踊ることによって生じた女性身体のジェンダー化について述べた。

大濱氏の報告は 20 世紀初頭にグローバルな航程を辿ってアジアに移入した社交ダンスが中国及び日本でどのように受容され、現地化し、発展を遂げたかを紹介した。

游報告によると、入学後、規則によって纏足を解いた女子生徒に対して、体操は楽しみながら行う遊戯から誘導的、漸進的に導入された。西洋諸国や日本に倣った体操科目の内容は、主に踊りながら歌う行進遊戯、舞踊、徒手体操、器械体操であったが、時代の要請から「尚武」精神を鼓舞する体操を取り入れる学校もあった。女子体操を通じて彼女たちは身体能力を向上させ、身体を躍動させたが、兵式体操の糸乱れぬ動作からはナショナリズムのもとで統制される身体という問題が、体操服からは見られる女性身体というジェンダーの問題が透けて見える。游報告に対して、バーズレイ氏のコメントは体操とダンスという視点から故郷南カリフォルニアの町の歴史を見直し、冷戦下の危機の時代に学校で軍事訓練を模倣した体操が導入されたこと、中学・高校のマーチング・チームは軍隊を模倣した行進を行いながら、女性らしさを強調した衣装で男子を応援することが求められたことを体験に基づいて紹介した。また欧米やアジアの女子生徒が複製されたように同期して動く写真からはテイラー主義の科学的管理が連想されると指摘した。楽しみながら健全な身体を育成することを目的とした体操やダンスが、近代国家によって女性の身体を効率的に管理し、求められる女性身体のあり方を浸透させ、国家の利益を増大させるために使用された可能性を示唆した。

星野報告によると、1920-30 年代に人気を博した明月歌舞団は、標準語の普及を図る国語教育者であった黎錦暉が、人格育成上の体育の重要性を主張する蔡元培の教育思想に触れ、歌と踊りで国語を習得させる方法を考案し、少女たちを歌って踊って標準語で話せる人材に育てて巡業を行ったものである。学校の体育で初めて西洋舞踊に出会った少女たちは、体育を重視する国語教育者から一時興行師になった黎錦暉によって、後の映画女優への道を開かれた。人気女優になった王人美や黎莉莉は、鍛えられた健全で美しい肢体でメディアに登場することになるが、それは男性視線のもとで女性身体が鑑賞、消費されたという意味でジェンダー化されたと言える。その一方で彼女たちは表現の主体者となり、人気女優の名声と地位を手に入れた。星野氏はこの構造を「一種の共犯関係?」と述べた。コメントの中で、バーズレイ氏は星野報告に関連して、露出した女性の身体が露出した男性の身体にはない方法で批判されることには、モダニティの言説が持つ構造的な問題が潜んでいると指摘した。その言説は、男性は行動するものであり、女性は表象するものであるとする。思考し、理性的に行動する男性は公共空間を支配する。しかし女性は感情や肉体に結びつけられ、男性と同じように公共空間を統率する権威を持たない。そのため、踊る女性の身体はやはり他者に操作される象徴となる。バーズレイ氏は「踊る女性は現代的ではないのかもしれない」という疑問を投げかけた。



大濱報告は、中国固有の歴史や政治的・社会的情勢及びジェンダー・セクシュアリティ文化の変容によって中国の社交ダンスが遂げた発展と再生を紹介した。アヘン戦争後（1850年代）、開港場に移住した西洋人のための娯楽であった社交ダンスは、20世紀初頭の近代女子教育による女性の纏足からの解放を経て、五四運動（1919）の自由恋愛言説等の影響を受け発展期を迎えた。南京国民政府の樹立（1927）、民族資本の成長によって急速に都市化した1930年代の上海において、社交ダンスは様々な人々の情念や欲望を呑み込んで隆盛を極めた。この間、社交ダンスの享受者は外交官や将校の家族、外国商人から中国人上流階級、都市中流階層の男性へと拡大、変化し、東洋人の身体を西洋風に改造してハイヒールとチャイナドレスを身に着けたダンサーの身体は新しい表象になり、商品化、客体化、序列化された。中華人民共和国建国（1949）後、社会主義的改造のもとでダンスホールは廃業、ダンサーには転職や自活が促されたが、社交ダンス自体は新社会・新生活における勤労者の文化的娯楽として推奨され、再生を遂げた。江上氏はコメントの中で、まず「踊る」女性身体が社会や国家から何を求められたのかを見ることで、近代中国の社会とその変化に対する理解を深めることができるのではないかとし、本来は身体を使って個人の内面を表現する「踊る」という行為が、国家のプロパガンダや、ナショナリズムの鼓舞や、抵抗のシンボルとして利用されることもあると述べた。その上で、大濱報告の中華民国期の国際都市上海の社交ダンスとダンサーに関連して、日本と中国の文学作品に描かれたダンサー表象を紹介した。江上氏は、ダンサーの身体や愛が、横光利一の『上海』や曹禺の『日の出』では、国際資本や中国国内資本、或いは社会変革者による争奪戦の対象や、彼らの力の争奪戦を反映するものになっていること、中国新感覚派小説では、ジェンダー支配の争奪戦を象徴するものになっていることを指摘した。

質疑応答では以下のような問題について議論が為された。中国における社交ダンスの包括性（民族的・性的少数派、体の不自由な人等々をどこまで取り込んで発展する可能性があるか）。延安でのダンス・パーティーの流行は、純粹にダンスの楽しさを知ったからというよりも、それは禁欲や貧窮の代償、不満解消を目的としたものだったのではないか。中華人民共和国建国後、党幹部がダンスの相手に指名する女性は多くが容姿端麗で、ダンスの相手に指名することは、往々にして性的交渉を求めることであったとされる。文革を描いた映画「青い嵐」にもそのような場面が出てくる。社交ダンスには社会主義下の娯楽文化、男女が対等な関係で向き合うものという以外に、別の意味があるのではないか。

本シンポジウムは中国近代史を理解するための新しい視点—「踊る」という行為—を提起した。この視点を通じて近代中国を見ると「踊る」女性身体によって生じたジェンダー構造の変化や「踊る」女性身体が反映する時代や社会の変化を知ることができると同時に、「踊る」女性身体が社会的・文化的に形成された性差別から解放されることの困難さを知ることにもなる。

記録担当：石井洋美（お茶の水女子大学比較社会文化学専攻博士後期課程）

▶ 2019 年度主催 IGS セミナー詳細

IGS 英語セミナー（特別招聘教授プロジェクト）

Fashion Show Diplomacy in Early Cold War Japan A Critical Feminist Perspective

（冷戦初期の日本におけるファッションショー外交
フェミニスト視点からの批判的考察）

【日時】 2019 年 7 月 10 日（水） 15:30～17:00

【会場】 国際交流留学生プラザ多目的ホール A

【講師】

ジャン・バーズレイ（IGS 特別招聘教授／ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授）

【主催】 ジェンダー研究所

【言語】 英語

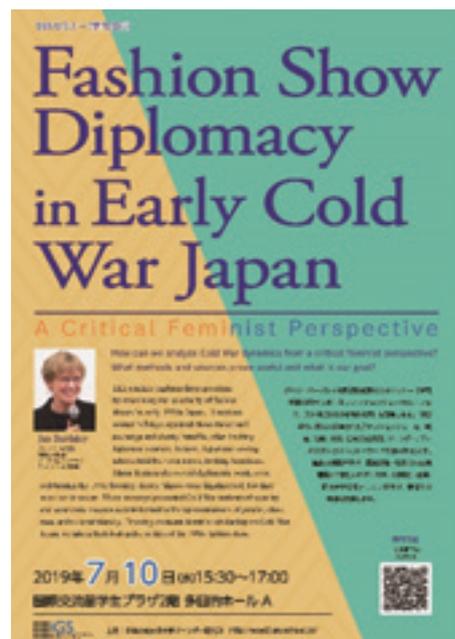
【参加者数】 16 名

【趣旨】

冷戦下の文化・社会的動態を批判的フェミニスト視点からはどのように分析できるだろうか？本セミナーでは、1950 年代前半の日本におけるファッションショー人気を分析することで、その問いに迫る。東京の米国人女性たちは、文化交流と慈善目的でファッションショーを企画し、それに日本人女性を招待した。日本の洋裁学校では、自分たちが開催するファッションショーに米国人を招待した。大規模なファッションショーは外交的な役割も果たしており、1951 年日米安全保障条約締結を祝うファッションショーも開催された。冷戦期日本に関するフェミニストによる研究の最新成果をもとに、1950 年代のファッションショーの政治性に新たな目を向ける。

【開催報告】

バーズレイ氏の研究関心は、戦後の日本において、民主主義という概念がどのようにパッケージされて女性たちに届けられたか、という点にある。当時の女性雑誌を開くと、マナーガイドやビューティーガイドを含むページのあちらこちらに、民主的な女性になるためのアドバイスが書かれている。民主主義社会の女性になるには、単に、投票に行くというだけではなく、民主的であることを体現する身体を持ち、化粧や髪形も含めて外見を変える必要があると示唆されていたのだ。そこで、バーズレイ氏は 1950 年代のビューティコンテストやファッションショーに着目し、その政治的側面の分析を進めた。本セミナーでは、1950 年代の日本でのファッションショーの隆盛は、占領期および冷戦初期の米軍の駐留に深く関連していることが指摘された。



米国の女性たちがファッションショーを行うようになったのは、第一次世界大戦後のことである。始まりは、東海岸のエリート女性のクラブが行う、傷病兵のための愛国的な慈善活動だった。その後ファッションショー文化は他の女性グループに広がりを見せ、アフリカ系米国人の女性グループや、アジア系米国人女性グループによるショーなども開催されるようになった。第二次大戦後、その文化は、米軍人の妻や GHQ で働く女性たちにより日本にもたらされた。様々な社会背景を持つ米国人女性により構成されたクラブでのファッションショーは、ファッションショーが好きであることを共通項とする、ある種平等な場となった。そして、米国人女性たちは、自分たちが開催するファッションショーに、日本人女性を招待した。そこでファッションモデルを務めた女性たちの装いやふるまいは、ただ美しいだけではなく、民主的な女性のモデルとなったのだ。そのようなファッションショーのあり方を、ジェンダー視点から批判的に考察するために有効な論考が紹介された。

『日本の冷戦』の著者、アン・シェリフは、日本の戦後は戦前との対比によって語られることが多いが、冷戦初期という視点を入れて分析する必要があると指摘している。1950年代のファッションショー文化については、前述のとおり、この点が鍵である。クリスティーナ・クラインは、『冷戦オリエンタリズム』において、アジアを舞台にした映画や小説が、米国内でのイデオロギー普及で果たした役割に言及している。それらの作品群が語るのは、米国は世界中に友人を作らなくてはいけない、ということであった。人と人とのつながりによって、米国は世界中の人々に自由をもたらすことができる。ヨーロッパの帝国主義とは異なり、違いを尊重しつつ、同じ価値観でつながるという考えも強調された。しかし、そこにはやはり帝国主義的な権力関係が存在していたことを、『デモクラシーの教育学』を記した小碓美鈴が「インペリアル・フェミニズム」という概念で説明している。来日した米国人女性たちの意識の中には、自分たちが手本となって、日本の女性たちに、米国式の女性の解放について教えようという考えがあったという。米国人女性がモデルを務め、日本人女性はその姿に憧れたファッションショーの図式には、この権力関係があるといえる。このようなファッションショーの場が持つ性格を上手く説明してくれるのが、マリー・プラットの「コンタクトゾーン」という概念である。コンタクトゾーンとは、異なる文化が会って衝突やもみ合いが発生する場であり、両者の力関係には強弱があることが常である。日本におけるファッションショーの場は、まず米国内の各地そして各社会階層から集まってきた女性たちのコンタクトゾーンであり、その女性たちと日本の女性たちのコンタクトゾーンであるという、複雑な構造がある。

歴史文化的背景と分析概念が整理されたところで、セミナーは、聴衆との議論を交えつつ進められた。日本人デザイナーの作品を審査するティナ・レザー賞の実施や、サンフランシスコ講和条約締結を祝賀してのファッションショーの開催、日本人モデルの養成など、このコンタクトゾーンで、どのような出来事が展開されたか示された。さらには、聴衆からのコメントを受けて、女性たちが自宅のミシンで服を縫う洋裁文化や、大量生産に伴うボディサイズの規格化、現代のファストファッションの背景にある

植民地主義の歴史、共産圏においてファッションが果たした役割などに話題は広がり、熱の入った議論が交わされた。本研究は、先々書籍刊行をする計画とのことであり、その刊行が楽しみである。

記録担当：吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー）



IGS セミナー（生殖領域シリーズ）

生殖医療技術と男性性

【日時】2019年7月26日（金）18:00～20:30

【会場】本館 126 室

【コーディネーター／司会】

仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【趣旨説明】仙波由加里「日本における男性不妊の現状」

【研究報告】

菅野摂子（立教大学社会福祉研究所特任研究員）

「男性の生殖を問う理由と研究の意義」

齋藤圭介（岡山大学准教授）

「出生前診断に男性はいかに向き合ってきたのか」

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】40 名

【趣旨】

日本では、不妊治療や出生前検査の利用等は、これまで隠すべきこと、沈黙すべきこととする傾向が強かった。そのため、こうした生殖医療技術を利用する当事者の研究協力者を見つけることがむずかしく、当事者研究が遅れていた。しかし近年では女性当事者に注目した研究は多くみられるようになり、女性たちがこうした生殖医療技術にどのように向き合っているのかがわかるようになってきた。その一方で、実は男性も生殖医療技術を利用する当事者であるが、日本ではこの男性当事者に焦点を当てた研究がまだ決して多くない。そこで本セミナーでは、男性当事者の視点に立ち、男性と生殖医療技術のかかわりをテーマにセミナーを開催した。

【開催報告】

生殖医療の研究では、近年、日本でも女性の当事者に注目した研究は多くみられるようになってきたが、実は男性も生殖医療利用の当事者であり、日本ではこの男性当事者に焦点を当てた研究は決して多いとはいえない。たとえば男性不妊は男性にとって大きなスティグマであり、妊娠・出産のために臨む不妊治療の各段階で、男性は不妊による悩みや思いを自分一人で抱え込み、周囲のみならず、パートナーにも打ち明けられない傾向があるといわれる。また診療の場でも、女性が主導権を握ることが多く、男性不妊で自分に原因がありながら、実際には女性パートナーが生殖医療を受けている状況の中で、男性は何を考え、どう生殖医療と向き合っているのかはよく知られていない。今後も生殖医療の需要の増加が見込まれる中で、生殖医療のあり方を考える上でも、男性当事者の心理や行動等に関する研究も非常に重要となってくる。今回のセミナーでは、生殖医療の中でも出生前検査に焦点を当て、男性当事者が出生前検査の選択や実際の検査をどのようにとらえているのかについて2人の研究者が報告した。





第一報告者の菅野摂子氏（立教大学）は、これまで不妊女性を対象に多くのインタビュー調査をすすめてきたが、そうした中で、女性たちが夫についてしばしば語るのを聞いていた。そこで出生前検査は妊婦の身体が対象に行われるが、そのパートナーである男性は出生前検査

という選択肢が提示された時に、何を考え、どのように向き合っているのかについて興味を持つようになった。菅野は現在、出生前検査を受けるかどうかの選択を、妻の主導で選択した場合と夫の主導で選択した場合に、どのような違いがみられるのか、また妻に流産の経験があった場合にはそれが出生前検査の選択にどのように反映されるのか、出生前検査において男性が女性パートナーの気持ちを先読みしているようなことがあるかどうかなどについて調査研究をすすめており、その途中経過が報告された。

第二報告者の斎藤圭介氏（岡山大学）も、夫（男性）の問題として出生前診断を捉えたときに生じる諸問題を整理し、妻の身体を対象とする出生前診断のもう一人の当事者である夫が、どのような経験をしているのか、2017年秋に東京で実施したインタビュー調査をもとに報告した。生殖医療に対して、これまで男性の無関心さや無責任さが強調されることがよくあったが、男性も出生前診断を受けるかどうかの判断に悩み、その結果を誠実に引き受けようと試行錯誤していることを明らかにした。そして、胎児に障害がある場合の考え方は、当事者の男性が仕事に重きを置く生き方をしているかどうかなど、男性自身の働き方に関連して論じられることがあり、女性に関する先行研究との比較を念頭に置くと、検査を受ける当事者が女性であるか男性であるかの違いよりもライフコースのほうが出生前診断についての考え方により強い影響を与えている可能性があることに言及した。そして出生前診断の捉え方にジェンダー差があるということを提示するにはまだ根拠に乏しく、さらに慎重な検討が必要だと述べた。報告後は、フロアーからも活発に意見や質問が出され、充実した討論ができた。

記録担当：仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）



IGS セミナー

J.S.ミルにおけるデモクラシーと女性参政権

【日時】 2019年10月7日(月) 16:00~18:30

【会場】 国際交流留学生プラザ3階301セミナー室

【司会】

板井広明 (IGS 特任講師)

【報告】

山尾忠弘 (慶應義塾大学・院)

「J.S.ミルにおけるデモクラシーと女性参政権」

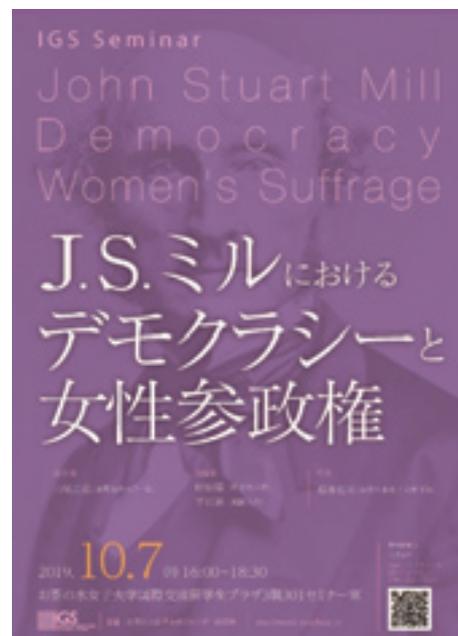
【討論者】

村田陽 (同志社大学助教)

平石耕 (成蹊大学教授)

【主催】 ジェンダー研究所

【参加者数】 10名



【趣旨】

昨年に続き、功利主義フェミニズムに関するセミナーを開き、山尾忠弘氏(慶應義塾大学・院)に、J.S.ミルのデモクラシー論と女性参政権に関する報告をしてもらい、J.S.ミル研究者の村田氏と、グレアム・ウォーラス研究で知られる平石氏からコメントをもらい、ミルのデモクラシー理解やギリシャ論、思想史方法論について議論をおこなった。

【開催報告】

2019年10月7日(月)に、IGSセミナー「J.S.ミルにおけるデモクラシーと女性参政権」を開催した。報告者の山尾氏からは、19世紀ブリテン社会を生き抜いたミルが直面した、黒人と女性の隷属的境遇について、デモクラシーと女性参政権という観点からの報告があった。

ミルが古代のアテナイにおいて男性有産市民だけが政治的主体としてみなされていたことを踏まえつつ、「皮膚の貴族制と性の貴族制 (the aristocracy of skin, and the aristocracy of sex)」という概念によって女性と黒人の隷属の問題を考察したことが報告の第1の柱であった。皮膚と性の貴族制についてミルが考えるようになったのは、1835年の論説「トクヴィルによるアメリカのデモクラシー論(1)」においてであるという。トクヴィルが考察したアメリカのデモクラシーにおいても、政治的・社会的権利を享受したのは白人男性のみで、黒人と女性は隷属的状態に置かれているとミルは指摘していたとのことだった。

報告の二つ目の柱は、「二人のミル (two Mills)」論、すなわち『自由論』(1859)と『代議制統治論』(1861)のミルは異なる原理に基づいて議論を展開したという解釈に対して、近代の原則の貫徹という観点から



整合的に理解できるとしたことであった。それは端的に、アテナイの民主制に一定の評価を与えつつも、それらが奴隷制に基づいていたことを批判し、古代と近代との断絶の意識とともに、ミルのデモクラシーと女性参政権に関する議論を読み解く必要があるという主張である。実際、ミルは『代議制統治論』で女性参政権を論じつつ、性の貴族制と皮膚の貴族制への批判を展開していたし、

古代ギリシャにおいても見られた「力の法」による女性の隷属的境遇という問題は、『女性の隷従』において明確に批判されているという。

かくして、ミルは、近代の歴史を「力の法」に対する人間の闘いの歴史として捉え、不正な統治（力による支配）を受けないという意味での自由（消極的自由；自由主義的理想）の擁護から、女性や黒人の権利について考察し、「人間はもはや、生まれによって境遇が決められたり、それに頑丈な鎖でつながれたりしてはおらず、自分が一番望ましいと思うことを実現するために、自分の能力や目の前の好機を自由に活かすことができるということ」が重要なのだということ、その思想的基礎に置いていたと整合的に理解できるという報告であった。

村田氏からは、「二人のミル論」については『自由論』と『功利主義』におけるミルの違いを考慮すべきではないか、消極／積極的自由の枠組みではなく、ネオローマ的な自由＝服従からの自由という観点からミルを捉えることができないか、古典古代をなぜミルは取り上げたのかも考えるべきではないかというコメントがあった。

平石氏からは、自由主義的な要素と共和主義的な要素との対立、つまり消極的（～からの）自由を守るためには、積極的（～への）自由をもたなければならないという点をミルの視点から捉え返すとどうなのか、また人格の陶冶を政治の領域（古典古代的）だけで考えていたのか、それともその他の領域、たとえば自由意志論の系譜で考えていたのか、人種や性別による差別について、能力の観点をミルが評価するとき、それが「真のデモクラシー」＝人間だれしも平等であるという思想とどう整合的に理解できるのか、さらに文明の発展度がどのような形で女性の不平等の問題にかかわってくるのかといったことが指摘された。

山尾氏からは、自由主義と共和主義とが対立しているとは考えていないが、あえてその図式で読むとすれば、リベラルな観点からミルの思想的特徴を掴むのが適切ではないかというリプライをはじめ、少人数ながらフロアとの議論が活発に行なわれた。

記録担当：板井広明（IGS 特任講師）

IGS 英語セミナー

Gender and Development Revisited

Dialogues with Diane Elson

（「ジェンダーと開発」を問い直す：ダイアン・エルソンとの対話）

【日時】 2019年10月22日（火）14:00～17:00

【会場】 国際留学生プラザ3階301室

【司会】 大橋史恵（IGS 准教授）

【講師】 ダイアン・エルソン（エセックス大学名誉教授）

【討論者】

李亜姣（お茶の水女子大学学みがかずば研究員）

中村雪子（和光大学等非常勤講師）

平野恵子（IGS 特任リサーチフェロー）

【主催】 ジェンダー研究所

【協賛】 日本フェミニスト経済学会（JAFEE）

【後援】 経済理論学会問題別分科会「ジェンダー」

【協力】 FFU（フェミニスト自由大★学）

【言語】 英語

【参加者数】 20名

【開催報告】

ジェンダー平等と経済発展との関係を問う分析を重ねてきた英エセックス大学のダイアン・エルソン名誉教授が来日し、2019年10月22日、お茶の水女子大学ジェンダー研究所主催のセミナーで講演をした。セミナーのタイトルは「『ジェンダーと開発』を問い直す：ダイアン・エルソンとの対話」で、講演のテーマは英国のEUからの離脱（ブレクジット）が女性に与える影響に関してである。セミナーでは3人の討論者もそれぞれの研究成果を報告し、刺激に満ちた討論が行われた。

冒頭、司会の大橋史恵氏が「ジェンダーと開発の問題を幅広い文脈から議論したい」と挨拶した。続いてエルソン氏が、ブレクジットが英国に与える影響について、ジェンダーの観点から次の4点の指摘をした。

- ①GDPへの影響：多くの経済学者はGDPに対してマイナスの影響を予測しており、人々の生活水準を引き下げる可能性がある。
- ②女性労働者への影響：英国はEUによる規制のもとで、育児休業制度や雇用安定の権利などの権利を強化してきた。しかし、ブレクジット後は規制緩和が進み、女性労働者が保障されてきた権利が弱められかねない。
- ③公共サービスの利用者としての女性への影響：GDPが減少し政府支出が削減されると、特に脆弱性を抱えた女性たちにしわ寄せがいく可能性がある。また、今後の貿易交渉によっては北米の大企業が英国政府を訴えることができるようになり、環境問題や国民保健サービス制度（NHS）に悪影響を与えるのではと危惧している。





④消費者としての女性への影響：EU との間の関税の導入やポンドの下落により、農産物の価格が上昇するとみられる。EU の厳しい食品規制を受けなくなると、米国の緩い規制のもとで生産された食品が英国に流入する可能性がある。

まとめとして、エルソン氏は「女性の多くは脆弱な地位にあり、EU による保護がなくなることによって大きな影響を受けるだろう。外国人嫌悪（ゼノフォビア）が高まっており、ブレクジットにより移民への差別が強まるのを恐れている」と述べた。

質疑ではまず、「英国労働党は、移民を脅威と感じる人たちをどのように説得したらいいか」という質問があった。エルソン氏は「移民は教育や NHS に対する負担のように見えるかもしれないが、労働者や医療従事者として英国に多大な貢献をしてきた。今後の労働党の政策としては、公共部門への投資強化と労働規制の強化が重要だ」と述べた。金融業界の反応に関する質問には「シティの金融機関は金融危機に怯えており、それを避けるため EU との間で特別な取引をすることになるだろう。一方で小規模なヘッジファンドはブレクジットによるポンド下落に賭けている」と指摘した。

さらに司会の大橋氏が、ジェンダーと開発に対する関心が低下し、国連の持続的な開発目標（SDGs）もマーケティングに利用されているのではないかと問題提起した。エルソン氏は「政府開発援助が減少する一方でブレンドファイナンスが増えており、援助を保険代わりに民間投資を増やそうとしていることを懸念している。国際通貨基金（IMF）は、ラガルド氏が専務理事に就いて以降、ジェンダーをマクロ経済の課題と認識するようになった。労働参加率を向上させるために保育など公共投資の役割に着目し始めたが、いまだに財政支出の抑制も求めており、この矛盾を解消する必要がある」と指摘した。

後半の討論ではまず、和光大学等非常勤講師の中村雪子氏が、インド・ラジャスタン州の女性酪農協同組合（WDCS）では、女性たちが自ら運営する牛乳集荷所の活動がエンパワーメントにつながっていることなどを報告した。エルソン氏は「WDCS がカーストをまたいだ女性たちの連帯を促していることに感銘を受けた」と述べ、牛乳の価格決定への女性たちの関与などについて議論した。

お茶の水女子大学の李亜姣氏は、「農嫁女（nonjianu）」と呼ばれる中国の女性が抱える土地所有問題について報告した。農村部で他地域出身の男性と結婚した女性は土地を所有できず、村の経済から排除されると李氏は指摘し、エルソン氏は「市場メカニズムと家父長制という二段階で放逐が行われている。すべての人に同等の権利を与えるだけでなく、その権利を保持できるようにする戦略が必要だ」と述べた。

IGS の平野恵子氏は、インドネシアの家事労働にネットを介して仕事をするギグエコノミーが浸透しており、主婦や清掃労働者から流入したそれらの新たな働き手と、従来の家事労働者との間で分断が起きていると報告した。エルソン氏は「アイデンティティーだけでなく経済的な正義の文脈に注目すべきだ。女性たちが、一人ではなく集団で交渉することが重要だ」と強調した。

本セミナーは、参加者の間で鋭い問題提起と分析が交わされ、議論がかみ合いながら進行していくダイナミズムを感じた。セミナーを通じ、ジェンダーは引き続き経済や労働の課題を分析する上での重要かつ有益なテーマであり、複雑化する格差や貧困の問題をひもとく上で欠かせない観点であることを改めて痛感した。

林美子（お茶の水女子大学ジェンダー社会科学専攻博士後期課程）

IGS 英語セミナー (INTPART プロジェクト)

Legal Gender Recognition & Messy Trans Experiences in Norway

(ノルウェーの性別自己決定権法制とトランスジェンダーの経験の複雑性)

【日時】 2019年10月24日(木) 13:20~14:50

【会場】 人間文化創成科学研究科棟 408

【講師】

フランス・ローズ・ハートライン (ノルウェー科学技術大学博士
後期課程)

【主催】 ジェンダー研究所

【使用言語】 英語

【参加者数】 18名

【趣旨】

2016年、ノルウェーは性別の自己決定権を法制化し、以前には必須とされていた不妊手術を受けずに、男/女の性別登録を変更できるようになった。性別の法的認知は本人のアイデンティティにどのように影響するのか？この新法はトランスジェンダーの人びとにとって真に進歩的なものなのか？この法制により性別変更をした人々へのインタビューから、彼らの経験の多様性が明らかになった。法制上の解釈と、複雑でもつれたクイアなトランス経験との矛盾を考察することで、トランスジェンダーの法的認知目的の具体化の限界がみえてくる。

【開催報告】

一般に、トランスジェンダーは、身体の性と心の性が一致しない状態と理解されている。このため、身体の性を変えることで問題は解決されるというアプローチが取られてきた。この理解は、男女の性別ははっきり二つに分かれているという二項図式に基づいている。しかし、トランスジェンダーの実情はより複雑である。

トランスジェンダーを考えるにあたり、男女の別は二分ではなくスペクトルと捉える必要があるという。そして、「身体の性」、「心の性」に、「好きになる性」、「表現する性」を加えた、4つのスペクトルの組み合わせが、個人個人のセクシュアリティであるといえる。自分の性が、男女を両端に置いたスペクトル上のどのあたりにあるかの認識には、個人差があり、一定しているとは限らない。経験により時間をかけて変化することもあれば、その場の状況によってふるまい方を変えるとといった短期的な変化もある。また、ノンバイナリーやXジェンダーと言い表される、どちらの性別にも分けられない人たちもいる。そして、トランスジェンダーを自認する人全員が、自分の体を嫌だと思ひ、変えたいと思っているわけではないという。トランスジェンダーは多様であり、複雑なのだ。

トランスジェンダーについての理解が進むにつれ、それが各国における法律上の性別認定制度に反映



されるようになってきている。ハートライン氏は、「不妊化モデル」「診断モデル」「自己決定モデル」という類型を挙げて、その変化を説明した。「不妊化モデル」とは、当初主流であった、不可逆的な外科的手術を要件とする制度である。戸籍上の性別の変更要件に、生殖腺機能の欠如や性器形態の形成などを含む日本の法律はこれにあたる。時間もかかり健康リスクの高い処置を受ける必要がある。「診断モデル」は、性同一性障害や性転換願望の診断を要件とする制度であり、近年導入が進んでいる。そして最も先進的な制度が、「自己決定モデル」である。いかなる手術も診断も公的機関などからの承認も必要とせず、性別を変更することができる。ノルウェーは2016年にこれを導入し、ノルウェーのトランスジェンダーコミュニティは、この歴史的前進を祝った。

しかしこの新法はトランスジェンダーの人びとにとって真に進歩的なものなのだろうか？そうした疑問から、ハートライン氏は、この法制により性別変更をした人々へのインタビュー調査を実施した。セミナーでは、その中から3名のトランス女性の経験が紹介された。

一人目は、性自認はノンバイナリーだという30代。ホルモン投与により外見は女性であり、性別変更をした理由は「外見上の性別」と「書類上の性別」を一致させるためとのこと。しかし、内面的には混沌としていて、自身を女性とは思っていないし、どちらかを選ぶことを強制されるのも嫌だという。二人目は60代のトランス女性。性別変更はしたが、医療的ケアは要件を満たさなかったため受けられなかった。ホルモン投与などの医療を受けるための審査は厳しく、それができる機関の数も限られている。性自認は女性であるが、身体は異なるため、自分はトランスだと思っている。法的な性別変更により、ある程度までは不安感を解消することができたが、医療的措置や社会的承認を受けられないことによる欠如を満たすほどではなかったそうである。三人目は40代のトランス女性で、いったんは女性に性別変更をしたものの、男性に戻している。医療的ケアを受けることができず、その体のままで女性として生きることは難しいと思ったそうだ。性自認は女性であり、法的な性別をそれに合わせて変えることはできるが、周囲が自分を女性として見てくれない限り、女性として生きて行くことの方が危険が多いとの判断だった。

ハートライン氏は、トランスジェンダーの人々が新法をどのように受け止めたかは様々であるという。インタビュー調査からは、皆が、ある程度のエンパワメントを感じたと同時に、失望も感じていることが明らかになった。そして特に重要なのは、性別変更という法的権利が保証されても、社会的認知や医療的ケアへのアクセスの権利が伴っていない点だと指摘した。また、新法は、結局のところ、男女のどちらかを選ぶ点で二項図式を維持しており、その図式に自分を当てはめられない人を排除している。ゆえに、この状態でトランスジェンダーの人々の平等が保証されたと理解するのは危険なことである。とはいえ、ハートライン氏は、これは前向きな前進であると評価しており、ここからさらに、身体の性を、性自認や表現する性と分けて理解するようなアイデンティティについての議論が進むことを期待していると述べた。

トランスジェンダーのアイデンティティについての基礎知識から、先進的な法的認知制度の現状とその受容まで網羅する報告は、知的刺激に満ちており、参加者が学ぶことは多くあった。ジェンダー研究は、社会的な性別規範をテーマに、それをどう変えていけるかという社会課題に取り組んでいるが、トランスジェンダーについての理解は、その理論を進展させ、議論を深めるものであると言える。ハートライン氏は、日本のトランスジェンダーについての研究に着手しているとのことであり、その成果を再び本学において発表してくれることを期待している。

記録担当：吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー）

IGS セミナー

日本における女らしさの表象

【日時】 2019年10月28日（月）15:00～18:00

【会場】 国際交流留学生プラザ2階多目的ホール

【司会】

板井広明（IGS 特任講師）

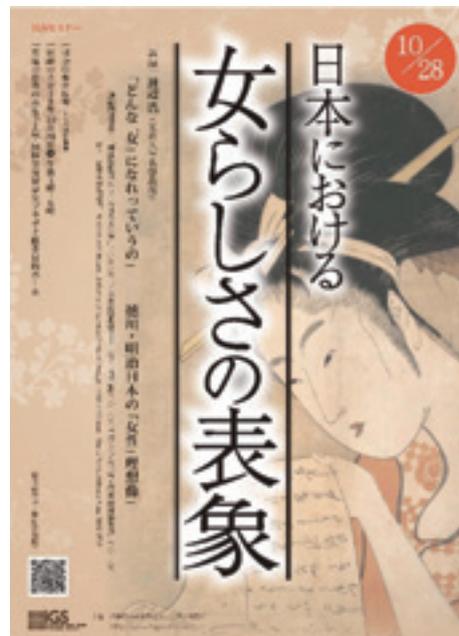
【報告】

渡辺浩（東京大学名誉教授）

「どんな「女」になれって言うの：徳川・明治日本の「女性」理想像」

【主催】 ジェンダー研究所

【参加者数】 54名



【趣旨】

「女は愛嬌だ」とか「女は可愛くなければ」といった語りは、現代日本においても根強い。この種の「女らしさ」には、女性自身が理想とする女性像や男性が理想と思い描く女性像がさまざまに交錯している。本セミナーでは、前回（2017年12月18日開催IGSセミナー「日本における男らしさの表象」）男らしさについてお話いただいた、日本政治思想史がご専門の渡辺浩氏（東京大学名誉教授）を再びお招きして、徳川時代から明治にかけての「女性」理想像についてご報告いただき、現代に至る女らしさの問題について、思想史的視点から検討し、議論をしたい。

【開催報告】

2019年10月28日（月）に、IGSセミナー「日本における女らしさの表象」を開催した。渡辺浩（東京大学名誉教授）氏による報告「どんな「女」になれって言うの：徳川・明治日本の「女性」理想像」は、前半の「1. 徳川体制と「女」、休憩を挟んでの後半の「2. 「文明開化」と「女」と二部構成で行なわれた。

1. 徳川体制と「女」

徳川期の日本では中国や西洋などで見られた処女崇拜はなく、女性は離縁や再婚を往々にして行ない、雑魚寝などの風俗が普通に見られたこと、また武家において、望ましい妻として公家に代表される京女との結婚がよく行なわれたことなど、現代とは異なる当時の社会状況が指摘された。当時、女性に要求された資質として「情け」と「愛敬」があり、これは男との非対称的な関係の中で生きる女性にとって、儒教の五倫における「夫婦相和シ」の圧力ともなった。そしてさまざまな物語を通じて「もののあはれ」を知り、上品で性的であることが男尊女卑の世界の中で、女性に求められたことでもあったという。そして、女性にとって女の中の女を表象する「禁裏」の世界（そして吉原太夫のような「遊女」にも通底

する女性の理想)にあるように、芸事を身につけることが女性としての評価を高める重要な要素であり、女の理想的資質を備えるべく、書や物語、裁縫、琴、香、茶の湯、連歌俳諧などに励んだとのことであった。

2. 「文明開化」と「女」

セミナー後半では、明治以降の女性の捉え方の変容が取り上げられた。まず「色」の氾濫と封鎖」と題して、「性」に着目した報告がなされた。徳川体制においてあったように女性は情け深い存在と見なされ続けたこと、志士達や自由民権論者においても英雄豪傑志向は強く、色を好むという男性性の在り様があったこと、幕末以来の好景気を背景に町が開けると遊郭が作られたこと、身分制度の廃止と廃藩置県によって空間的な広がりや社会層の流動性が高まり、結婚などについての選択の幅が広がったこと(政治家が芸者を妻にすることも問題とはならなくなった)という背景があると指摘された。良妻賢母の教育を説く政治家が宴席には芸者を呼び、妾を囲い、そして妻は元芸者という状況から明治期以降のことを考える必要がある。しかしここに西洋化と儒教化が影響して、英雄豪傑は文明的な紳士となり、性的なものを社会の表面から排除していこうとする文明開化のもう一つ側面が、性別分業を当然視する形で進行し、遊女の地位は江戸時代よりも低下していった。いわば言論・建前としての色の封じ込めと、本音としての色の氾濫があり、いずれの動きも、女性が政治に関わるようなことには繋がらなかった。

続いて「処女の悩み」と題して恋愛と婚姻について取り上げられた。明治になると離婚が多いことは文明国として恥であるとの考えから、婚姻の在り方を変えていくべきだという議論が起きてくる。その流れで自由恋愛による結婚が主張されたが、しかし一生涯続く結婚を若者の恋愛といった不安定な情愛に基づかせることは危うく、やはり両親の関わりが必要と考えられ、「男女相沢の説」が捉えられ、また恋愛を動物性の劣情や感情に左右される罪悪とさえ捉える議論が起きた。それはいわば親が若い男を「鑑別」することでよい結婚へと至るのだとされた。元来、実家にいる女性や「おとめ」を意味した処女という概念が、明治になって性的関係のない女性という意味合いで使われはじめ、そのため結婚した妻には貞操が強調・重視されるようになっていったという。結婚年齢は16歳に始まり、20歳が最も多く、24歳は結婚するにはぎりぎりの年齢と考えられるようになった。自分で婚活することができない、出会いもないという状況では、田舎から出てきた青年男性が下宿屋の娘と恋に落ちるといふことくらいしかなかった。一面では、西洋風の恋愛に憧れるが、避妊などもよくわからず、墮胎が罪となる中で、親に決められた縁組に従っていく女性が多かった。このような状況によって、明治後半、離婚率は急速に下がり、1930年代は史上最低の千人当たり0.5件にまでなった。

また「女学生の悩み」と題して、明治以来の女性につきつけられた二律背反とも言える女性の理想像を引き受けるかどうかをめぐる言説が紹介された。

最後に、平塚らいてうなど明治の第2世代を引き合いに、愛敬ある女と良妻賢母との間で、どちらでもない自分の在りようを模索する「新しい女」がとりあげられた。『青鞥』で展開された新しい女の、特定の理想像に合わせるのではなく、一人の人間として生きたいという訴えは、当時のジェンダー構造への根本前提を揺るがすものであったということで講演は締めくくられ、その後、活発な質疑応答があった。

記録担当：板井広明 (IGS 特任講師)

IGS セミナー

持続可能な社会をめざすエンパワメントの教育

ジェンダーの視点から

【日時】 2019年12月11日（水）13:20～14:50

【会場】 国際交流留学生プラザ3階セミナー室

【司会】

板井広明（IGS 特任講師）

【講師】

菅野 琴（元ユネスコ職員ネパール事務所代表、関西学院大学特別客員教授、国立女性教育会館客員研究員）

【主催】 ジェンダー研究所

【参加者数】 17名

【趣旨】

SDGs（2030年までの持続可能な開発目標）が広く社会に普及する中で、教育におけるジェンダー平等の課題を見直し、「ジェンダー平等と持続可能性の接点と、ジェンダー視点をもつ教育の新たな方向性を探ろうとする試み」について、菅野琴氏（元ユネスコ職員ほか）をお迎えして議論するセミナーを開いた。

【開催報告】

2019年12月11日（金）に、IGSセミナー「持続可能な社会をめざすエンパワメントの教育：ジェンダーの視点から」を開催した。講師は、長らくユネスコで開発と教育の問題に関わってこられた菅野琴氏（元ユネスコ職員ネパール事務所代表、関西学院大学特別客員教授、国立女性教育会館客員研究員）で、このセミナーは、お茶の水女子大学大学院の「国際社会ジェンダー論演習」の一環でもあった。

菅野琴氏はまず、国連の活動の準拠たる世界人権宣言を紐解かれ、教育における差別撤廃条約と女性差別撤廃条約の採択、万人に教育を「EFA」運動の国際的な取り組み、北京女性会議の開催という、20世紀における教育とジェンダーに関わる経緯を概説された。

1990年代から2000年代にかけて、「万人に教育を」運動などが展開されたにもかかわらず、既存の教育の在り方がジェンダー中立的でないことが問題にされないことで、ジェンダーの問題について目を閉ざしてしまい（ジェンダー・ブラインド）、現状を肯定的に見ようとしてしまうこと（現状肯定レンズ）から、男女間格差は埋まらない現状が示され、東南アジアやサハラ以南アフリカ、アラブ諸国で地域間のジェンダー格差が顕著となったことがデータを伴って指摘された。

このようなことが起きたのは、政府、トップレベルのコミットメントの欠如、ジェンダー平等政策がリップサービス=政策文書と現実の執行のギャップとなって現われ、女子・女性教育事業が小規模で、周



辺化され続けた状況から、ジェンダー不平等と差別の構造が不問のまま、女子の教育参加が初等教育に留まり、高等教育や社会でのジェンダー平等につながらなかったことが大きく影響していたという。

また女子の就学率が男子よりも高くなったネパールの事例においても、社会文化的な女性差別の構造が変わらないままであったことから、男女間の就学率格差の解消がジェンダー平等の達成には至らなかったことが明らかにされた。

以上のような事例を踏まえつつ、Beyond Parity=数の上での平等（就学率、在籍率、進級率）を達成するだけでなく、教育の機会／アクセスの平等、学習プロセスでの平等、教育の結果での平等（卒業後の就職や収入など）をチェックして、ジェンダー主流化という視点から、教育システム全体を捉える必要があるという指摘がなされた。

さらに、昨今の地球環境問題に関連して、持続可能性を軽視し、経済効率・成長を重視する持続不可能な社会＝ジェンダー不平等な社会に対して、ジェンダー平等と持続可能性を繋げるものとしての、エコフェミニズムの重要性が強調された。「男性対女性、文化対自然、先進国対途上国といった支配者－被支配者・ヒエラルキー的二元論を超えた、男性と女性、人間と自然に関する新しい関係を構築するための思想」としてのエコフェミニズムは、SDGsの適切な捉え返しのためにも必要であるということだった。

質疑応答では、環境問題と開発との関係、ジェンダーと環境から始まり、国際的な機関で働く際の情報共有におけるジェンダー格差の問題やキャリアパスの問題についても、活発な議論が交わされた。

記録担当：板井広明（IGS 特任講師）



IGS 英語セミナー

A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives Family, Society, and Gender.

(フランスの視点からの思想史ワークショップ：家族、社会、ジェンダー)

【日時】2020年1月30日(木) 13:15~17:15

【会場】国際交流留学生プラザ3階301室

【モデレーター】

板井広明 (IGS 特任講師)

深貝保則 (横浜国立大学教授)

【報告者】

ガブリエル・ラディカ (リール大学教授、横浜国立大学客員教授)

“Democratic vs Liberal Family: Constant, Tocqueville, and Durkheim”

アン・ブルノン＝エルンスト (パンテオン・アサス大学教授)

“From Panopticism to Biopolitics: Reassessing Foucault”

オフェリ・スイミオン (ソルボンヌ・ヌーヴェル大学准教授)

“Anna Doyle Wheeler (1780-1848): Her Life, Work and Feminist Legacy”

【討論者】

関口佐紀 (早稲田大学博士課程)

重田園江 (明治大学教授)

高桑晴子 (お茶の水女子大学教授)

【主催】ジェンダー研究所

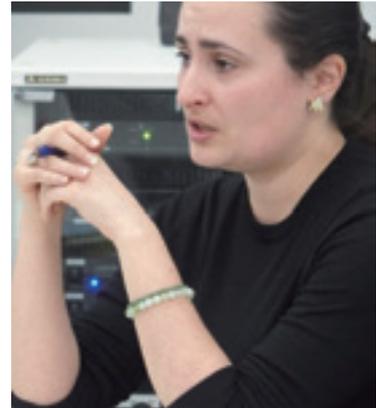
【共催】

科研費基盤 (C)「近代英米の法の支配伝統の再検討：わが国への示唆」(戒能通弘・同志社大学)、科研費基盤 (C)「18世紀末ブリテンにおける女性論の諸相：功利主義的フェミニズムの可能性」(板井広明・お茶の水女子大学)

【使用言語】英語

【参加者数】21名





【開催報告】

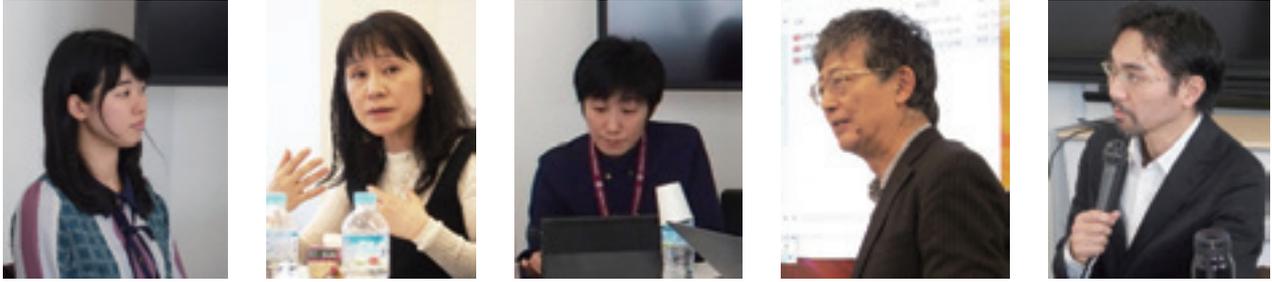
2020年1月30日（木）に、IGS セミナー「フランスの視点からの思想史ワークショップ：家族、社会、ジェンダー」を開催した。報告は3人のフランス人研究者、ガブリエル・ラディカ（リール大学教授、横浜国立大学客員教授）、アン・ブルノン＝エルンスト（パンテオン・アサス大学）、オフエリ・スイミオン（ソルボンヌ・ヌーヴェル大学）からなされ、それに対して、関口佐紀（早稲田大学大学院博士課程）、重田園江（明治大学）、高桑晴子（お茶の水女子大学）の各氏からコメントをもらった。

第1報告は、ラディカ「民主的家族 vs リベラルな家族：コンスタン、トクヴィル、デュルケイム」で、コンスタンの家族論を「プライバシーの保護」、トクヴィルは「家族関係の民主化」、デュルケイムは「個人主義および家族機能」という観点から読み解き、国家と市民社会の分離などの状況と相即的な、家族の私的領域への位置づけを背景に、それらが家族内の平等化を進めたわけではないことなどをテキストベースに指摘した。

関口氏からのコメントは4点にわたり、リベラルな家族と政府との関係、性の平等と個人の平等の区別、家族の教育的機能、家族制度と3人の思想家が捉える幸福の概念との関係について、なされた。

第2報告は、ブルノン＝エルンスト「パノプティシズムから生政治へ：フーコーの法の再検討を通じて」で、フーコーの理論枠組みに、ベンサムのパノプティコン論がどう位置づけられるのかをめぐるのである。とりわけ『監獄の誕生』で示されたベンサムのパノプティコンが有するネガティブな規律的側面と、リベラルなベンサム解釈を行なうベンサム研究者による功利主義理論とパノプティコンの枠組みとの関係を参照しつつ、ラヴァルなどが示している生政治の概念を基礎にしたフーコーの理論的な枠組みに、パノプティコンの図式をはじめとするベンサムの間接立法論をはじめとした法論が関わっていたのではないかという点が指摘された。

重田氏からは、フーコーの規律や生政治の概念の変遷（1975年の『監獄の誕生』では法／規律、1976年の『知への意思』では法／生権力→生政治／規律、1978-79年のコレージュ・ド・フランスでの講義では法／規律／安全のメカニズム）が示され、またベンサムの間接立法論と規律の議論とは異なるのではないかといったことが指摘された。



第3報告は、スィミオン「A.D.ウィーラー（1780-1848）：生涯と著作、フェミニストの遺産」で、19世紀前半に活躍したウィーラーの、W.トンプソンとの共著『人類の半数の訴え』での明示的な女性の選挙権の主張、理論と実践の両立について、オーウェン主義や女性のネットワークづくり、海外でのそれらの実践への影響などについて焦点を合わせたものであった。

高桑氏からは、ウィーラーが育ったアイルランドにおけるリベラルな背景、男女平等や女性の権利などについての彼女の急進的な考えの出自、フェミニストとしての遺産の内実について、コメントがあった。

最後に、モデレーターの深貝保則氏（横浜国立大学）からは、今回のワークショップで取り上げられたコンスタン、トクヴィル、デュルケイム、ベンサム、ウィーラーが見ていた社会の違い、また日本での家族やジェンダーに関する明治以降の近代思想の導入の仕方の問題について、『男女同権論』や『男女異権論』の画像などを示しながら、コメントがあった。

思想史研究の領域ではまだまだジェンダー差が大きく、報告者も討論者も女性で占められた今回のセミナーは、その点でも興味深いものだったとのコメントもあり、それぞれの報告に対して、活発な議論が展開されたセミナーでもあった。

記録担当：板井広明（IGS 特任講師）

IGS 英語セミナー

Gender and Politics in Indonesia after 2019 Election

(インドネシアにおけるジェンダーと政治——2019年総選挙分析)

【日時】2020年1月30日(木) 18:00~20:00

【会場】国際交流留学生プラザ3階セミナー室

【司会】

平野恵子 (IGS 特任リサーチフェロー)

【講師】

アニ・ウィダヤニ・スチプト (インドネシア大学准教授)

“Gender and Politics in Indonesia: An Analysis of the 2019 General Election”

【ディスカッサント】

大木直子 (お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特任講師)

【主催】ジェンダー研究所

【使用言語】英語

【参加者数】15名

【趣旨】

2019年インドネシアで5年ぶりの総選挙が行われた。議員候補者の30%を女性にするクォータ制が採られるインドネシアにおいて女性議員の数は増えたのか、またどのようなジェンダー 이슈が選挙の争点となったのか、本セミナーでは、インドネシアにおけるジェンダーと政治分野の第一人者である Ani W Soetjipto (アニ・ウィダヤニ・スチプト) 氏をお迎えし講演いただいた。

【開催報告】

1月30日、インドネシア大学からアニ・W・スチプト氏をお迎えして、「インドネシアにおけるジェンダーと政治——2019年総選挙分析」というテーマでセミナーが行われた。お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所の大木直子がコメンテーターとして参加し、司会はジェンダー研究所の平野恵子が務めた。

アニ・W・スチプト氏の報告は、2019年の総選挙後のインドネシアにおけるジェンダーと政治の変遷を分析したものである。報告では、スハルト政権後、改革時代以降のインドネシアにおいて各政党による選挙候補者名簿の3割以上を女性にするクォータ制というアファーマティブ・アクションの重要性が強調された。直近の2019年の選挙においては、過去の選挙と比較して女性候補者の立候補数がより



減少しているにもかかわらず、父や夫が政治家である世襲議員ビジネス業界出身、有名人などのエリート層や富裕層など似たような階層出身の立候補者が一定数見られた事実は興味深い。スチップト氏は、インドネシアにおけるアファーマティブ・アクション政策の評価は依然として女性候補者の人数によって査定され、インドネシアの女性代表としての適性とは無関係であると指摘した。



とはいえ、インドネシアの選挙における女性候補者の人数は概して増加傾向にあり、得票数も同時に増加している。ただし、女性候補者の得票率（24.01%）と実際の議席配分（20.52%）の差は依然として課題である。高い得票率は国民による女性候補者支持の意思を示しているものの、議席配分との差にはインドネシア選挙における議会の最低得票率（4%）¹と政党名簿投票制度の一つであるサン=ラゲ方式が一部要因として影響している。

インドネシアの選挙におけるアファーマティブ・アクションがもたらすパラドックスに関し、スチップト氏は次のように分析する。まずクォータ制は、女性が経験する従属関係を変えることによりインドネシアの女性のエンパワー化を図るものである。女性候補者を3割にするという強制的かつ積極的是正措置は、1998年改革時代以前の男性と女性間の国会議員のギャップを埋めるために導入された。しかし現在では人々は女性候補者の人数のみ、すなわち3割の目標が達成されるか否かのみ注目している。女性国会議員がインドネシアの政治情勢をどのように変えるのか、また女性特有のニーズに基づくアジェンダの立法化に彼女たちがいかに関わるのか、といった点については焦点が当てられていないと分析する。結果、選出された女性議員数は残念ながら女性に関する法律の質とは何の関連もなく、選出議員は女性特有の課題よりも所属政党の政治的利益やアジェンダを優先する傾向が見られる。「ジェンダー平等・公正」法案、「性暴力撤廃」法案、「家事労働者保護」法案といった女性特有のニーズに基づく法律が下院で可決されていない事実は、こうした女性議員数とジェンダー関連課題の立法化に明確な関連がないことを示す。

最後にスチップト氏は、女性に影響を与える重要な問題にジェンダーの視点を入れる必要性、そしてその分析の強化、女性ネットワークの発展、インターセクショナルティ・アプローチの導入が、インドネシアが長らく撲滅に取り組んでいる汚職や世襲政治、男女平等と女性のエンパワーメントへの理解の欠如といった、インドネシア女性が政治分野で直面する課題に対処するための鍵であると強調した。

ディスカッサントである大木氏は、政党の理事会メンバーとしての女性の役割と、政党による女性候補者向けの教育プログラムについて質問した。前者の質問に対しスチップト氏は、中央、地方レベル双方で、理事会メンバーの3割を女性に当てることが法律上規定されていると説明した。この規定は、インドネシアにおける政党設立の要件であり、女性が選挙で立候補する機会を与えるものでもある。しかし、実際には政党は女性を秘書のような職位や女性局局長といった女性専用とみなれる役職に就ける傾

¹ インドネシアの総選挙では、議席獲得のための最低得票率が定められている。1999年の民主化総選挙以降、多党化の傾向が続いており、政党数を削減することによって議会運営の安定化を図る目的で定められた。インドネシアの総選挙は5年ごとに開催されるが、前回2014年総選挙では3.5%、今回2019年の総選挙では4%に引き上げられた（参考：<https://dbmedm06.aa-ken.jp/archives/149>、記録者平野注）。

向があり、選挙委員会委員長や、候補者の選出あるいは立候補プロセスの責任者など、影響力ある地位に就ける政党は非常に稀であり、いまだ課題は残されている。こうした傾向により女性は政党内で無力化されてしまうのである。

大木氏の二つ目の質問である政党内の教育プログラムに関しては、議会に議席を獲得する政党には、女性も対象となる政党内の教育プログラムにつき、国家予算から配分があることが明らかとなった。こうした教育プログラムは男性女性関係なく実施されるものの、問題は本プログラムの内容が、イデオロギー、スピーチ法、および党の規定といった内容に限定されていることである。残念ながら、ジェンダーイシューやジェンダー主流化に焦点を当てたプログラムは未だ導入されてないと指摘した。また、ジェンダーの問題に関する知識を有する女性のメンバーは、そもそも活動家出身であったり、女性エンパワーメント・子ども保護省、または UNDP、IRI などのほかの機関からのプログラムを受けた者であることが少なくないと指摘した。

また、2019 年総選挙における女性の動員に関するフロアからの質問に対し、スチップト氏は今回の総選挙はインドネシアの女性運動にとって味わったことがない苦い経験であると述べた。政党とエリートのアジェンダによって、女性の運動が双方とも女性、母をあらわす「エマック・エマック (emak-emak)」（保守派による運動）と「イブ・バンサ (ibu bangsa)」（フェミニスト運動）に分断させられたからである。どちらも異なるアジェンダを主張しており、前述のグループは家族的価値観の重視と女性の経済的エンパワーメントを擁護する一方で、後述のグループはジェンダー公正と女性権利の促進を主張する。双方とも、女性のエンパワーメントについて主張するものの、議席数や女性の政治的地位を超える大きな課題が未だに残っている事実を忘れているようであると指摘した。両者ともに自分たちが政党エリートによって動員または利用されていることに気付かなかつたと指摘した。

さらに、フロアから日本における女性の代表の状況と課題を克服する方法に関する質問もなされた。それに対してスチップト氏は、同様な問題は日本やインドネシアのみならず、世界中どこにでもありう



るものであると指摘し、まずは女性の代表を増やすという数字から始めることで、最終的に状況が変わると強調した。本質問に対しては大木氏も、一部の女性議員は自分たちを単に女性カテゴリーで選出された「特別」な議員と見なされるクォータ制を望んでいないと付け加えた。このほかの参加者からも多くの質問が寄せられ、予定時間を越えて活発な議論となった。

記録担当：Waode Hanifah Instiqomah（一橋大学院博士後期課程）／
平野恵子（IGS 特任リサーチフェロー）

IGS セミナー（生殖領域シリーズ）

映画『性別が、ない！』上映&パネルディスカッション 性別二元制規範を考える

【日時】2020年2月12日（月）18:00～20:30

【会場】本館 126 室

【パネリスト】

石丸径一郎（お茶の水女子大学准教授）

「性別二元制とアイデンティティの持ち方」

藤原和希（label X 代表）

「X ジェンダーについての経験と label X の活動」

長谷川渚紗（お茶の水女子大学大学院博士課程人間文化創成科学研究科）

「性別二元制に基づく（異）性愛規範と抵抗としてのクィア実践」

【モデレーター】

仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】47 名

【趣旨】

性は多様であるという見方は日本社会においても広まりつつあるが、それでもなお、性別二元制規範は根強く残っている。そこで本セミナーでは、最初の 60 分で多様なセクシャリティを持つ当事者が登場するドキュメンタリー映画『性別が、ない！』を上映したあと、3 人のパネリストを迎え、「性別二元制規範を考える」をテーマにパネルディスカッションを行った。パネルディスカッションでは最初にお茶の水女子大学の大学院生（修士）長谷川渚紗が「性別二元制に基づく（異）性愛規範と抵抗としてのクィア実践」と題して発表し、次に石丸径一郎（お茶の水女子大学）が「性別二元制とアイデンティティの持ち方」と題して話題提供した。さらに label X の代表である藤原和希が自身の X ジェンダーとしての経験や label X の活動を通して、日本に残る性別二元制規範についての自身の考えを述べた。その後、それを踏まえて仙波がモデレータとなり、日本に残る性別二元制規範やジェンダー規範を今後変えていくためには、私たち一人ひとりに何が求められるかについて参加者も交えてディスカッションした。

【開催報告】

2020年2月12日（水）に、社会に根強く残る性別二元制規範がもたらしている状況をジェンダーやセクシャリティの問題に関連付けて考えることを目的にジェンダー研究所主催でイベントを開催した。イベントは2部構成で、前半ではインターセックスの当事者を主人公とするドキュメンタリー映画『性





別が、ない！インターセックス漫画家のクィアな日々』(制作：ザ・ファクトリー、監督：渡辺正悟)を60分間上映した。この映画ではインターセックスの主人公だけでなく、様々なセクシャリティの当事者が登場し、映画全体を通して性が多元的で多様であるという現実をセミナー参加者全員で共有した。



そして映画の上映後、長谷川渚紗(お茶の水女子大学修士学生)、石丸径一郎(お茶の水女子大学准教授)、藤原和希(label X 代表)の3人が登壇し、「性別二元制規範を考える」というテーマでパネルディスカッションを行った。最初の登壇者の長谷川はこれまでもレズビアン・アイデンティティの形成とジェンダー規範等に関して研究をすすめてきた。パネルディスカッションでは「性別二元制に基づく(異)性愛規範と抵抗としてのクィア実践」と題して、特に韓国でフェミニズム運動が活発になる一方でジェンダー差別が依然存在し、それがクィア・カルチャーの受容にも影響を与えている点をあげた。第二登壇者の石丸は自身が取組んでいるLGBTに関する研究や教育での取り組み、および性同一性障害を中心とする臨床心理相談等について紹介した。そして差異のとらえ方では客観的分類と主観的感覚

が異なることを示し、マイノリティ・アイデンティティの中でも多様なとらえ方があると述べた。最後にXジェンダー(性自認が男性で女性でもないというセクシュアリティ)の当事者である藤原は、自身のXジェンダーとしての経験や代表をつとめるXジェンダーの当事者の会「label X」の活動を通して、当事者の中でも様々なとらえ方や考え方があることを紹介した。そして今後社会に性別を無限と捉える「性別無限論」が広まればいいと述べた。

登壇者の話のあとには、参加者からも性別二元論に対する意見や質問などを受けた。特に興味深いコメントに以下のようなものがあった。「人の数だけ性のかたちがあり、性別無限論が実現すれば、もっと生きやすい社会なるのではないか。」「セクシュアリティが多様であることは理解するが、生殖という現実を考えると二元論にこだわる考え方がなくなることはない。」「マジョリティの中でもマイノリティの中でも差別や不寛容さはある。大事なのは教育を通して個々を尊重する心を育てることではないか。」「性別二元制を考えるとときには、日本だけでなく他国の状況等も含めてみつめ、そうした国々の人たちとコミュニケーションをとり考え方を共有すべきだと思う。」「性別二元制をなくすのではなく、それを越えたい。」「個人的に性別役割分業に強い反感を持っていたが、石丸先生や藤原さんの話を聞き、性別二元制にこだわる人も含めて性に対するどのような考え方をする人も尊重されるようになればいいと思う。」「第三者が人の性別を判断することはむずかしいが、性別や性自認をはっきりさせることは当事者にとっても難しいこともあるかもしれないと思った。」などである。

本イベントを通してジェンダー規範が性別二元制規範と深く関連しており、多様なセクシャリティの受容にも影響を与えていることが明らかとなり、性別二元制がもたらしている問題を考える機会を提供できたと思われる。今後もこうしたテーマのイベントを開催し、さらに議論を深めていきたい。

記録担当：仙波由加里(IGS 特任リサーチフェロー)

IGS セミナー

コンドルセの政治社会像と女性への視点

【日時】 2020年2月14日（金）15:00～17:30

【会場】 国際交流留学生プラザ2階多目的ホール

【司会】

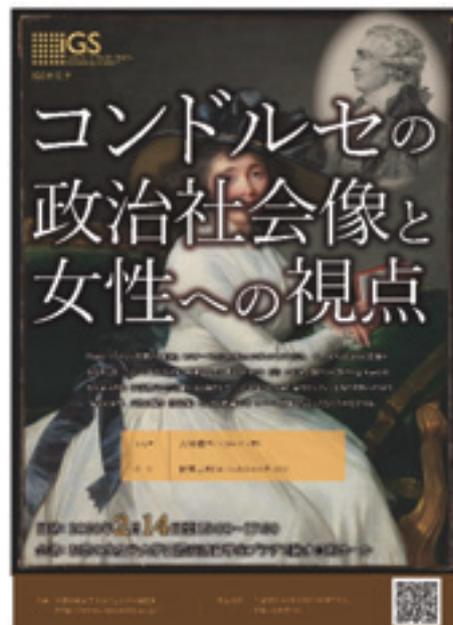
板井広明（IGS 特任講師）

【報告者】

永見瑞木（大阪府立大学講師）

【主催】 ジェンダー研究所

【参加者数】 10名



【趣旨】

昨年の「フランス啓蒙の女性論」セミナーで取り上げたエルヴェシウスに続き、今回はコンドルセの思想を取り上げたい。コンドルセの思想像の刷新となった『コンドルセと〈光〉の世紀：科学から政治へ』を書かれた永見瑞木氏（大阪府立大学講師）をお招きして、コンドルセの政治社会のヴィジョンと彼の女性への視点（男女の平等、女性の権利（参政権）と女性の教育など）について報告を行なっていた。

【開催報告】

2020年2月14日（金）に、IGS セミナー「コンドルセの政治社会像と女性への視点」を開催した。報告者の永見瑞木氏（大阪府立大学）は『コンドルセと〈光〉の世紀：科学から政治へ』を著した新進気鋭の研究者で、コンドルセ研究者である。

当日は、まず科学者・哲学者として、また政治家としても活躍したコンドルセの生涯と問題関心が概観され、人間の可謬性と社会の不確実性の認識から、科学の方法論の適用や確率論の社会的問題（失踪者の財産相続、終身年金の評価、航海保険、裁判の証拠、証言の信憑性、保険、選挙制度、議会の構成、税制、公債）への応用に対する関心をもち、新しい政治社会の在り方としての、共和国の構想へというコンドルセの理路が示された。

コンドルセの政治社会像の特徴としては、出版の自由とともに知の普及と共有、反権威主義（権威への絶対的な信奉に批判的であり、知の特権階級化にも反発）、依存の關係に陥らないための才能と良識、政治家と市民との完全な分業ではなく、流動的な在り様を前提にした批判と改善を目的とする關係を基礎にして、『地方議会の構成と役割についての試論』（1788年）における「平等な代表制の原理に基づく三段階の地方議会の確立による政治社会の根本的な再編」と「国民議会の創設」が展望され、「市民によ

る監視、異議申し立てなどを通じた、下からの国政の刷新という視点」が示されたところにあると言う。革命期の共和国構想でも、人間の可謬性の認識から、「社会の制度が常に人民の検証に晒される、全体として非常に動的な秩序像」として、一院制立法府や執行府の公選制、合議制が示された。

このようなコンドルセの秩序構想において、女性への視点が示されるのは1780年代後半以降に書かれた『ニュー・ヘヴンのブルジョワからヴァージニアの市民への書簡』(1788)、『地方議会論』(1788)、『女性の市民権の承認について』(1790)、『公教育に関する覚書』(1791)、『人間精神進歩史』(1794)といったテキストである。これには、1786年に結婚したソフィ



ード・グルシーの存在が研究史では指摘されているとのことだったが、第1に権利における平等が語られ、それは感覚的存在としての人間が有する自然権を根拠にしたものだった。実際、能力においても両性間で平等に分配されているし、男女で一方に決定権限を必然的に与えることは問題であるし、公職への被選挙権から女性を排除することは、選挙人の自由の制約や、排除される女性自身にとって不正であるとされた。第2に「性差については、妊娠や出産などの点で「生物的、身体的能力における性差」を男女に認めつつ、「精神、知性における性差」はほぼ認めていない。性差は教育や習慣・偏見によって生じたものと考えられていた。第3に公教育の平等として、「教育の目的、内容・程度、手段における平等」が説かれた。教育の不平等が専制の主要な要因であるということからも、男女共学の勧めが説かれたとのことである。

但し実践面での限界と思われるものとして、理想と実践の隔たりがあり、「立法議会に報告した公教育案では、女性の教育の権利について、やや消極的な態度を見せ」たし、1793年憲法草案では、女性の政治的権利の規定はなく、男性に対する政治的権利のみが示されたとのことであった。

当日の参加者は18世紀～19世紀の英仏を研究対象とする研究者がほとんどだったので、質疑応答では、コンドルセと同時代人で『女性および女性市民の権利宣言』を書いたオランプ・ド・グージュなどの知性史的関連、当時においてもさまざまな階層や職業の女性がいたのであり、コンドルセはどのような女性を念頭に置いていたのかといった問題、またスコットランド啓蒙の文明—野蛮などの影響如何をはじめとした英仏の思想の影響関係など、活発な議論が交わされた。

記録担当：板井広明（IGS 特任講師）

【主催】 ジェンダー研究所、韓国・済州平和研究院

【使用言語】 英語

【参加者数】 12 名

【開催報告】

平和研究分野において韓国の代表的な研究所の一つである済州平和研究院と、ジェンダー研究所は日韓関係と平和構築をテーマに共同セミナーを開催した。2019 年は植民地の歴史に起因する強制労働問題をめぐって日韓政府間の関係がさらに冷え込み、社会の多方面で行われていた交流が途絶を余儀なくされた。そのような中で開かれた共同セミナーでは、平和を中心テーマに歴史問題への理解と未来展望について議論を深めた。ジェンダー研究所はこれまでも平和研究をテーマにしたセミナーを開催してきたが、他国の研究所との共同セミナー開催は初めての試みであった。平和とジェンダーは、それぞれの研究領域においてお互いに欠かせない分野でもあることから、大きな刺激を与え合うセミナーとなった。ジェンダーによる抑圧や女性に対する日常的な暴力の根絶などは「平和」の概念を再考するに欠かせないだろう。



Dr. HAN は今日の日韓関係の悪化の要因は、1965 年に締結された日韓協定の欠陥と、それ以降大きく変化した両国の経済、安全保障、文化にあると分析した。韓国の経済規模は、1970 年においては日本の経済規模の 13 分の 1 に過ぎなかったが、今日では約 3 分の 1 近くに急成長し、グローバル市場で同等に競争するミドルパワーとなった。韓国の第一経済パートナーも日本から中国に変わって久しく、安全保障上の最大の脅威は、日本やアメリカとは異なり、中国ではなく北朝鮮である。北朝鮮の非核化など韓国の安全保障に日本が果たせる役割にも限界が見えた。このような国際政治の変化は韓国にとって、1965 年当時より日本の存在感を弱めることになり、1965 年の日韓協定の時には蓋をしていた歴史的な不正義の問題を解決しようとする動きに繋がったと分析した。また日韓関係の緊張は、アメリカ主導の安全保障構想に韓国が一方向的に引き込まれないレバレッジを与えていたと評価した。



三牧氏は、持続可能な日韓関係を構築するためには従来の国際政治のアプローチを転換することが必要と主張した。従来、日韓両政府は、歴史や領土をめぐって両国民の不信が高まった際には、これらの問題と経済・安全保障上の協力を切り分ける「ツートラック」的な思考



によって解決しようとしてきた。しかし、2019年夏以降の両国の経済・安全保障面での対立の悪化は、この解決方法の限界を示している。報告「*Toward Trans-generational Understanding of History*」では、持続的な和解のためには、いかに迂遠にみえても、市民間の信頼関係を築いていく必要があるとして、市民、特に若者の間にみられる両国への歩み寄りの事例を紹介し、その展望を検討した。

本山氏は、安倍政権の外交政策に焦点を当てた報告を行った。第2次安倍政権の下で日本軍「慰安婦」制度の国家責任を否定する歴史修正主義が、日本政府の公式の外交方針となってきたと指摘した上で、安倍政権は「慰安婦」問題についていっそう強硬な姿勢をとる一方で、他方では「女性が輝く社会」を外交政策の柱として、武力紛争下の性暴力防止を国際的に推進している。本山氏は、その背景に、普遍主義的フェミニズム理解にもとづく国際ジェンダー規範が、脱政治化されながら国際安全保障と豊かな国家の外交政策に取り入れられていることを指摘した。

報告後には参加者全員で活発な議論を行い、今後も交流を続ける意義を確かめた。

記録担当；申琪榮（IGS 准教授）

IGS 研究会

お茶大・東大院生合同セミナー

トランスジェンダーが問うてきたこと：身体・人種・アイデンティティ

【日時】2019年12月16日（月）10:00～12:30

【会場】国際交流留学生プラザ3階セミナー室

【ファシリテーター】申琪榮（IGS 准教授）

【パネリスト】

スーザン・ストライカー（イェール大学・学長フェロー／女性・ジェンダー・セクシュアリティ研究招聘教授）

ナエル・バンジー（トレント大学助教授）

清水晶子（東京大学教授）

井谷聡子（関西大学准教授）

石丸径一郎（お茶の水女子大学准教授）

【主催】ジェンダー研究所

【共催】東京大学清水晶子研究室、科研費 挑戦的萌芽研究「性的少数者の政治と多様な諸身体の連帯および共存をめぐる現状分析と理論構築」

【使用言語】英語

【参加者数】25名

【開催報告】

本研究会は、国際シンポジウム「トランスジェンダーが問うてきたこと：身体・人種・アイデンティティ」（詳細は本報告書50頁を参照）のために来日したスーザン・ストライカー氏らシンポジウム登壇者4名と本学の石丸径一郎心理学講座准教授を招き、院生を対象とするインフォーマル研究会として申琪榮 IGS 准教授の企画により開催された。参加者は主に本学大学院生と学部生、東京大学の清水晶子研究室ゼミ生である。慶応義塾大学からも学部生一名の参加を得た。

参加者全員が前日のシンポジウムにも参加していたため、院生たちからシンポの内容について追加質問やコメントをしてもらい、それに応答して登壇者らが意見を述べる形式で、さらに議論を深めた。院生からはトランスジェンダーの現状や歴史、フェミニズム理論の「交差性」概念の有効性、クィア概念などについて質問があり、活発な自由討論が行われた。また参加者から、本学の入構規定が女性のステレオタイプに基づく「女性らしい外見」を基準にしているのではないかとの指摘があり、性別やジェンダー二元論の問題について議論が広がった。普段交流がほとんどない他大学の院生らとの共同研究会の機会を持ち得たことで、本学の院生たちにとって大きな刺激となったと考えられる。

記録担当；申琪榮（IGS 准教授）



IGS 研究会

Exploring How Women's Contraceptive Choices Can Be Influenced by Their Views on Abortion

【日時】2020年1月24日（金）16:00～18:00

【会場】人間文化創成科学研究科棟 401 室（ジェンダー研究所内）

【報告】

レスリー・ホガート（オープン大学教授）

「Exploring how women's contraceptive choices can be influenced by their views on abortion」

仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

「Contraception and Abortion in Japan」

【コーディネーター】

大橋史恵（ジェンダー研究所准教授）

【主催】ジェンダー研究所

【使用言語】英語

【参加者数】5名



【趣旨】

2020年1月24日（金）、イギリスの The Open University の Lesley Hoggart 教授を迎え、イギリスと日本における避妊と中絶の関係性をテーマに IGS 研究会を開催した。イギリスについては Hoggart 教授が報告し、日本についてはジェンダー研究所の仙波由加里が報告した。女性が選択する避妊方法については日英の間に大きな隔りがあり、イギリスでは女性主体の避妊法の選択率が高く、一方日本では、コンドームや膈外射精による男性主体の不確実な避妊に頼っている傾向が強い。イギリスでは女性が希望すれば、ピルのみならず、IUD（子宮内避妊具）や皮下インプラントも全て公的保険で無償で提供されるが、日本ではピルの入手でさえ処方箋が必要で高額である。また中絶もイギリスでは女性の自己決定で無償で受けることができるが、日本では高額の費用がかかり、パートナーの同意も求められる。こうした状況から、女性のリプロダクティブ・チョイスやリプロダクティブライツの尊重という面において、日本はイギリスに大きく後れをとっている状況が浮き彫りとなった。

【開催報告】

2020年1月24日（水）に国際研究交流を兼ねて、イギリスの The Open University の Lesley Hoggart 教授を迎え、イギリスと日本における避妊と中絶の関係性をテーマに IGS 研究会を開催した。

イギリスについては Hoggart 教授が、これまでイギリス国内で実施してきた女性の避妊方法の選択や中絶を経験した女性の意識に関する7つの質的調査の結果を中心に報告した。イギリスではピルによる避妊が最も一般的で、皮下インプラントや IUD（子宮内避妊具）のような LARC（Long-Acting Reversible

Contraception)と言われる方法を選択する女性も少なくない。皮下インプラントやIUDは、太ったり出血が続いたり、違和感や痛みがあるなどの身体的な不調をきたす場合もあり、これを理由に中断する人もいるが、一度挿入すればピルのように飲み忘れる心配もなく、長期にわたって確実に避妊ができるため、これを選択する女性たちが少なくない。こうしたことから、イギリスでは女性たちが望まない妊娠を避けるためにリプロダクティブ・コントロールを重視している状況がうかがえる。また、イギリスでは中絶も公的保険で無償で受けることができ、未成年であっても親やパートナーの承諾なしに中絶を受けることができる。これは1900年代後半、望まない妊娠をしてしまった若い女性が自殺に追い込まれるようなケースがおこったため、これを避けるために女性に中絶の機会を提供するようになったという。このようにイギリスでは、望まない妊娠をしてしまった場合の妊娠の継続や中断を決定する権利が女性に与えられている状況がうかがえる。

一方、日本についてはジェンダー研究所の特任リサーチフェローの仙波由加里が中絶に関する法律の成立の歴史的経緯や、「平成29年度衛生行政報告例の概要」や「日本家族計画協会第8回男女の生活と意識に関する調査」(2016)に示されるデータを用いて、避妊や中絶の状況について報告した。日本では、避妊は男性主体の不確実な避妊に頼っている割合が高く、コンドームによる避妊が83.9%、性交中絶法(膣外射精)が19.1%を占めている。ピルでさえ、日本では医療機関を受診して医師による処方箋がなければ得ることができず、かつ高額な経済的負担が強いられるため、5.5%の女性しか利用していない(家族計画協会、2016)。望まない妊娠をして中絶を経験する女性も少なくなく、日本家族計画協会の調査では、676人の女性回答者のうち10.4%が中絶を経験していた。むしろ日本はイギリスとは異なり、中絶も私費でうける必要があり高額である。加えて中絶についてパートナーの承諾も得なければならない。

日英どちらの国も、望まない妊娠を懸念する女性は少なくなく、避妊は両国の女性にとって不可欠である。また望まない妊娠を経験した女性が抱く思いやスティグマにも共通点が多い。しかし、女性の避妊方法の選択や中絶の提供のあり方に対する日英の扱いをみると、女性のリプロダクティブ・チョイスやリプロダクティブライツの尊重という面において、日本はイギリスに大きく後れをとっている状況が浮き彫りとなる。両国の状況を踏まえて、今後のこの問題の課題として、避妊や中絶に対する男性の意識調査の必要性があげられた。

記録担当：仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

▶ 2019 年度 後援シンポジウム詳細

日本フェミニスト経済学会 2019 年大会

東南アジアの経済成長とジェンダー 女性の移動・労働・定住

【日時】2019 年 7 月 13 日 (土) 10:00~18:00

【会場】北とぴあ (東京都北区)

【共通論題座長】

堀芳枝 (獨協大学教授)

【報告者】

堀芳枝 (獨協大学教授)

「フィリピンの経済社会変容と女性の労働-BPO の経済成長を中心に」

平野恵子 (IGS 特任リサーチフェロー)

「インドネシアの移住・家事労働者-出稼ぎ、都市化、組織化」

巢内尚子 (ラバル大学)

「移行経済下におけるベトナムからの移住 - 移住インフラの拡大と家事労働者・技能実習生」

Nagase Agalyn Salah (Kafin)

“The situation of Filipina Marriages Migration in Japan focusing on Kafin (NGO)”

【討論者】

足立眞理子 (IGS 客員研究員)

大橋史恵 (IGS 准教授)

【主催】日本フェミニスト経済学会

【後援】ジェンダー研究所、大阪府立大学女性学研究センター

【言語】日英 (要約通訳)

【趣旨】

日本で暮らす留外国人は 2017 年末で 256 万人と全人口の 2% を超え、外国人労働者も 128 万人と過去最高を更新した。国会では「新たな外国人材」の受け入れの入管難民改正も成立した。これまで長年問題視されてきた技能実習生の労働状況や人権問題について国会で議題となった。外国人労働者の賃金や生活、人権を保障などの課題は残されたままである。私たちが多文化共生型の社会をめざすべきことは言うまでもないだろう。

今回の一連の報道を振り返ってみると、外国人労働者を単純労働者、もっと言うと単なる労働力として積極的に受け入れようという側と、彼らの賃金や人権を保障をしたうえで、日本で働いてもらおうという側の共通点は、「貧しいアジアの外国人労働者たちは、日本で働きたいと考えている」という前提に立って、政策の是非を議論しているように感じられる。

しかし、東南アジアの経済社会は変わりつつある。2015 年に ASEAN 経済共同体を発足し、外国投資を呼び込みながら製造業だけでなく、観光やサービス業に力を入れて順調に経済成長を続けている。東南アジアと日本の関係はかつての垂直な関係から水平な関係に変化しつつある。私たちはこの前提にたつて、外国人労働者の受け入れ政策をもう一度考える必要があるのではないだろうか。

そこで本シンポジウムでは、東南アジアの経済成長によって、東南アジア国内での女性の労働や移住労働尾の在り方は、現在どうなっているのか。さらには、日本ですでに定住している女性たちは、現在どのような仕事や暮らしをしているのだろうか、という観点から、日本の外国人労働者受け入れ政策の再検討を試みたい。



4.

特別招聘教授 プロジェクト

2019 年度特別招聘教授
プロジェクト概要

ジャン・バーズレイ特別招聘教授
プロジェクト

▶ 2019 年度 特別招聘教授プロジェクト概要

領域・文化横断的なジェンダー研究の知見の共有

「特別招聘教授プロジェクト」の主な目的は、グローバルな視野から本学のジェンダーに関する教育研究活動の一層の推進及び活性化を図ることである。海外の著名な研究者を招聘し、高水準の研究プロジェクトの実施、国際シンポジウムの企画・登壇を含む国際的な研究ネットワークの構築、大学院生を対象としたセミナー等での講義による国際レベルのジェンダー研究教育プログラムの実施に貢献していただき「国際的研究拠点」としての研究所の総合力を向上させる重要な事業である。2019 年度は、**ジャン・バーズレイ氏**（ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授）を招聘した。

近代以降の日本の女性表象研究を専門とする**バーズレイ氏**は、舞妓表象と冷戦初期の女性表象についての研究プロジェクトを進めてくださり、招聘教授としての滞在期間にデータ収集を実施して、本研究に関する著書の多くの部分を執筆された。国際シンポジウム「The Philosopher & the Princess（哲学者と皇太子妃）——冷戦期日本における自由と愛と民主主義」（本報告書 47 頁参照）では、1950～60 年代の経済成長期の女性の教育機会の拡大、女性雑誌の隆盛と中流意識の浸透は女性たちにどのような選択肢をもたらしたのかをテーマにした企画をしていただいた。文学、ジェンダー、社会科学という様々な分野の参加者にとって大変興味深いシンポジウムになったと思う。他にも大学院の講義を担当していただき、本学の院生に対して、熱心な指導をしていただいた。大変フレンドリーなバーズレイ氏の講義は常に履修生を魅了する内容となったばかりか、講義以外の時間にも院生の英語論文指導をしていただくなど、本学の院生教育へ多大な貢献をしていただいた。

2019 年度の特別招聘教授プロジェクトにより、特に、ジェンダー研究の学際的な要素を引き出していただき、ジェンダー研究の学問的意義についても再確認する機会をいただいた。本研究所の研究成果はこれまで主に社会科学的なものに傾倒していたが、バーズレイ氏の領域横断的な研究からは、ジェンダー研究の多様性が示され、今後、本研究所が目指す事業への新しい方向性も提示していただいたと考えている。

■ ジャン・バーズレイ特別招聘教授プロジェクト

【ジャン・バーズレイ特別招聘教授プロフィール】



ノースカロライナ大学チャペルヒル校アジア研究科アジア学教授（日本史）。カリフォルニア大学ロサンゼルス校博士（東アジア言語と文化）。研究分野は日本の女性像とその表象である。『冷戦期日本の女性とデモクラシー』（ブルームスベリー学術出版、2014年、英語）をはじめ、著書多数。『日本の「青鞥」：1911年から1916年までの「青鞥」の新しい女のエッセイとフィクション』（ミシガン大学日本研究センター、2007年、英語）では、2011年の平塚らいてふ賞（日本女子大学）を受賞。また、ドキュメンタリー映画2本の作成にも携わるなど、広範かつ大変優れた研究実績を有している。また、アジア研究学会（南東部）の会長を務め、多くの学術誌編集に編集長や論文審査員として携わるなど、学術界への貢献度も高い。

【業績および期待されるプロジェクト成果】

ジャン・バーズレイ博士の専門領域は日本学研究で、これまで日本の近現代の文化、社会、女性に焦点を当てた研究を展開し、多くの優れた研究実績を挙げている。特に、近年の日本における女性の表象に関する著書と論文では、日本学研究者のみならず、ジェンダー研究者や社会学者からも、日本社会における女性の活躍についての理解を深めることにつながったという高い評価を得ている。バーズレイ氏は日韓米における研究ネットワークも確立しており、本学においてジェンダー研究所を拠点としたグローバルな共同研究ネットワークの構築に寄与することが可能である。また、バーズレイ氏の研究テーマは、独自の視点を持った大変興味深いものである。バーズレイ氏には2017年にジェンダー研究所が主催した国際シンポジウムにおいて基調講演者として登壇していただいた。このシンポジウムに参加した学生・院生及び学内外の研究者に好評を博した講演であったことから、本学の研究者・院生にとって、多くのことを学ぶ機会をもたらすことが期待できる。

【採用期間】 2018年8月2日～2019年7月31日

【職務内容およびその支援】

バーズレイ特別招聘教授に依頼した業務は、下記の5項目。ジェンダー研究所スタッフが事務業務支援を担当。2019年4～7月には本学博士後期課程生、木原遥がリサーチ・アシスタントを務めた。

- 1) ジェンダー研究所における研究プロジェクトの推進
- 2) 大学院セミナーでの講義など教育事業への参加
- 3) 国際シンポジウムの企画およびプログラム内での報告
- 4) ジェンダー研究所を中心とした国際的研究ネットワーク構築支援
- 5) 上記活動についての成果報告

【プロジェクト概要】

1) 研究プロジェクトの実施：書籍刊行プロジェクト 2 件

①舞妓表象研究『Maiko: Imagining Geisha Girlhood in Japan』 カリフォルニア大学出版（近刊予定）

- ・研究者間のレビューから戻された原稿をコメントに基づき改訂した。
- ・掲載予定画像の著作権取得の手続きをリサーチ・アシスタントと共に行った。

②50年代冷戦期の女性表象『Democracy's Poster Girls: Beauty Queens and Fashion Models in Cold War Japan』

- ・1950年代の雑誌・新聞記事を調査しての資料収集をリサーチ・アシスタントと共に行った。
- ・本プロジェクト調査に基づくセミナーを2019年7月10日に開催（本学院生、研究者対象）

2) ジェンダー研究所主催国際シンポジウムの企画運営および総合司会登壇

■国際シンポジウム「哲学者と皇太子妃：冷戦期日本における自由と愛と民主主義」(2019年5月19日)



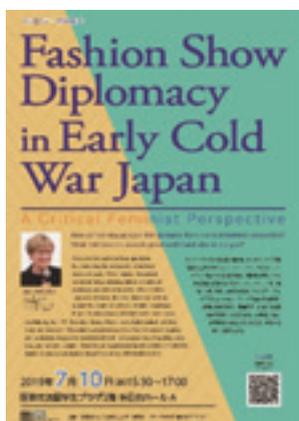
1950～60年代の日本における、フランス人フェミニスト哲学者のシモーヌ・ド・ボーヴォワールと美智子皇太子妃の社会的影響力に焦点を当てる内容。エモリー大学のジュリア・ブロック准教授を基調講演者に、津田塾大学の北村文講師と早稲田大学のゲイ・ローリー教授をディスカッサントに迎えて、IGSの大橋史恵が司会を務め、バーズレイ氏も研究報告を行った。女性の多様性や、戦後および冷戦という社会文化的背景がどのように若い女性たちの夢や希望に作用したかを再考し、現代社会における女性たちについて見つめなおすことを促す内容であった。



[参照:本報告書 47～49 頁]

3) 大学院生対象の英語によるセミナー講師

■IGSセミナー「冷戦初期の日本におけるファッションショー外交：フェミニスト視点からの批判的考察」(2019年7月10日)



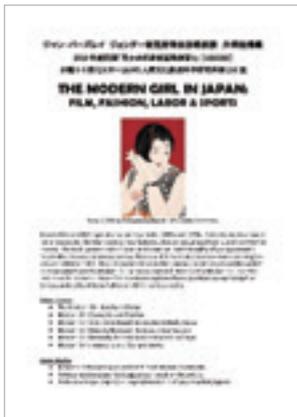
アメリカが主導する冷戦期の西側イデオロギーの推進政策は、政治の領域に留まらず、一見無関係に思われるファッションなど、生活の隅々にまで至る営みに組み込まれていたことを鋭く指摘する講義内容。冷戦初期という近代史をジェンダー視点から分析する、先駆的な研究成果の報告であり、ファッションの研究に取り組む学生たちの参加を得て、質疑応答での議論は現代のグローバルな状況についても含めて幅広く展開された。



[参照:本報告書 56～57 頁]

4) 大学院講義

■博士前期課程対象「The Modern Girl in Japan: Film Fashion, Labor and Sports」(2019 年度前期)



2019 年度前期の、博士前期課程共通科目「男女共同参画国際演習 I」[19S0259] を担当。1920～30 年代の日本のモダンガールについて、ファッション、仕事、映画、文学作品、娯楽やスポーツなどの多様な表象から分析する内容。演習を中心にした英語による講義。履修生 2 名、聴講生 1 名を含む 7 名の学生が出席した。今期は学生の英語スキルのレベルが揃い、学生同士の英語による討論も活発に行われた。前学期同様、熱心な学生たちの参加を得て、教えることが楽しい講義であったとのことである。

[参照:本報告書 123 頁]

5) その他の貢献

① 国際シンポジウム「踊る中国：都市空間における身体とジェンダー」コメント (2019 年 6 月 22 日)



19 世紀末以降の中国における女性の身体活動の変化に焦点を当てるシンポジウムでコメンテーターを務めた。3 件の研究報告で示された中国における経験を、歴史研究、近代的な身体、女性のセクシュアリティなどの視点から、アメリカにおける経験との関連性を解説した。シンポジウムの主要言語は日本語と中国語であったが、企画担当者である大橋史恵准教授とリサーチ・アシスタントの木原遥博士後期課程生のサポートにより、円滑なコミュニケーションを図ることができた。また、中国をフィールドに女性の表象研究に取り組む研究者との、ネットワーキングの機会にもなった。

[参照:本報告書 53～55 頁]

② 『ジェンダー研究』編集委員 (第 22 号、2019 年 7 月 31 日発行)



IGS が刊行する『ジェンダー研究』編集委員会に第 22 号編集から参加。書評用の書籍の選定や評者の紹介、英文校閲、さらに査読者の紹介など、編集に大きく貢献した。23 号以降も、学外委員として編集委員を務める。

[参照:本報告書 128～131 頁]

③ INTPART プロジェクト事業への関与：学術英語の教授

2019年に開始したINTPARTプロジェクト〔本報告書114～117頁参照〕の一環である、大学院生のノルウェー派遣実施にあたり、英語スキル向上のためのレッスンを担当した。具体的な教授内容は、自身の研究内容について口頭で簡潔に説明する技術、調査訪問を希望する先への依頼状や礼状の書き方、インタビューの準備方法など多岐に渡る。また、次年度以降もこれに倣ってINTPARTメンバーが言語面での準備について学生に教授できるよう、一連のレッスン内容についての報告書を作成提出している。

【プロジェクト成果】

2019年度のジャン・バーズレイ氏の本研究所への貢献は、前年度に引き続き、多岐に渡った。前記の各項目の活動に限らず、ジェンダー研究所やリーダーシップ研究所が企画するシンポジウムやセミナーにも積極的に参加するなど、グローバル女性リーダー育成研究機構の事業活動に深く関与した。所属の研究者やスタッフともよくコミュニケーションをとり、協調性や協働意欲が高く、その仕事ぶりは研究所所属の研究者にも大きな刺激となった。

中でも顕著なのは、教育面での成果であろう。博士前期課程の科目授業においては、ひとりひとりの達成度に気を配りながら教室での講義をするのみでなく、必要に応じて学位論文執筆に向けた個別指導も行った。また、専門分野の指導のみならず、海外へ調査研究に出かける学生の準備の支援なども進んで引き受け、学ぶ意欲のある者に積極的に手を差し伸べる姿勢からは、学生、所員ともに、学ぶところが多くあった。

国際シンポジウムにおいては、「戦後・冷戦期の女性」という現代史についての報告を起点に、21世紀社会のジェンダー状況をどのように読み解くかが検討された。社会人の参加者も多く、質疑応答での発言も活発にあり、生涯学習の場としての教育成果をあげるものでもあったといえる。そうした企画内容の価値もさることながら、シンポジウム当日、バーズレイ氏が、開始前の時間に聴衆の間を歩き、ひとりひとりに声を掛ける姿が印象的であった。このような交流が、聴衆をシンポジウム内での議論に惹き込む要素となっていることは間違いない。大学という場での学びは、一方的な知識の伝達ではなく、ひととひとの相互な知的交流により成るということを、改めて確認する場面であった。

研究については、表象研究および近現代史という人文科学分野のテーマが加わったことで、研究プロジェクトの多様性を向上させる成果があった。この点は、大学院講義、国際シンポジウム、セミナーにも反映され、結果として、社会科学系、人文科学系という異なる分野のジェンダー研究者間の研究交流の機会も作り出した。そうした分野間交流は、本学におけるジェンダー研究の質の向上につながるものである。

合わせて特記したいのは、一緒に来日した夫のフィル・バーズレイ氏による本学事業への貢献である。フィル氏のボランティアにより開催された、外国語教育センターでの英語カフェは、参加した学生たちにも好評であった。フィル氏のボランティアの申し出を快く引き受けてくださった、外国語教育センターの清水徹郎センター長、造力由美アソシエイトフェローに、この場を借りて感謝申し上げたい。

以上のとおり、本特別招聘教授プロジェクトは、本学におけるジェンダー研究に、研究、教育の両面で活性化をもたらす大きな成果をもたらすものであったといえる。

5.

国際研究ネットワーク

2019 年度

国際研究ネットワーク構築概要

- 1) 海外研究交流
- 2) 国際共同研究プロジェクト
- 3) JAWS・AIT
- 4) INTPART プロジェクト
- 5) 国内外招聘研究者一覧

▶ 2019 年度国際研究ネットワーク構築概要

各国の研究機関・研究者との国際研究・交流ネットワーク

ジェンダー研究所は日本におけるジェンダー研究の中核的な役割を担いながら、国内・海外の研究機関及び研究者らと広くネットワークを構築してきた。定期的に海外から優れた研究者を招聘するほか、海外からの若手研究者の受入れと日本からの派遣、国際共同研究に積極的に取り組んでいる。2019 年もアジア、ヨーロッパ、アメリカの研究者らと交流を進めた。日本—アメリカ女性政治学者の交流 (JAWS) プログラムに参加した若手研究者は発表原稿を論文に発展させてアメリカの学会誌に投稿した。また、ノルウェー科学技術大学のジェンダー研究センターと研究・教育面での交流を始めた。ジェンダー研究所のメンバーらがノルウェーを訪問し研究発表も行った。

ジェンダー研究所を拠点とする国際ジェンダー研究ネットワークイメージ



ヨーロッパ	アジア・オセアニア	日本国内	北米
<p>ノルウェー: ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター/オスロ大学</p> <p>デンマーク: オールボー大学/ロスキレ大学</p> <p>フランス: リール大学/パンテオン・アサス大学/ソルボンヌ・ヌーヴェル大学</p> <p>イギリス: ロンドン大学/エセックス大学/オープン大学</p> <p>招聘研究者 6 名 (118 頁参照)</p>	<p>台湾: 国立台湾大学/台湾国立政治大学/中央研究院近代史研究所</p> <p>韓国: 釜山大学/韓国ジェンダー政治研究所 /ソウル大学日本研究所/ソウル大学国際問題研究所/「East Asian International Relations Theory」研究会</p> <p>香港: 香港浸會大学社会科学学院・文学院/</p> <p>タイ: アジア工科大学院大学 (AIT)</p> <p>インドネシア: スラバヤ大学 /Migrant CARE /インドネシア大学戦略的国際研究大学院ジェンダー研究センター</p> <p>招聘研究者 7 名 (118 頁参照)</p>	<p>政治代表におけるジェンダーと多様性研究会 (Gender, Diversity and Representation (GDRRep))</p> <p>日本政治学会「ジェンダーと政治」研究会</p> <p>国際移動とジェンダー研究会</p> <p>現代規範理論研究会</p> <p>Transnational Commercial Surrogacy and the (Un)Making of Kin 研究会</p> <p>招聘研究者 21 名 119 頁参照)</p>	<p>米国: 日本—アメリカ女性政治学者シンポジウム (Japan-American Women Political Scientists Symposium, JAWS) /American Political Science Association/ワシントンカレッジ/アメリカン大学/ブリッジポート大学</p> <p>《特別招聘教授》</p> <p>米国: Jan Bardsley (ノースカロライナ大学チャペルヒル校)</p> <p>招聘研究者 4 名 (119 頁参照)</p>

1) 海外研究交流

■ジェンダー研究所所属の研究者が 2019 年度に研究交流または共同研究をした海外の研究者

<アジア・オセアニア>

黄長玲 (Chang-Ling Huang) (国立台湾大学教授)

【担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

「東アジアにおける政治とジェンダー」研究プロジェクトの研究協力者。韓国ジェンダー政治研究所との共同研究の台湾国会議員アンケート調査を実施。(本報告書 18 頁参照)

楊婉瑩 (Wan-Ying Yang) (台湾国立政治大学教授)

【担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

「東アジアにおける政治とジェンダー」研究プロジェクトの研究協力者。韓国ジェンダー政治研究所との共同研究の台湾国会議員アンケート調査を実施。研究成果発表・論文の執筆。(本報告書 18 頁参照)

Ah-ran Hwang (釜山大学教授)

【担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表性的性差に関する公式、非公式的的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。研究成果発表・論文の執筆。

Jinock Lee (韓国ジェンダー政治研究所研究委員)

【担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表性的性差に関する公式、非公式的的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。研究成果発表・論文の執筆。

Soo-hyun Kwon (韓国ジェンダー政治研究所研究委員)

【担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表性的性差に関する公式、非公式的的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。研究成果発表・論文の執筆。

(研究交流または共同研究をした海外の研究者)

<アジア・オセアニア>

游鑑明 (中央研究院近代史研究所研究員)

【担当】大橋史恵 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

国際シンポジウム「踊る中国：都市空間における身体とジェンダー」(2019年6月22日)において、近現代中国における「踊る」女性の身体をめぐって討議を行った(本報告書53頁参照)

Yao-Tai Li (香港浸會大学社会科学院助教)

【担当】大橋史恵 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

社会科学院の所属教員らの参加するセミナーにおいて、中国と香港の移住家事労働者をめぐる問題について研究報告を行った。

Chia-Ling Wu (国立台湾大学准教授)

【担当】仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【共同研究・研究交流の概要】

2019年、国立台湾大学の Chia-Ling Wu 氏が Kim Koo Foundation から得た研究資金をベースに、Global Asia Research Center (GARC)が主体となって、アジアの生殖医療をめぐる問題を研究する研究者が集まり、国際シンポジウム New Reproductive Technologies and Global Assemblages: Asian Comparative Perspectives が2019年5月17日と18日に台湾大学で開催された。シンポジウムにはアメリカ、韓国、デンマーク、オーストラリア、日本から計12名の研究者が集まり、その一人として参加した。そして代表者である Wu 氏を中心に参加した研究者らと共同執筆して書籍の出版を検討中。

Khanis Suvianita (スラバヤ大学非常勤講師)

【担当】平野恵子 (IGS 特任リサーチフェロー)

【共同研究・研究交流の概要】

科学研究費・基盤研究C「インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合」(研究代表者・中谷潤子、大阪産業大学)における現地共同調査。国際学会でのパネル共同報告(本報告書39頁参照)

Anis Hidayah (Migrant CARE 移民研究センター長)、Wahyu Susilo (Migrant CARE 代表)

【担当】平野恵子 (IGS 特任リサーチフェロー)

【共同研究・研究交流の概要】

移住労働者送出し法制度改正および日本への技能実習生送出しに関し、意見交換をおこなった。科学研究費・基盤研究C「現代インドネシアにおける『移住・家事労働者』の変容」(研究代表者・平野)の研究助成による。(本報告書38頁参照)

(研究交流または共同研究をした海外の研究者)

<ヨーロッパ>

Elizabeth Evans (ロンドン大学教授)、Kimberly Cowell-Meyers (アメリカン大学助教授)

【担当】 申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

Politics & Gender (アメリカ政治学会学会誌) の特集「Women's Party (女性政党)」の共同責任編集担当 (2019年発行)。King's College London, Global Institute for Women's Leadership の web サイトにて、ブログを共著。

Diane Elson (エセックス大学社会学部名誉教授)

【担当】 大橋史恵 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

IGS セミナー「『ジェンダーと開発』を問い直す：ダイアン・エルソンとの対話」(2019年10月22日)を開催し、ジェンダーと開発に関連する分野において研究を進めてきた若手研究者らと交え、ワークショップ型の研究交流を実施した。(本報告書 62 頁参照)

Diane Elson (エセックス大学名誉教授)

【担当】 板井広明 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

10月21日(月)に武蔵大学で開催された国際シンポジウム『所得格差におけるジェンダーと階級 Intersections of Gender and Class in the Distribution of Income』にパネリストとして参加し、ダイアン・エルソン (エセックス大学名誉教授) 氏と、フェミニスト経済学について意見交換を行なった。

Gabrielle Radica (リール大学教授、横浜国立大学客員教授)

【担当】 板井広明 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

1月30日に開催した IGS セミナー “A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives: Family, Society, and Gender.” に登壇してもらい、フランス 18 世紀～19 世紀における啓蒙思想家の女性論について意見交換を行なった。(本報告書 70 頁参照)

Anne Brunon-Ernst (パンテオン・アサス大学教授)

【担当】 板井広明 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

1月30日に開催した IGS セミナー “A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives: Family, Society, and Gender.” に登壇してもらい、ベンサムとフーコーの比較を通して権力論に関する意見交換を行なった。(本報告書 70 頁参照)

Ophélie Siméon (ソルボンヌ・ヌーヴェル大学准教授)

【担当】 板井広明 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

1月30日に開催した IGS セミナー “A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives: Family, Society, and Gender.” に登壇してもらい、19 世紀前半に活躍した A.D.ウィーラーのフェミニスト的思想について意見交換を行なった。(本報告書 70 頁参照)

(研究交流または共同研究をした海外の研究者)

Stine Willum Adrian (オールボー大学准教授)

【担当】 仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【共同研究・研究交流の概要】

科研基盤 C「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究」(研究代表: 仙波) プロジェクトで、日本における提供精子不足の問題に関連した情報を集めるために、2019 年 9 月にデンマークのオールボー大学を訪れ、Adrian 氏から氏自身が行ってきたヨーロッパの精子バンクやドナー情報の扱いについての研究成果を含めた情報を提供してもらい、デンマークの精子バンクの現地調査の協力も得た。(本報告書 28 頁参照)

Rikke Andressen (ロスキレ大学教授)

【担当】 仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【共同研究・研究交流の概要】

科研基盤 C「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究」(研究代表: 仙波) プロジェクトに関連して、デンマークの精子バンクにおけるドナーの情報管理や出生した子のドナー情報入手や出自を知る権利に関する問題について、コペンハーゲンの Andressen 氏宅を訪れ、情報提供を受ける。(本報告書 28 頁参照)

Kristin Engh Førde (オスロ大学ポスドクフェロー)

【担当】 仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【共同研究・研究交流の概要】

科研基盤 C「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究」(研究代表: 仙波) プロジェクトに関連して、ノルウェーのオスロ大学を訪問し、ノルウェーにおいて提供精子で出生した人のドナー情報にアクセスする権利を保障する法律が成立した経緯について、当時の現地の新聞記事や現地の論文等、情報提供を受ける。(本報告書 28 頁参照)

Guro Korsners Kristensen (ノルウェー科学技術大学教授)

【担当】 仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【共同研究・研究交流の概要】

2018 年度から始動しているノルウェー科学技術大学と IGS の二国間共同研究 (NJ_BREGED Project) の一環として、Kristensen 氏とは日本とノルウェーのファミリープランニングと出生率に関連する比較研究をすすめている。研究の成果は、二国間共同研究の成果物となる書籍 *Same but different? Comparative Perspectives on Gender Equality and Diversity in Japan and Norway* (仮題) の中の章の一つで“Public Discourses on Fertility and Family Planning in Japan and Norway”というタイトルで共同執筆の予定。(本報告書 114~117 頁参照)

Merete Lie (ノルウェー科学技術大学教授)

【担当】 仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【共同研究・研究交流の概要】

2018 年度から始動しているノルウェー科学技術大学と IGS の二国間共同研究 (NJ_BREGED Project) の一環として、Lie 氏とは日本とノルウェーの生殖医療とジェンダーに関連する比較研究をすすめている。研究の成果は、二国間共同研究の成果物となる書籍 *Same but different? Comparative Perspectives on Gender Equality and Diversity in Japan and Norway* (仮題) の中の章の一つで“Why egg donation has not been allowed in both Norway and Japan? Eggs and sperm are treated differently” (仮題) というタイトルで共同執筆の予定。(本報告書 114~117 頁参照)

(研究交流または共同研究をした海外の研究者)

Lesley Hoggart (オープン大学教授)

【担当】 仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【共同研究・研究交流の概要】

イギリスのオープン大学の Lesley Hoggart 氏が IGS を訪問した際、IGS の大橋史恵准教授が企画した IGS 交流研究会で、日英の中絶をめぐる状況について情報交換を行った。2020年1月24日にIGSで開催したその研究会で Hoggart 氏は“Exploring how women’s contraceptive choices can be influenced by their views on abortion“を報告し、仙波は“Contraception and Abortion in Japan”と題して日本の状況に関して報告した。そして参加者全員でこの問題について議論した。(本報告書 84 頁参照)

<北米>

Linda Hasunuma (ブリッジポート大学助教授)

【担当】 申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

英文学術雑誌 *Journal of Women, Politics and Policy* (2019) に共著論文“#MeToo in Japan and South Korea : #WeToo, #WithYou,”執筆。本論文が 2020年1月 Routledge 社から出版。2019年度 JAWS (ボストン) の共同ファシリテーター。(本報告書 104~106 頁参照)

Melissa Deckman (ワシントンカレッジ教授)

【担当】 申琪榮 (IGS 准教授)

【共同研究・研究交流の概要】

第9回 JAWS (ボストン開催) にて共同でファシリテーター担当。(本報告書 104~106 頁参照)。

■ジェンダー研究所所属の研究者が研究交流・共同研究をしている海外の研究機関

韓国ジェンダー政治研究所

韓国ジェンダー政治研究所は 1999 年に設立された NPO。政治分野におけるジェンダーギャップを解消するために世論喚起、研究、ロビー活動を行っている当該分野で代表的な民間研究所。

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

当研究所理事を務める。2016 年～2018 年に韓国研究財団から助成金を受託し、共同研究を実施。研究課題は「議会内政治的代表的性差についての公式・非公式制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」。（本報告書 147 頁参照）

ソウル大学日本研究所

日本研究の活性化と日韓相互理解の増進を目標として 2004 年に設立。日本関連資料の収集、国際学術会議、学術活動事業、情報ネットワーク構築、次世代日本専門家の養成等の事業を遂行。

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

学術雑誌『日本批評』海外編集委員。ならびに共同研究プロジェクト『思想と文学』共同研究員を務める。

ソウル大学国際問題研究所

ソウル大学政治外交学部設立され、外交問題や国際政治の研究に取り組む研究所。研究活動の一部として Social Science Korea 「East Asian International Relations Theory」を遂行。

【担当】申琪榮（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

Social Science Korea 「East Asian International Relations Theory」共同研究員。東アジアの国際関係理論におけるフェミニスト国際政治、日本研究を担当。

香港浸會大学社会科学院・文学院

2017 年度より社会科学院と文学院の連携において The Gender Studies Concentration（性別研究専修課程）を設立し、ジェンダー研究分野における教育体制を構築している。

【担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

担当教員が社会科学院・文学院の共同プログラムであるジェンダー研究専修課程の所属教員らとのあいだで研究交流を実施している。

アジア工科大学院大学（AIT）環境資源開発研究科「ジェンダーと開発」専攻

1959 年創立で 60 以上の地域から 1700 人以上の学生が学んでいる理工系を中心とした全寮制の大学。学内公用語は英語で、当該専攻はジェンダー視点から開発の問題を研究している。

【担当】日下部京子（AIT 教授）、申琪榮（IGS 准教授）、板井広明（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

本学ジェンダー社会科学専攻院生の AIT 派遣、AIT 院生の日本でのフィールドワーク受入による交換研修プログラム、「AIT ワークショップ」を実施し（本報告書 107～113 頁参照）、国際的な視点を持った若手研究者の育成およびアジア各国出身学生との研究交流を進めている。

(研究交流・共同研究をしている海外の研究機関)

インドネシア大学戦略的国際研究大学院ジェンダー研究センター

インドネシア国内で初めて女性学・ジェンダー研究に関する大学院を設置。研究者のみならず、政府関係者（中央、地方）、社会運動家、起業家等、多くの人材を輩出している。本研究センターは、大学院所属ジェンダー研究を専門とする教員より構成される。

【担当】平野恵子（IGS 特任リサーチフェロー）、Sulistiyowati Irianto（インドネシア大学教授、センター員）
Mia Siscawati（インドネシア大学教員、センター長）、Shelly Adelina（インドネシア大学教員、センター員）、Ani Widyani Soetjipto（インドネシア大学教員、センター員）

【共同研究・研究交流の概要】

2008年以降、定期的に研究交流を実施している。今年度は特に、①移住労働者送出し法制度の変更、②2019年4月実施の大統領選挙、総選挙、地方自治体首長選挙、統一地方選挙における女性運動の関わりについて、情報提供を受けた。また、2020年1月に実施したIGSセミナー“Gender and Politics in Indonesia after 2019 Election”にDr. Ani Widyani Soetjiptoを招聘し、公開セミナーを実施した（本報告書73頁参照）。次年度、IGS Project Seriesとしてブックレットを刊行する予定である。

ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター

ノルウェー最大の大学NTNUに属する、1989年設立の研究センター。人間関係や文化とジェンダーの関連性およびそれらの変容に着眼した、学際的なジェンダー研究に取り組んでいる。ノルウェー国内のジェンダー研究の中心拠点でもあり、国際的なネットワーク構築も積極的に進めている。

【担当】石井クンツ昌子（IGS 所長）、小玉亮子（IGS 研究員）、吉原公美（IGS 特任 RF）、ほか

【共同研究・研究交流の概要】

2018年11月のNTNU研究者本学来訪を起点に交流が開始され、国際連携プロジェクトに実施についての協議を進めた。ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金INTPARTに採択され、2019年度より3年間、同助成金による共同プロジェクトを実施する（本報告書114～117頁参照）。

【国内外関連研究会】

○政治代表におけるジェンダーと多様性研究会（Gender, Diversity and Representation（GDRRep））

〈コーディネーター〉申琪榮（IGS 准教授）

〈メンバー〉三浦まり（上智大学教授）、Jackie Steele（名古屋大学特任准教授）

○日本政治学会「ジェンダーと政治」研究会（申）

○「East Asian International Relations Theory」研究会（申）

○国際移動とジェンダー研究会（大橋・平野）

○現代規範理論研究会（板井）

○Transnational Commercial Surrogacy and the (Un)Making of Kin 研究会（仙波）

○国内の女性学・ジェンダー研究センターとのネットワーク

ジェンダー関連学協会コンソーシアムへの参加 ほか

2) 国際共同研究プロジェクト

ジェンダー研究所所属メンバーは、各国の研究者たちと国際共同研究プロジェクトを推進している。

プロジェクトタイトル	
東アジアにおけるジェンダーと政治	
メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
【研究分担者】 Ah-ran Hwang	韓国釜山大学
Jinock Lee	韓国ジェンダー政治研究所
Soo-hyun Kwon	韓国ジェンダー政治研究所
三浦まり	上智大学
Jackie Steele	東京大学
Chang-ling Huang	国立台湾大学
Wan-ying Yang	台湾政治大学
研究プロジェクト概要	
<p>東アジア地域はその経済発展の成果により国際的に注目されているが、政治の民主化の道筋は一様ではない。本研究プロジェクトでは、日本、韓国、台湾の民主主義の有り様と政治代表性の関係について、ジェンダー視点に立脚した国際共同研究により比較分析する。議員を対象としたアンケート調査、政党、議員、市民社会関係者へのインタビューや現地でのフィールドワークを実施するほか、定期的な国際シンポジウムや研究集会を開き、研究交流を促進する。東アジア地域において、政治代表性の男性優位性が続くメカニズムを明らかにし、政治制度におけるジェンダー公平性・多様性を実現させる政策も検討する。2019年度も成果をまとめ国内外で成果発表を行った。日本の国会議員を対象とする2度目のアンケート調査も実施した。(本報告書 18 頁参照)</p>	

プロジェクトタイトル	
議会内政治的代表的代表制の性差についての公式・非公式制度要因分析 韓国・日本・台湾比較分析	
メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 Ah-ran Hwang	韓国釜山大学
【研究分担者】 申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
Jinock Lee	韓国ジェンダー政治研究所
Soo-hyun Kwon	韓国ジェンダー政治研究所
研究プロジェクト概要	
<p>2016年度から韓国研究財団から助成金を受託し共同研究を実施。研究課題は「議会内政治的代表的代表性の性差に関する公式、非公式制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」。ジェンダー研究所の「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究プロジェクト（本報告書 18 頁参照）の韓国調査を実施。2019年度は、成果をまとめ国内外で成果発表に力を入れた。</p>	

プロジェクトタイトル	
Politics & Gender 共同編集	
メンバー	メンバー所属研究機関
【共同責任編集者】	
申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
Elizabeth Evans	University of London
Kimberly Cowell-Meyers	American University
研究プロジェクト概要	
Politics & Gender (アメリカ政治学会学会誌) の「Women's Party(女性政党)」特集を企画し、アメリカ、イギリス、スウェーデンの研究者らと日本を含む5カ国における女性政党に関する事例研究を紹介(2019年発行)。	

プロジェクトタイトル	
科学研究費・基盤研究 C 「インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合」	
メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 中谷潤子	大阪産業大学
【研究分担者】 平野恵子	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
北村由美	京都大学
Khanis Suvianita	スラバヤ大学
研究プロジェクト概要	
本研究は、インドネシア人移住労働者の再統合について、帰還後のライフステージ構築の過程を本人や家族、コミュニティメンバーへの聞き取り調査をもとに明らかにする。2017年度～2019年度。最終年度である2019年は、国際学会 SEASIA Biennial Conference 2019 (at Academia Sinica, Taipei) において共同報告を実施し、調査報告書『インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合』を刊行した。(本報告書39頁参照)	

プロジェクトタイトル	
Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)	
メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 石井クンツ昌子	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
Guro Kristensen	ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター
【研究分担者】	
申琪榮/大橋史恵/仙波由加里	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
小玉亮子	お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系/ジェンダー研究所
佐野潤子	お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所
松田デレク	お茶の水女子大学国際教育センター
Priscilla Ringrose	ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター
Siri Øyslebø Sørensen	ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター
Jennifer Branlat	ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター
研究プロジェクト概要	
ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金 (INTPART) による、2019～2021年度の3年間に渡る国際共同プロジェクト。お茶の水女子大学ジェンダー研究所とノルウェー科学技術大学ジェンダー研究センターの所属員が参加。家族、教育とジェンダー、生殖医療などの領域で、ノルウェーと日本の国際比較研究に取り組むほか、互いの大学に滞在しての在外研修や、修士・博士院生の共同指導、ワークショップ・セミナーの開催といった活動を進める。最終年度に研究を英語書籍として刊行する計画。(本報告書114～117頁参照)	

3) JAWS・AIT

ジェンダー研究所は、次世代ジェンダー研究者を養成するための持続的な国際研究交流ネットワークの形成にも取り組んできた。その代表的な活動が「日本—アメリカ女性政治学者シンポジウム」(Japan-America Women Political Scientists Symposium, JAWS)と「AIT ワークショップ」である。

JAWS は、政治学分野でジェンダー研究を遂行する日米の女性研究者らが、日本とアメリカで交互に集まって研究交流を行うユニークな研究ネットワークである。参加者は、互いの研究交流はもちろん、若手研究者に参加を促して国際的な視点を身につけてもらうと共に、政治学分野でマイノリティーである若手女性研究者にメンタリングを行う。ジェンダー研究所は JAWS の活動拠点として、日本が開催地となる際は、研究集会・国際シンポジウムを主催し、成果発信にも努めている。

AIT ワークショップはお茶大の大学院前期課程「ジェンダー社会科学専攻」の院生と、タイのアジア工科大学院大学「ジェンダーと開発」専攻の院生達が、タイと日本でフィールドワークを実施しながら学び合う教育プログラムである。ジェンダー研究所は本プログラムを立ち上げた主体でもあり、現在まで派遣および受け入れの運営主体として若手研究者の国際交流に努めている。

▶ JAWS

■概要と歴史変遷

JAWS の歴史は 2000 年の夏に遡る。2000 年にアメリカン大学 (American University) のカレン・オコナー (Karen O'Connor) 教授が、同大学に「女性と政治研究所」(The Women and Politics Institute) を開設したことを記念して「女性と政治に関する比較政治学」ワークショップを主催したことがその始まりである。このワークショップに、アメリカ政治学会と日米友好基金 (The Japan-US Friendship Commission) の支援を得て日本から 5 名の研究者が招かれ、同じく招かれた 7 名のアメリカの研究者らと 3 日間にわたって研究交流が行われた。

当時、日本の政治学の分野では、女性政治学者がとりわけ少数であったのみならず、ジェンダー視点に基づいた研究は、政治学研究としてほとんど関心を持たれていなかった。これがさらに若手女性研究者を遠ざけ、「女性と政治」分野の研究が進まない原因となっていた。そんな中で始まったアメリカの研究者との交流は、日本の研究者にとって国際的な研究動向に触れることに加え、日本で女性研究者が政治学を研究するときにつつかる様々な壁について議論する場も提供した。女性研究者の地位向上や女性研究者が行っている研究への評価という問題は、アメリカの女性研究者らにとっても共通の課題であった。

JAWS を始めたアメリカの女性研究者、M・マーガレット・コンウェイ (M. Margaret Conway)、カレン・オコナー、マリアン・パリー (Marian Palley) は、そのような女性研究者の課題に取り組んできた「女性と政治」研究のパイオニアであった。彼女らは同分野の女性研究者を励ましてサポートするだけでなく、自ら質の高い論文を政治学ジャーナルに発表することで、「女性と政治」研究を正統性のある政治学の研究として位置付けることに貢献したのである。JAWS を通じての交流により、日本の研究者とアメリカの若手研究者たちはアメリカの第一世代女性研究者らの経験を共有し、大きな励ましを得ることができた。例えば、2000 年の第 1 回 JAWS ワークショップの参加者たちは、後にアメリカ政治学会の実行委員会長 Rob Hauck の協力を得て学会誌『PS: Political Science & Politics』の 2001 年 6 月号に論

文を掲載した。この掲載をきっかけに JAWS の日本参加者らは日本の政治学会でも注目されることになり、彼女らの研究も認められるようになったと回顧する。岩本美砂子（三重大学）、大海徳子（お茶の水女子大学）は福岡市で開催された 2006 年世界政治学会（IPSA）の準備委員も務めた。

このように JAWS は日本の研究者たちに、アメリカの女性研究者との交流による研究やキャリアの発展、アメリカ政治学会での研究発表、長期にわたってのメンタリングの機会を与えてくれた。アメリカの研究者にとっても、日本で研究発表を行う機会、日本の女性研究者とのネットワーク形成、若手研究者のキャリア開発へと繋がった。歴代の JAWS に参加した日米の女性研究者らは、互いの社会の相違点を認識しつつ、それぞれの場で女性研究者が直面する課題に取り組み、国際的な視点で研究を進めていく貴重な経験を得たのである。

JAWS は 2000 年から現在に至るまで、日米友好基金等の支援を得て 9 回研究集会を実施した。その概要を簡単に以下に振り返る。

第 2 回：マリアン・パリー教授（デラウェア大学,University of Delaware）が 2001 年サンフランシスコで開かれたアメリカ政治学会で「Women in Japan and the US」をテーマに企画し、12 名が参加した。

第 3 回：2002 年に日本で開催。アメリカから 3 名が参加した。三重大学、お茶の水女子大学のジェンダー研究センターで研究集会を開催した他、女性議員、地方議員、アクティビスト達に面会した。

第 4 回：2003 年、デラウェア大学とアメリカ政治学会（フィラデルフィア市）で開催され、新たに若手研究者が日本から 3 名、アメリカから 2 名加わった。この時の成果として、2004 年 1 月号の『PS: Political Science & Politics』に論文要約が掲載された。論文全文はアメリカ政治学会ウェブサイトの Special E-Symposium で公開された。

第 5 回：2007 年にジュリー・ドーラン（Julie Dolan）准教授（マカレスター・カレッジ,Macalester College）とアメリカ政治学会（APSA）の Bahram Rajaee の企画によって開かれた。APSA（シカゴ市）では「女性と外交」を題したパネルを構成した他、マカレスター・カレッジ（ミネソタ州セントポール市）で研究集会が開かれた。14 名の日米女性研究者が参加した。

第 6 回：2009 年、再び日本で開かれアメリカから 6 名の研究者が来日した。アメリカ大統領選挙に挑んだヒラリー・クリントンとサラ・ペイリンに関する研究、アメリカの少数政党における女性の役割、下院議員のスピーチ分析、医療政策と女性など最新の研究を報告した。日本の参加者も女性と地方議会、投票行動、女性議員のリクルートメント、女性国会議員に関する研究を発表した。お茶の水女子大学のジェンダー研究センターはドイツ日本研究所（German Institute for Japanese Studies）と共に東京の研究集

会を主催した。アメリカの研究者らは東京都世田谷区の生活者ネットワークを訪問、さらに富山県で行われた母親大会でも研究発表し好評を得た。

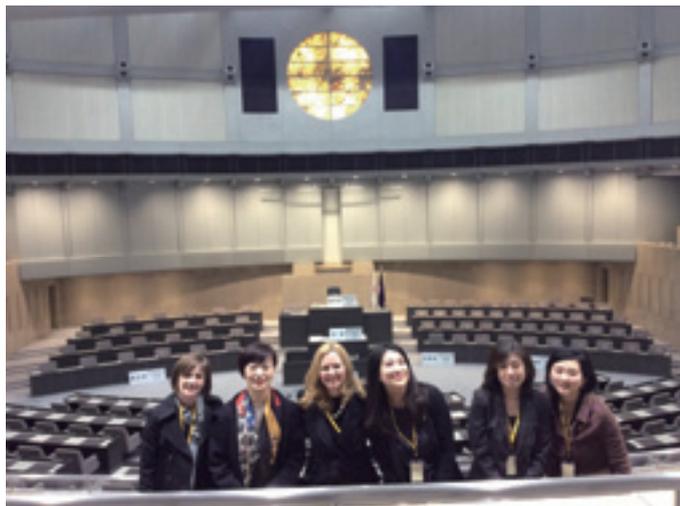
第 7 回：2010 年に、メリッサ・デックマン（Melissa Deckman）准教授（ワシントン・カレッジ,Washington College）と APSA の Bahram Rajaee の企画によってアメリカで開催された。参加者は「Gender, Politics and Policy: Post-Elections」をテーマにワシ



第 8 回 JAWS（2017 年）、お茶の水女子大学での研究交流会

ントン・カレッジ（メリーランド州）とアメリカ政治学会（Washington DC）で研究報告を行った。2010年のJAWSは日米から19名が参加し、それまでで最大規模となった。

第8回：時をおいて2017年に日本で再開された（しばらく開催されなかったのは資金上の問題と第一世代の高齢化による）。JAWSの再開を兼ねてジェンダー研究所がアメリカからジュリー・ドーランとメリッサ・デックマン（マリアン・パリー教授も来日予定だったが、悪天候により断念した）を招聘し、国際シンポジウム「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？」を開催した。130名を超える多くの聴衆が集まり大盛況だった。このほか、東京都議会訪問や、JAWS



第8回JAWS（2017年）、東京都議会訪問

の新旧メンバー、ジェンダー研究所の研究者、お茶大の院生らとの研究交流も行った。この時の成果は2018年刊行の『ジェンダー研究』21号の特集「Gender and Political Leadership」に掲載された。

アメリカ政治学会におけるJAWS HP→<https://connect.apsanet.org/jaws/>

■JAWS 2018年度成果

2018年JAWS（第9回） 「ジェンダーと民主主義」 “Gender and Democracy”

（8月28日～31日、マサチューセッツ州、ボストン）

2018年、第9回JAWSがアメリカ政治学会の協力を得てボストンで4日間開催された。ボストン市にあるサフォーク大学のローゼンバーグ東アジア研究所は、研究集会の場所とレセプションを提供してくれた。今年から第一世代のJAWSメンバーは引退した形となり、申琪榮（ジェンダー研究所）、メリッサ・デックマンが引き続きファシリテーターとして参加した以外は、全員新しいメンバーが参加した。

今回はリンダ・ハスヌマ（Linda Hasunuma）（ブリッジポート大学, University of Bridgeport）と三浦まり（上智大学）が加わり、アメリカ政治学会の国際交流担当のAndrew Stinsonの協力も得て、アメリカ政治学会と日本政治学会から、若手女性研究者に参加を呼びかけた。最終的に日米からそれぞれ若手研究者を6名ずつ、計12名を選抜した。

テーマは「ジェンダーと民主主義」（Gender and Democracy）として、4名のファシリテーターが初日にレクチャーをすることで始まった。12名の参加者は研究セッションとアメリカ政治学会パネルで、女性運動、女性の政治参画、トランスナショナルな女性連帯、リーダーシップ、政治参加のジェンダーギャップなどについて研究発表を行った。そのほか、キャリア形成、メディアと研究発信、論文の出版などについて議論するセッションも設けた。女性の政治参加に関する大規模な研究を支援している「Barbara Lee Foundation」も訪問し財団の活動についてうかがった。（具体的なスケジュールは

<https://mk0apsaconnectbvy6p6.kinstacdn.com/wp-content/uploads/sites/22/2019/02/2018-JAWS-detailed-schedule.pdf>）

■JAWS 2019年度成果

JAWS 2018年の参加者らがアメリカ政治学会で発表した論文をさらに発展させ、アメリカ政治学会の学術雑誌「PS」に投稿した。その内4名が採択され掲載予定である。また、JAWS 2020年（日本）に向けて、アメリカ政治学会のコーディネーターと協力して資金申請に取り組んだ。

▶ AIT

■国際教育交流プログラム「AIT ワークショップ」概要

開発とジェンダーの問題を海外で実践的に研究するプログラム

18 年目を迎える国際教育交流プログラム

AIT ワークショップは、ジェンダー研究所と、タイのアジア工科大学院大学（Asian Institute of Technology (AIT)）とにより実施されている、国際教育交流プログラムである。

2001 年に、ジェンダー研究センター（現ジェンダー研究所）所属教員と、AIT「ジェンダーと開発」専攻の日下部京子教授らの尽力によって始められ、2004 年には、本学と AIT との間で大学間学術交流協定が結ばれた。以降、協定に基づき、タイ AIT で実施されるワークショップへの本学博士前期課程院生を主とする派遣と、AIT 大学院生の日本国内での研修受入による、大学院生を主体とした研究交流事業をほぼ毎年実施している。

2012 年度からは、AIT ワークショップ・プログラムは、ジェンダー研究センターが従来提供してきた大学院博士前期課程科目「国際社会ジェンダー論演習」として単位認定が始まった。2013 年度はサマープログラムを活用して AIT 院生の日本国内研修を実施し、2014 年度からは大学院博士前期課程科目「フィールドワーク方法論」を国内事前研修として取り入れ、本年で 18 年目を迎えた。

グローバルなフィールドでの理論的検討と実践的学習

本教育プログラム（「国際社会ジェンダー論演習」）の目的は、開発とジェンダーにかかわるグローバルな課題群の分析方法や視座、海外におけるフィールド調査の基礎を、実践的に学習することにある。

大学院講義の事前学習（関連機関での調査）、調査して得た知見の英語によるプレゼンテーション、報告書作成という一連の調査研究の研修を通して、修士論文作成のための技能を習得する。加えて、英語によるインタビュー、プレゼンテーション、論文執筆の訓練機会にもなる。

このような充実したプログラムを通して、参加者は開発の問題をジェンダー視点から考察することの意義を皮膚感覚と理論的観点からより深く把握することができるようになる。また AIT に集まるアジア各国の院生の熱意ある議論スタイルや問題関心の多様さから刺激を受け、研究手法や語学のブラッシュアップへの動機づけを得る。その結果、研究者としての議論の組み立て方や調査方法、研究アプローチについて際立った効果が参加者には見られるのであり、本プログラムは比類のない教育効果をもっていると言える。

■AIT ワークショップ過年度実績

実施年度	研修テーマ
2001	Gender and Development ジェンダーと開発
2002	Gender, Work and Globalization ジェンダー、労働、グローバリゼーション
2003	Women, Globalization and Home-based Work 女性、グローバリゼーション、在宅労働
2004	Female Migrant Workers' Rights in Thailand タイにおける女性移動労働者の権利 【協定締結】
2005	Gender and Development in Thailand: Labor rights and violence against women タイにおけるジェンダーと開発：労働者の権利と女性に対する暴力
2006	〔実施せず〕
2007	Gender, Rights and Empowerment ジェンダー、権利、エンパワメント
2008	Thailand-Japan Interactive Research Actions by Using Gender Perspectives ジェンダー視点によるタイ・日本相互研究
2009	Gender and Policy: Through Thailand-Japan Interactive Analysis ジェンダーと政策：タイと日本の相互分析を通して
2010	Gender and Social Change: Comparative Analysis of Thailand and Japan ジェンダーと社会改革：タイと日本の比較分析
2011	Gender and Disaster ジェンダーと災害〔特別プログラム：本学でのシンポジウム開催〕
2012	Sexuality セクシュアリティ
2013	Global Justice, Women's Health and Prostitution グローバル・ジャスティス：女性の健康と売春
2014	1) Sexuality, 2) Gender and Poverty, 3) Education and Empowerment 1) セクシュアリティ、2) ジェンダーと貧困、3) 教育とエンパワメント
2015	Labor, Sexuality and Empowerment 労働、セクシュアリティ、エンパワメント
2016	Labor and Association from Gender Perspective ジェンダー・パースペクティブから見た労働と組織
2017	Sexual minority and migrant workers from gender perspectives ジェンダー視点から見たセクシュアル・マイノリティと移住労働者
2018	Power and Sexuality from Gender perspectives ジェンダー・パースペクティブから見た権力とセクシュアリティ
2019	Gender and Empowerment in Urban Space 都市空間におけるジェンダーとエンパワメント

■履修生の卒業後の軌跡

AIT ワークショップでの経験から留学・就職そして現在まで

大類 由貴

2015 年度 AIT ワークショップ履修生

勤務先：公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

2015 年度に参加した AIT ワークショップは、その後 AIT へ留学する大きなきっかけとなりました。AIT ワークショップではタイをフィールドに、国際機関や NGO にインタビュー調査、AIT の授業受講と AIT の学生達と自分の研究テーマを発表し合いました。1 週間という短い期間でしたが、英語でのインタビュー調査やプレゼン、AIT の教授や学生との議論は、私にとって大変貴重な経験となりました。

特に、AIT の授業で同世代の学生達が活発に議論している姿や自分とは異なる問題意識を持っている点に、大きな差を感じ衝撃を受けました。それと同時に、将来開発とジェンダーの分野で働きたいと考えていた私にとって、日本の中から開発とジェンダーの問題を見ることに違和感を感じました。このことがきっかけで AIT への留学を考え始めました。AIT では、開講されている科目も幅広く、専門知識をさらに深め、自分の研究の可能性を広げていける環境が整っている点に大きな魅力を感じました。また、タイだけでなく、東南アジアや南アジア、東アジアなど様々な国籍、バックグラウンドを持つ学生達と議論し切磋琢磨することにより、多様な視点、国際的な視点や学術的な視点を身につけることができると考え、AIT への留学を決意しました。

10 ヶ月の留学では、授業を受講しつつ、研究調査プロジェクトへの参加や自分の研究の調査も実施しました。授業では、開発とジェンダーには欠かせない基礎的な論文を用いてじっくりと理論が学ぶことができただけでなく、実際にフィールドワークやグループワークで学んだ理論を実践に生かす機会がたくさんありました。この点が AIT で学ぶ特徴の 1 つだと思います。また、1 つのテーマに関して様々な国籍の学生と議論することで幅広い視点を持つことができたことや、すでに国連や NGO での勤務経験があるクラスメイトも多かったことから、彼らの豊富な経験や知識からの学びも大きかったです。授業以外では AIT の日下部先生とともに研究調査プロジェクトに携わり、タイの北部のチェンライにある山奥や東部のシーサケットにある農村部でのインタビュー調査と報告書作成を担当しました。この調査経験が実際に自分の研究でのインタビュー調査や論文執筆に役に立ったと感じています。研究面では、AIT の卒業生が務める NGO への訪問とワークショップに参加させていただいたご縁で、実際に調査地が決定したこと、研究テーマに関する知識だけでなくテーマに関するタイでの現状についても現場レベルで知ることができ、研究の視野が広がりました。AIT での学び、経験がなければ修士論文を完成させることはできなかったと思います。

卒業後は、ジェンダーと開発はもちろん教育やアジアと関わることができる仕事に就きたいと考え、現在の勤務先に運良く就職することができました。日々新しいことに刺激を受けると同時に自分の知識や能力不足を痛感しています。まだまだ AIT で学んだことを十分に活用できている状態ではありませんが、お茶大そして AIT を離れても自分の専門性を日々高めていく努力と専門性を活かせる機会で存分に発揮できるよう励んでいきたいです。

最後に、留学中にいつも温かく見守っていただき、親身になって相談にのってくださった AIT の日下部先生、留学中から卒業まで丁寧なご指導と明確なアドバイスでご指導していただいた申先生、いつも励まし合い支えてくれたお茶大そして AIT のクラスメイトに心より感謝申し上げます。

■ 2019 年度 AIT ワークショップ実施概要

「都市空間におけるジェンダーとエンパワーメント」をテーマに実施

【概要】

2019 年度の AIT ワークショップは、「都市空間におけるジェンダーとエンパワーメント」をテーマに、国内事前研修（4/10～7/24）、AIT からの参加院生 2 名の受入（6/27～7/4）、タイ AIT での研修（8/25～9/1）、研修報告会（11/27）、報告書作成というプログラムで行なわれた。

本学からの参加者は 7 名（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻）。国内事前研修として、大学院博士前期課程科目「フィールドワーク方法論」を履修したほか、AIT 院生来日研修時には、共同での国内フィールドワークや研究報告会に参加し、研究交流を行った。タイ研修では、同時期に AIT を訪問していた名古屋外語大学の学生と合流してのフィールドワークも日程に組み入れ、例年と同様に、参加院生の研究に関連する多くの機関を訪問することができた。コーディネーターとして本学ジェンダー学際研究専攻院生が関わり、フィールドワーク方法論担当講師と協力してプログラムの企画運営を担当したほか、履修生の報告会にはジェンダー研究所特任講師が参加した。

【プログラム統括】板井広明（ジェンダー研究所特任講師）

【国内事前研修担当講師】高松香奈（国際基督教大学准教授）

【コーディネーター】高橋加織（博士後期課程ジェンダー学際研究専攻）

【履修生】

田中涼子（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 生活政策学コース）

侯 婷玉（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 地理環境学コース）

宋 怡（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 地理環境学コース）

大竹あすか（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 地理環境学コース）

譚 穎（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発ジェンダー論コース）

畢 新雨（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発ジェンダー論コース）

長谷川渚紗（博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発ジェンダー論コース）

【AIT からの研修生】

Meheri Tamanna（博士課程）

Lan Thi Nguyen（博士課程）



Thai Transgender Alliance (TGA) にて
(2019 年 8 月 28 日)

■ 2019 年度 AIT ワークショップ研修報告

国内事前研修

2019 年度の AIT ワークショップは「都市空間におけるジェンダーとエンパワーメント (Gender and Empowerment in Urban Space)」をテーマに、博士前期課程ジェンダー社会科学専攻の 7 名が参加した。ワークショップのコーディネーターを担ったのは高橋加織 (博士後期課程ジェンダー学際専攻) である。大学院科目での国内事前研修は 4/10 (水) ~7/24 (水) に全 15 回行なわれた、高松香奈講師 (国際基督教大学准教授) による「フィールドワーク方法論」である。①講義 (理論的枠組み)、②ケーススタディの討論、③聞き取りの練習 (key informant interview)、④最終プレゼンテーションという形で、最終的にリサーチプロポーザルを完成させる構成であり、フィールド調査とは何かといった点に始まり、文献調査の方法や参考文献をケーススタディとしながら、調査倫理などについてもディスカッションなどを通して理解が深められた。

研究交流研修

6/27 (木) ~7/4 (木) には、Meheri Tamanna (博士課程) と Lan Thi Nguyen (博士課程) の 2 名が AIT から来日して研修を行なった。IGS を含めたお茶大内の施設訪問、斎藤教授との面談、NPO Rainbow Community "coLLabo" 訪問やインタビューなどを行なった。

8/25 (日) ~9/1 (日) は本学の院生 5 名がタイにある AIT での研修にのぞんだ。タイに滞在中は、Central Thailand Mission、Thai Transgender Alliance、Forward Foundation、WeTrain/APSW、Marketing Organization for Farmers、SWING Foundation を訪問・調査し、AIT の授業「Gender and Development: Principles and Concept」や、「お茶大—AIT ジョイント・セミナー」で研究報告などをこなした。

研修報告会

11/27 (水) 12 時 20 分~13 時 30 分には板井広明ジェンダー研究所特任講師の司会のもと、AIT での研修に関する参加者報告会を開いた。参加院生 7 名が前期に受講した「フィールドワーク方法論」で書いたプロポーザルに沿って、タイ現地でのフィールドワークについて、報告が行なわれた。今回は 7 人参加ということもあって、それぞれの研究関心に合う施設ばかりではなかったが、訪問した各施設などでのフィールドワークは研究の進展に大いに刺激になったようである。また AIT のクラスやジョイント・セミナーを通じて、同世代の AIT の学生とのディスカッションでは、さまざまな研究アプローチについての知識や知見を得られ、かつ活発な議論が行なわれたようである。

研修報告会での報告をもとにして、現地での調査や授業風景などの画像、現地情報などを取り入れた報告書を 2020 年 2 月に完成させた。

◇AIT 生来日研修 (6/27～7/4)

実施日	内容
6/27	成田到着 お茶の水女子大学訪問（ジェンダー研究所、グローバルリーダーシップ研究所、歴史資料館、グローバル協力センター） 歓迎会
6/28	ホームレス・貧困層の支援団体訪問と職員へのインタビュー（NPO もやい、ことぶき学童保育）
6/29	映画“Major（メジャーさん）！”（アメリカのトランスコミュニティの運動を描いたドキュメンタリー）鑑賞 会場：東京ウィメンズプラザ クィア・マガジン『OVER』創刊記念イベント参加： 明治大学リバティータワー
6/30	レズビアン及び性的少数者を支援しているNPO Rainbow Community "coLLabo" 訪問 『L・セクマイ女性Xカミングアウト～未来のじぶん』（カミングアウトをテーマとしたプログラム）に参加： ESCENA OTA（大田区立男女平等推進センター）
7/1	斎藤悦子教授との面談（お茶の水女子大学本館3階315室）
7/2	フィールドワーク（浅草）
7/3	「フィールドワーク方法論演習」での発表  『OVER』編集長 宇田川氏と意見交換：Seattle Espresso Café お別れ会
7/4	帰国

◇AIT ワークショップ履修生タイ研修日程 (8/25～9/1)

実施日	内容
8/25	AIT到着
8/26	AIT一日体験：「ジェンダーと開発」「公共政策」「開発と持続可能性」などのクラスに参加。 歓迎会 
8/27	お茶大- AIT Joint Seminar：研究報告 アユタヤ観光
8/28	Central Thailand Mission（貧困層などの生活支援団体）と、Thai Transgender Alliance（トランスジェンダー支援団体）への訪問（事業説明、現地見学、インタビュー） 
8/29	Forward Foundation（バンコクにあるスラム地区で住民支援を行う団体）訪問、 WeTrain/APSW訪問（事業説明、現地見学、インタビュー）
8/30	Marketing Organization for Farmers（MOF、公正な取引と生産者へのテナントを提供している団体）訪問（事業説明、現地見学、インタビュー） SWING Foundation（性産業従事者や性的少数者の健康・教育・人権保護支援団体）訪問（事業説明、現地見学、インタビュー）
8/31	バンコク市内フィールドワーク（Bangkok Farmer's Marketほか）
9/1	帰国

4) INTPART プロジェクト

国際的比較研究とその最新成果を研究教育に応用する国際共同事業

■概要

INTPART プロジェクトとは、正式には、ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金 International Partnerships for Excellent Education, Research and Innovation (INTPART) による、Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED) プロジェクト。ノルウェー科学技術大学(NTNU)のジェンダー研究センターと IGS とで、2019～2021 年度の3年間にわたって、教員・研究者・院生の相互派遣および、ノルウェーと日本のジェンダー平等、ダイバーシティについての比較研究、研究教育、セミナーやワークショップの開催などを進め、最終的には事業成果を書籍として刊行することを目標としている。

■パートナーシップ構築の経緯

NTNU ジェンダー研究センターと IGS とのパートナーシップの構築は、2016 年秋に、ノルウェー大使館の仲介による交流の開始を起点としている。2017 年 4 月の NTNU 代表団の来日の機会に、ジェンダー研究者であり代表団の長でもあった、カリ・メルビー (Kari Melby) 副学長 (国際交流担当) (肩書は当時) と、センター所属教員であるプリシラ・リングローズ (Priscilla Ringrose) 教授、グロ・クリステンセン (Guro Kristensen) 准教授 (肩書は当時) をゲストスピーカーに迎えての国際シンポジウム「最も幸せな国のジェンダー平等：ノルウェーのジェンダー研究とファミリー・ライフ・バランス」を本学にて開催した。これを契機に、両研究機関の共同プロジェクト実施についての具体的な検討を開始すると同時に、本学と NTNU の大学間協定締結に向けた協議も国際交流担当により進められた。



2017 年 4 月 25 日国際シンポジウム

同年 9 月には、本学から、佐々木泰子国際担当副学長、石井クンツ昌子 IGS 所長、佐野潤子・吉原公美 IGS 特任リサーチフェローが NTNU を訪問し、大学間協定の調印式および共同プロジェクト準備会議が行われた。準備会議においては、両研究所において実施されている研究についての情報交換および INTPART への共同申請にむけての具体的な話し合いがもたれた。INTPART 助成金の申請書類提出は 2018 年 4 月。その審査結果を待つ間も共同研究プロジェクトの具体的なテーマについての協議が進められ、同年 11 月には、NTNU のジェニファー・ブロンラ (Jennifer Branlat) 研究員とクリスティン・オイガルドシリア (Kristine Øygardslia) 研究員が本学を訪れ、INTPART プロジェクトに向けた 2 回目の準備会議を開催。12 月に助成金の採択が決定し、2019 年 4 月より本プロジェクトが開始された。



NTNU オンライン新聞記事 2017 年 9 月 26 日
「NTNU、日本の女子大学との提携を開始」

■プロジェクトメンバー

《NTNU》

グロ・クリステンセン（教授：プロジェクトマネージャー）

ジェニファー・ブロンラ（ポストドク研究員：プロジェクトコーディネーター）

プリシラ・リングローズ（教授）

シリ・エイスレボ・ソレンセン（Siri Øyslebø Sørensen）（ジェンダー研究センター長・准教授）

《IGS》

石井クンツ昌子（IGS 所長：本学側代表・コアメンバー）

小玉亮子（IGS 研究員／基幹研究院人間科学系教授：コアメンバー）

申琪榮（IGS 准教授：コアメンバー）

大橋史恵（IGS 准教授）

仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

佐野潤子（グローバルリーダーシップ研究所特任講師）

松田デレク（国際教育センター講師）

吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー：事務局）

■プロジェクト構成（相互に連携する 6 つのワークパッケージ（WP））

WP1 プロジェクト管理

NTNU のプロジェクトマネージャーとプロジェクトコーディネーター、本学側の代表と事務局担当者が中心となって、プロジェクト活動を調整・管理し、高水準の生産性と創造性を担保する。

WP2 在外研修

本プロジェクトの柱のひとつであり、両大学の博士前期・後期大学院生がパートナー大学に滞在しての在外研究・調査、教員・研究者の派遣による教育交流および在外研究・調査を行う。

WP3 院生共同指導

NTNU とお茶の水女子大学の教員が、大学院生の研究プロジェクトの共同指導を行う。共同指導対象となったプロジェクトには WP 2 の在外研究を行う機会が与えられ、その研究を発展させた新規研究プロジェクトを計画し研究助成金申請を進めることが期待されている。

WP4 合同カリキュラム開発と交換教育

特に NTNU 側における本プロジェクトの目標の 1 つは質の高い研究に基づく教育プログラムを開発することである。WP2 および WP3 での本学との研究教育交流は、国際的視点を重視するあらたなカリキュラム構築に寄与する。

WP5 共同出版と年次ワークショップの開催

本プロジェクトの学術的成果を書籍出版する。ノルウェーと日本の研究者（教員と博士課程院生）が執筆に参加し、刊行プロジェクトと関連したワークショップを年次開催する。

WP6 広報・成果普及とセミナー開催

広報・成果普及計画は幅広いアウトリーチ活動が含んでおり、既存の研究者ネットワークや、大学や研究所ウェブサイトなどの広報媒体を活用するほか、両機関の研究者が参加するセミナーを年次開催し、関連分野の研究者や市民に公開する。

■2019 年度事業内容

①年次セミナーとワークショップの開催

【開催期間】 2019 年 9 月 17 日（火）～20 日（金）

【開催地】 NTNU Dragvoll キャンパス

【本学参加者】 石井クンツ昌子、申琪榮、小玉亮子、吉原公美

【本学院生参加者】 松田こずえ（博士後期人間発達科学専攻・INTPART 院生在外研修）

下川自子（博士前期ジェンダー社会科学専攻・INTPART 院生在外研修）

【スケジュールと各セッションの内容】

9 月 17 日（火）	ジェンダー研究教育についてのセミナー
Session 1	：両大学のジェンダー研究教育に関するセミナー（報告：クリステンセン、申）
Session 2	：研究報告 ブロンラ「A Pedagogy of Unlearning: Threshold Learning in Gender Studies」
Session 3	：教育ツール Perusall の紹介 (https://perusall.com/)
Session 4	：学生および研究者の在外研修（Mobility）についての報告と協議
9 月 18 日（水）	共同研究とアンソロジー出版についてのワークショップ
Session 1	：アンソロジーエディターミーティング（リングローズ、クリステンセン、石井）
Session 2	：ゲストレクチャー 仙波「Abolition of Gamete Donor Anonymity」（石井代読）
Session 3	：共同研究についての会議
Session 4	：アンソロジープロジェクト会議
9 月 19 日（木）	INTPART プロジェクト会議（お茶大メンバー）
Session 1	：お茶大院生の NTNU 在外研修についての視察と聞き取り
Session 2	：INTPART プロジェクト会議
9 月 20 日（金）	今後の事業展開に向けたミーティング
Session 1	：アンソロジーエディターミーティング
Session 2	：NTNU 学内誌の取材
Session 3	：NTNU 院生とのミーティング

②本学研究者の在外研究・調査

- ・ **申琪榮**：9/12～15 ベルゲン、9/21～23 トロンハイムにて、ノルウェーにおける政治とジェンダー、若者の政治参画について調査（ベルゲン大学、NTNU、トロンハイム地方議会）。
- ・ **小玉亮子**：9/20 トロンハイム、9/21～23 オスロにて、ノルウェーにおける幼児教育とジェンダーについて調査（トロンハイム市内幼稚園、クイーン・モード大学、オスロ子ども図書館、オスロ大学）。

③本学院生の在外研修

- ・ **松田こずえ**：9/16～20 トロンハイム、9/21～23 オスロにて、ノルウェーにおける幼児教育とジェンダーについて調査（トロンハイム市内幼稚園、NTNU、クイーン・モード大学、オスロ子ども図書館、オスロ大学）。
- ・ **下川自子**：8/24～9/19 トロンハイムにて、ノルウェーにおける DV 被害者保護・支援について調査。「ジェンダーとノルウェーの文化」の講義に出席し、ノルウェーのジェンダー状況について学習（NTNU、トロンハイムクライシスセンター、オラビス病院、ヨーロッパ DV 学会）。

④NTNU 研究者の在外研究・IGS セミナーの開催

フランス・ローズ・ハートライン (france rose hartline) (ドクター院生)：10/7～11/7。本学大塚ハウスに滞在し、IGS 提供の研究室を拠点に、日本のトランスジェンダーをめぐる状況に関する研究・調査を行った。アドバイザーを務めた石丸径一郎准教授 (人間発達科学専攻発達臨床心理学領域) との共同研究計画の立案がされたほか、10/24 には本学院生・研究者を対象とした IGS 英語セミナー「Legal Gender Recognition & Messy Trans Experiences in Norway」の講師を務めた (本報告書 64 頁参照)。

⑤NTNU 修士院生の在外研修

マルテ・ベルグ (Marte Berg)、シリエ・スヴェニユンセン (Silje Svennungsen)、スーザン・アンデシェン (Susann Andersen)：7/18～8/15。本学国際学生宿舎に滞在し、サマープログラムへ参加し、日本のジェンダー、ダイバーシティ状況について学んだほか、フィールドワーク方法論授業内で、それぞれの修士論文研究についてのプレゼンテーションを行うなど、本学院生との研究交流の機会を持った。

⑥プロジェクト会議の実施

- ・本学の INTPART メンバーが出席するプロジェクト会議を月例で開催。
- ・NTNU のメンバーとのテレビ会議を四半期ごとに開催。

■2019 年度事業成果

準備期間も含め、両大学のメンバーは頻りにメールのやり取りをし、4 半期ごとにテレビ会議を実施するなどして事務業務関連の連絡を密にしていたが、9 月の NTNU 訪問の機会にメンバーが一堂に会して話し合うことにより、プロジェクトの基礎を固めるという大きな成果が得られた。合わせて、NTNU のメンバーのジェンダー研究・教育に向けた熱意に直接触れることができた感慨は大きく、本共同プロジェクトが、お茶大の教員・研究者・院生に刺激となり、より優れた研究教育の成果につながるであろうことを実感した。



9月20日 NTNU 院生とのミーティング

本プロジェクトはノルウェーと日本の比較を主眼にしているが、それは決して国際指標などを基準にして優劣を判断するものではなく、文化・社会的な相違や相似などを考慮した総合的な視点によるものにするという理解が、セミナーやワークショップにおいて確認された。これは、本プロジェクトの知見面での方向性を定める重要なステップである。合わせて、今後の事業展開のための充実した協議が持たれ、ノルウェーと日本それぞれのジェンダー平等に関するテキストを含めた共有リーディングリストの作成や、アンソロジー刊行のスケジュール、比較研究プロジェクト編成など、着実なプロジェクト推進のための具体的な方策が示された。

NTNU 院生の在外研修受け入れに際しては、サマープログラムを担当する国際教育センターのスタッフと石丸准教授に、本学院生の派遣に際しては、事前指導を引き受けてくださったジャン・バーズレイ特別招聘教授に、ノルウェー調査にあたっては様々な知見の提供をしてくださった現地の専門家の方々など、多くの方のご協力を得て充実した内容の研修を実現することができた。

2020 年度も、2019 年度成果を発展させる形で、本プロジェクトの充実を図る所存である。

5) 国内外招聘研究者一覧

■ 2019 年度 海外からの招聘研究者

【アジア・オセアニア】

游鑑明 (ユウ・カンメイ) (中央研究院近代史研究所・台湾)

国際シンポジウム「踊る中国」(53 頁参照)

ハン・インテク (済州平和研究院・韓)

IGS 研究会「Shared Visions for Korea-Japan Relations」(80 頁参照)

ソン・ジョンウク (済州平和研究院・韓)

IGS 研究会「Shared Visions for Korea-Japan Relations」(80 頁参照)

ハン・ドンギョン (済州平和研究院・韓)

IGS 研究会「Shared Visions for Korea-Japan Relations」(80 頁参照)

チェ・ヒュンジョン (済州平和研究院・韓)

IGS 研究会「Shared Visions for Korea-Japan Relations」(80 頁参照)

ド・ジョンユン (済州平和研究院・韓)

IGS 研究会「Shared Visions for Korea-Japan Relations」(80 頁参照)

アニ・ウィダヤニ・スチプト (インドネシア大学・インドネシア)

IGS セミナー「Gender and Politics in Indonesia after 2019 Election」(73 頁参照)

【ヨーロッパ】

ダイアン・エルソン (エセックス大学・英)

IGS セミナー「Gender and Development Revisited」(62 頁参照)

フランス・ローズ・ハートライン (ノルウェー科学技術大学・ノルウェー)

INTPART プロジェクト (114~117 頁参照)

IGS セミナー「Legal Gender Recognition & Messy Trans Experiences in Norway」(64 頁参照)

ガブリエル・ラディカ (リール大学・仏)

IGS セミナー「A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives」(70 頁参照)

アン・ブルノン＝エルンスト (パンテオン・アサス大学・仏)

IGS セミナー「A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives」(70 頁参照)

オフエリ・スイミオン (ソルボンヌ・ヌーヴェル大学・仏)

IGS セミナー「A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives」(70 頁参照)

レスリー・ホガート (オープン大学・英)

IGS 研究会「Exploring How Women's Contraceptive Choices Can Be Influenced by Their Views on Abortion」(84 頁参照)

【北米】

ジャン・バーズレイ (ノースカロライナ大学チャペルヒル校・米)

特別招聘教授 (87~92 頁参照)

国際シンポジウム「哲学者と皇太子妃」(47頁参照)

国際シンポジウム「踊る中国」(53頁参照)

IGS セミナー「冷戦初期の日本におけるファッションショー外交」(56頁参照)

ジュリア・ブロック (エモリー大学・米)

国際シンポジウム「哲学者と皇太子妃」(47頁参照)

スーザン・ストライカー (イエール大学・米)

国際シンポジウム「トランスジェンダーが問うてきたこと」(50頁参照)

IGS 研究会「トランスジェンダーが問うてきたこと」(83頁参照)

ナエル・バンジー (トレント大学・カナダ)

国際シンポジウム「トランスジェンダーが問うてきたこと」(50頁参照)

IGS 研究会「トランスジェンダーが問うてきたこと」(83頁参照)

■ 2019年度 国内招聘研究者

北村文 (津田塾大学) 国際シンポジウム「哲学者と皇太子妃」(47頁参照)

ゲイ・ローリー (早稲田大学) 国際シンポジウム「哲学者と皇太子妃」(47頁参照)

清水晶子 (東京大学) 国際シンポジウム「トランスジェンダーが問うてきたこと」(50頁参照)、IGS 研究会「トランスジェンダーが問うてきたこと」(83頁参照)

井谷聡子 (関西大学) 国際シンポジウム「トランスジェンダーが問うてきたこと」(50頁参照)、IGS 研究会「トランスジェンダーが問うてきたこと」(83頁参照)

星野幸代 (名古屋大学) 国際シンポジウム「踊る中国」(53頁参照)

大濱慶子 (神戸学院大学) 国際シンポジウム「踊る中国」(53頁参照)

江上幸子 (中国女性史研究会/フェリス学院大学) 国際シンポジウム「踊る中国」(53頁参照)

前山加奈子 (中国女性史研究会/駿河台大学) 国際シンポジウム「踊る中国」(53頁参照)

菅野摂子 (立教大学社会福祉研究所) IGS セミナー「生殖医療技術と男性性」(58頁参照)

斎藤圭介 (岡山大学) IGS セミナー「生殖医療技術と男性性」(58頁参照)

山尾忠弘 (慶應義塾大学・院) IGS セミナー「J.S.ミルにおけるデモクラシーと女性参政権」(60頁参照)

村田陽 (同志社大学) IGS セミナー「J.S.ミルにおけるデモクラシーと女性参政権」(60頁参照)

平石耕 (成蹊大学) IGS セミナー「J.S.ミルにおけるデモクラシーと女性参政権」(60頁参照)

中村雪子 (和光大学ほか) IGS セミナー「Gender and Development Revisited」(62頁参照)

渡辺浩 (東京大学) IGS セミナー「日本における女らしさの表象」(66頁参照)

菅野 琴 (関西学院大学/国立女性教育会館) IGS セミナー「持続可能な社会をめざすエンパワメントの教育」(68頁参照)

深貝保則 (横浜国立大学) IGS セミナー「A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives」(70頁参照)

関口佐紀 (早稲田大学) IGS セミナー「A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives」(70頁参照)

重田園江 (明治大学) IGS セミナー「A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives」(70頁参照)

永見瑞木 (大阪府立大学) IGS セミナー「コンドルセの政治社会像と女性への視点」(78頁参照)

三牧聖子 (高崎経済大学) IGS 研究会「Shared Visions for Korea-Japan Relations」(80頁参照)

6.

教育プロジェクト

1) 専任・特任教員担当講義

2) 2019年度修士論文博士論文要旨

▶ 2019 年度 IGS 専任・特任教員担当講義

《人間文化創成科学研究科博士後期課程ジェンダー学際研究専攻》

申琪榮（准教授）

[科目名] ジェンダー学際研究報告（基礎）（通年）

[主題と目標] 博士後期院生を対象に研究発表と論文執筆を目的とするゼミ。期末には研究論文を1本完成させることを目的とする。

[科目名] ジェンダー学際研究論文指導（通年）

[主題と目標] ジェンダー学際研究専攻のドクター院生を対象に論文指導を行う。

[科目名] 特別講義（博士後期課程）（後期集中）

[主題と目標] 生活を持続的に成り立たせる生活保障システムは、政府と民間の制度・慣行の編成、そしてジェンダーのあり方によっていくつかのタイプに分かれる。日本のシステムはどんな特徴をもつのか、時系列と国際比較により明らかにし、近年の変容を考える。講義は演習の形で行い、重要文献の考証、参加者の研究発表を含めて進める。

大橋史恵（准教授）

[科目名] ジェンダー政治経済学（前期）

[主題と目標] 国際社会学やフェミニスト経済学のなかの移動とジェンダーに関わる課題を扱ったテキストの講読を通じて、フェミニスト・アプローチに基づく実証的社会科学研究の手法について学ぶ。

[科目名] ジェンダー政治経済学演習（後期）

[主題と目標] 国際社会学やフェミニスト経済学のなかの再生産領域とジェンダーに関わる課題を扱ったテキストの講読を通じて、フェミニスト・アプローチに基づく実証的社会科学研究の手法について学ぶ。

《人間文化創成科学研究科博士前期課程ジェンダー社会科学専攻》

申琪榮（准教授）

[科目名] ジェンダー社会科学論（通年不定期）

[主題と目標] 開発・ジェンダー論コースの必修科目。指導教員から修士論文執筆の指導をうけ、コースの修論報告会で発表を行う。また、3コース合同修論報告会への出席を課す。

[科目名] ジェンダー立法過程論（後期）

[主題と目標] ジェンダー平等な制度作りにおいて、有力な手段となりうる法政策に注目する。ジェンダー平等実現のための法政策の概念、理論、政策決定のアクター、政策のインパクトについて学び、日本のジェンダー政策の事例を見ていく。90年代後半以降のジェンダー関連立法（DV法策定や改正、民法、刑法改正）を中心に検討することで、これからのジェンダー法政策過程のあり方を展望する。

[科目名] フェミニズム理論の争点（前期）

[主題と目標] 初学者を対象に、ジェンダー概念の基礎的知識を含め、1990年代以降のフェミニズム理論の新たな発展期における重要な理論的争点の理解を目的とする。「Gender, Sexuality, and Violence against Women and Minorities」をテーマに文献購読、ゲスト講義、グループワークを行う。特に Sexuality に関する議論がジェンダー概念とどう交差するのか歴史的、理論的に考察し、今日世界的に広がっているジェンダー・セクシュアリティ・ポリティクスのあり様について検討する。

[科目名] フェミニズム理論の争点・演習（後期）

[主題と目標] 前期に続き、フェミニズムやジェンダー研究の基礎的概念や知識を理解した上で、1990年代以降フェミニズム理論の新たな発展期以降取り上げられてきた重要な理論的争点に取り組む。

[科目名] 開発・ジェンダー論特論（後期）

[主題と目標] 2019年度のテーマは「ジェンダー視点で問い直す政治学研究1・2」。研究方法やアプローチの問題を講義し、全体としてジェンダーの視点に立った研究の広がり可能性、ならびに開発研究とジェンダー研究の接点を提示する。

[科目名] 国際社会ジェンダー論演習（前期不定期）

[主題と目標] 開発とジェンダーにかかわる課題群の分析の方法や視座に基づき、海外及び国内のフィールド調査から得たデータの分析する能力を培う。文献を批判的に読み解くとともに、各自の研究論文を効果的にプレゼンテーションする練習など、研究者として必要な基本的な能力を身につける。

[科目名] 特別講義（博士前期課程）（後期集中）

[主題と目標] 生活を持続的に成り立たせている生活保障システムは、政府と民間の制度・慣行の編成、そしてジェンダーのあり方によって、いくつかのタイプに分かれる。日本のシステムはどのような特徴をもつのか、時系列と国際比較により明らかにし、近年の変容を考える。講義は演習の形でを行い、重要な文献の考証、参加者の研究発表を含めて進める。

大橋史恵（准教授）

[科目名] ジェンダー基礎論（前期）

[主題と目標] ジェンダー社会科学専攻の基本講義として、3コースの専任教員がジェンダーの視点・方法の多様性とその有効性を提起する（専攻必修科目）。

[科目名] ジェンダー社会科学論（通年不定期）

[主題と目標] 開発・ジェンダー論コースの必修科目。指導教員から修士論文執筆の指導をうけ、コースの修論報告会で発表を行う。また、3コース合同修論報告会への出席を課す。

[科目名] ジェンダー社会経済学（前期）

[主題と目標] フェミニズムに基づく社会科学研究（とりわけポストコロニアリズムとジェンダーに関するもの）の基礎的な文献講読を通じて、ジェンダー秩序を生きる主体の具体的状況について批判的に分析することを目指す。

[科目名] ジェンダー社会経済学演習（後期）

[主題と目標] 批判的な文献の読みを通じて、社会経済構造の変動とジェンダーに関わる理論的・実証的研究や、フェミニスト・アプローチによる現状分析の手法を学ぶ。

板井広明（特任講師）

[科目名] 国際社会ジェンダー論（後期）

[主題と目標] AIT ワークショップ（本報告書 107～113 頁参照）参加者に向けて、将来、NGO や国際機関で国際協力の仕事につくことや、国内外を問わず男女共同参画推進諸機関で働くこと、あるいは研究者としての力を培うことを希望する人材の育成を意図して、国際社会におけるジェンダーの問題を、途上国支援や持続可能な教育などを実践している現場の声を聴きつつ、理論的に検討するのが主題である。異文化におけるジェンダー概念や平等概念、フェミニズム的視点の有効性を再検討し、各自のジェンダー理解をブラッシュアップすることが目標である。

《人間文化創成科学研究科博士課程共通》

ジャン・バズレイ（特別招聘教授）

[科目名] 男女共同参画国際演習 I（前期）

[主題と目標] THE MODERN GIRL IN JAPAN: FILM, FASHION, LABOR & SPORTS

Japan's Modern Girl inspired envy and fear in the 1920s and 1930s. Advertisements showed her enjoying city life! She modeled new fashions. She danced, played tennis, and went to the movies. She took up new kinds of work and romance. But the reality of young women's lives in the city was not always so rosy. Novels and films created stories—funny and tragic—about the Modern Girl. This cultural studies seminar explores the fantasy and reality of Japan's Modern Girl in various media: We look at lots of images—photographs, advertisements, paintings. We talk about 1930s movies and stories. We read research on the lives of working women. Using all this evidence, we ask the following questions about the Modern Girl.

《学部》

申琪榮（准教授）

[科目名] ジェンダー 8 政治・政策とジェンダー（前期）

[主題と目標] 現代日本及び諸外国の政治制度、選挙、女性の政治的代表性を高めるための取り組みなどについてジェンダー視点から学習し、日本の政治過程や制度に関する基礎的知識を獲得するとともに、我々の日常生活に及ぼす政治の影響、政治に女性が参加する意義について理解することを目指す。

大橋史恵（准教授）

[科目名] グローバル化と社会（後期）

[主題と目標] ①グローバル化という現象について知見を深める。とりわけジェンダーの視点からこの現象を批判的に考察する。

②日本および世界の諸地域における具体的な社会秩序、および個をとりまく社会関係の変化を、グローバル化という文脈においてよりよく理解する。

[科目名] グローバル化と労働Ⅱ（前期）

[主題と目標] グローバル化と労働に関わる理論的文献を全員で講読し、討論する。とりわけフェミニスト・アプローチに基づく研究の蓄積に積極的にふれ、グローバル化という現象がジェンダー、エスニシティ、ネーション、階級、セクシュアリティ等の差別の交差性（インターセクショナルリティ）と不可分に結びついていることを理解する。

[科目名] グローバル文化学総論（前期）

[主題と目標] 「テロ」事件の頻発、イギリスのEU離脱、トランプ大統領の誕生など、グローバル化がもたらす負の側面がクローズアップされる中で、移民や難民を排除したり、ナショナルな枠組みに閉じようとする傾向が強まっている。異質な他者を排除するのではなく、異なる文化を持つ他者と協働しながら、真の多文化共生社会を創っていくことは可能か。そのためには何が必要なのか？現代世界を生きる上で不可避の問いに、グローバル文化学環の教員が、それぞれの立ち位置から応答し、提言する。

《英語によるサマープログラム 2019》

《人間文化創成科学研究科博士課程共通》

申琪榮（准教授）

[科目名] Special Lectures in Humanities and Sciences III

[主題と目標] サマープログラム（文化社会コース）のサブコース 1 Gender Equality and Leadership として開講。英語で講義と運営を行う。社会の基本構成を成す原理であるジェンダーとリーダーシップについて、考古学、教育学、政治学、地理学、歴史学などさまざまなアプローチから、日本やアジア諸国の事例を中心に多面的に学習する。

《学部》

申琪榮（准教授）

[科目名] Summer Program in English III

[主題と目標] サマープログラム（文化社会コース）のサブコース 1 Gender Equality and Leadership として開講。英語で講義と運営を行う。社会の基本構成を成す原理であるジェンダーとリーダーシップについて、考古学、教育学、政治学、地理学、歴史学などさまざまなアプローチから、日本やアジア諸国の事例を中心に多面的に学習する。

▶ 2019 年度大学院（人間文化創成科学研究科）

博士前期課程（ジェンダー社会科学専攻）修了者

博士後期課程（ジェンダー学際研究専攻）学位取得者

ジェンダー研究所はジェンダーの視点から学際的・国際的な研究を推進する次世代の研究者育成も行っている。IGS 所属教員の指導のもと、2019 年度は以下の院生が博士前期課程ならびに博士後期課程を修了した。

博士前期課程（ジェンダー社会科学専攻）修了者

【氏名】松田 綾希子

【指導教員】申 琪榮（IGS 准教授）

【修論タイトル】災害報道におけるジェンダー問題の考察——東日本大震災の新聞記事の分析から——

【要旨】

日本を含む世界各国の災害で、貧困、高齢化、地域格差など社会構造の脆弱性が顕在化し課題となっているが、ジェンダー格差もそのひとつである。災害をきっかけに、性別役割が強調される、ジェンダーに基づいた暴力が顕在化する、といったことがこれまでの研究でも報告されてきた。本研究は、これら「災害とジェンダー」の先行研究に依拠し、日本の災害報道がどれだけジェンダー・多様性に配慮して行われたのかを明らかにする。

代表的な全国新聞社の 2 紙を対象に、東日本大震災の発生翌日から 2 週間の「社会面」と「生活面（家庭面）」の記事を内容分析した結果、2 社ともジェンダーステレオタイプを強調するような内容が多いこと（例えば、女性が登場する時は母親が多く、男性は専門職やリーダーポジションについている場合が多い）、署名記事で分かる記者の男女比率においても女性が少ないこと、社会的なマイノリティの記事が極めて少ないことが明らかになった。

博士後期課程（ジェンダー学際研究専攻）学位取得者

【氏名】本山 央子

【指導教員】申 琪榮（IGS 准教授）

【博論タイトル】冷戦後安全保障の再構築と国際ジェンダー平等規範

——女性・平和・安全保障アジェンダの形成と日本による受容——

【要旨】

国連安全保障理事会における女性・平和・安全保障（WPS）に関する初めての決議である「安保理決議 1325 号」（2000 年）と、その後採択された同分野の安保理決議 10 件（2019 年 10 月現在まで）の内容が、日本の国内アクションプランに受容される過程を分析した。

国際政治学の先端理論である Weber らのポスト構造主義を分析ツールとして、なぜ WPS 関連の一連の安保理決議が、国際フェミニスト運動が目指した脱軍事化の変革を起こすことができなかつたのか、また、なぜ日本の国内アクションプランもフェミニスト平和運動の期待からは程遠いものとなったのかを、90 年代以降の日本の外交青書などを用いて分析した。

国際ジェンダー規範の発展過程において、紛争地の女性は外からの救援者によって救われるべき存在と構築され、第一世界（グローバルノース）の国々は「女性の人権を守る」資格のある優越な立場を再確立する結果となった点、日本の国内アクションプランはそれら先進国の一員になるべく男性的な主権を確立させようとした動機が働いた点を明らかにし、その結果、国内アクションプランには、慰安婦問題や脱軍事主義、国内のジェンダー不平等問題などが欠落し、海外での役割のみを強調するものになったと結論付けた。

● 申琪榮 IGS 准教授が副査を務めた 2019 年度学位取得者と博論タイトル

ジェンダー学際研究専攻 相川頌子「男性性と有配偶者の家事・育児遂行——ケアする男性性に着目して——」
ジェンダー学際研究専攻 雑賀葉子「紛争後復興期のジェンダー・クォータ——東ティモール女性のネットワーク化——」
上智大学グローバル・スタディーズ研究科グローバル社会専攻 堤優子/安藤優子「国会における女性過少代表の分析: 自民党の政治指向と女性認識の形成」

7.

学術成果の発信

- 1) 学術雑誌『ジェンダー研究』
- 2) プロジェクト報告書
IGS Project Series

1) 学術雑誌『ジェンダー研究』

国内外の執筆者による最新の優れたジェンダー研究の成果を世界に発信

国際的な学術誌として刷新



本研究所が編集・発行している査読付きの国際学術雑誌。前身は『女性文化資料館報』（1979～1987年）、『女性文化研究センター年報』（1988～1996年）で、ジェンダー研究センターの創設に伴い、1998年3月に第1号として創刊された『年報ジェンダー研究』を引き継ぐ年刊誌である。21号（2018年刊行）よりリニューアルした。

本誌は特集論文、特別寄稿論文、投稿論文、書評から構成される。巻頭に掲載される特集論文はその年に特に注目されたジェンダー関連のテーマについて世界第1級のジェンダー学研究者が執筆し、外部評価を得た論文で組まれており、学術研究としての寄与も大きい。特別寄稿論文は、編集部によるオリジナル企画として、学際的・国際的なジェンダー研究の成果を世に問う論文を掲載している。投稿論文は、国内外から投稿された日本語もしくは英語の論文で、国際的に活躍する研究者による外部審査を経て採用された質の高い論文である。書評も近年ジェンダー関連分野で注目された著書をジェンダー関連の諸分野の研究者が評しており、ジェンダー研究の動向を示すものである。

■『ジェンダー研究』22号（2019年7月刊行）概要

特集「安全保障とジェンダー」

『ジェンダー研究』22号は2018年10月13日（土）に開催された日本政治学会『安全保障とジェンダー：フェミニズム・批判理論・ジェンダー主流化（ジェンダーと政治研究会企画）』での議論を基に特集を組んだ。

“Gendered Security: Learning from Being and Feeling Safe on the Island of Guåhan/Guam”（Ronni Alexander）、「武力紛争下の〈女性〉とは誰か——女性・平和・安全保障アジェンダにおける主体の生産と主権権力」（本山央子）、「保守のアジェンダへの女性・平和・安全保障の再構成——カナダのハーパー政権を事例に」（和田賢治）、「批判的安全保障とケア——フェミニズム理論は『安全保障』を語れるのか？」（岡野八代）の4本を掲載し、また「大娘たちとくともに歩む」という〈闘い〉——中国山西省における日本軍戦時性暴力問題をめぐる運動」（大橋史恵）、「沖縄で在日米軍と共に生きる——基地従業員女性の経験の両義性に注目して」（ノーラ・ワイネク・佐藤文香）を特別寄稿として掲載した。

22号巻頭言で申編集委員長が言及したように、本特集は、共通の論題と研究方法を用いる論文をペアとして読むとさらに理解が深まるような構成となっている。Alexander論文とワイネク・佐藤論文は、地政学的戦略的基地として設置されたグアムと沖縄が舞台となり、軍事主義が生活の基盤のみならず自己のアイデンティティまで形成する状況を現地調査から明らかにし、安全保障と脱軍事化という重い課題を読者に突き付ける。和田論文と本山論文は安全保障のジェンダー主流化の成果として打ち出された「女性・平和・安全保障（WPS）」政策の言説分析を行い、UNやカナダにおけるピンク・ウォッシング、ジェンダー・ウォッシングの状況を指摘する。また岡野論文は、主流派の国際政治学への抵抗を試みる対案としてケアの倫理のポテンシャルについて考察し、国際政治の空間を「傷つきやすいもの」同士の倫理的関係として再構築しようとする。

投稿論文は、厳正な審査を経た以下の論文を掲載した。「男性支配的社会における女性間の友情物語——角田光代『対岸の彼女』に見る女同士の絆」（レティツィア・グアリーニ）、「1990年代の「ゲイリブ」におけるゲイとレズビアンとの差異——北海道札幌市における活動を事例に」（斉藤巧弥）、「アーシュラ・K・ル＝グウィン〈アースシー〉“第二の三部作”におけるジェンダー・ポリティクス——ポストフェミニズム、クィア理論、反グローバル資本主義」（青木耕平）、「ジェンダー意識は結婚への移行に影響を与えるのか——パネルデータを用いた男女比較分析」（コルムシ・オリガ）、「強制的な喪の達成——映画『愛しい人が眠るまで』、『オールウェイズ』における遺された女性の欲望形成」（五十嵐舞）の5本である。

書評は、土野瑞穂、Mire Koikari、山本沙希、中村雅子、Annette Schad-Seifert、金美珍、落合絵美、濱田江里子、味岡京子、吉良智子、Maki Isaka、嶽本新奈、佐藤齊華、三部倫子、Nadje Al-Aliの諸氏によって評された15本の書評を収録した。人文科学・社会科学・自然科学領域に至るまでの幅広いフェミニズム、ジェンダー学の先端動向を紹介することができた。

今号も多彩な執筆陣によって、最先端のジェンダー研究の知見が提供されている。

『ジェンダー研究』22号（2019年7月刊行）目次

巻頭言 申琪榮

特集：安全保障とジェンダー

Gendered Security: Learning from Being and Feeling Safe on the Island of Guåhan/ Guam..... Ronni Alexander
 武力紛争下の〈女性〉とは誰か——女性・平和・安全保障アジェンダにおける主体の生産と主権権力..... 本山央子
 保守のアジェンダへの女性・平和・安全保障の再構成——カナダのハーパー政権を事例に 和田賢治
 批判的安全保障とケア——フェミニズム理論は「安全保障」を語るのか？ 岡野八代

特別寄稿

大娘たちとくともに歩む>という〈闘い〉——中国山西省における日本軍戦時性暴力問題をめぐる運動..... 大橋史恵
 沖縄で在日米軍と共に生きる——基地従業員女性の経験の両義性に注目して ノーラ・ワイネク／佐藤文香

投稿論文

男性支配的社会における女性間の友情物語——角田光代『対岸の彼女』に見る女同士の絆 レティツィア・グアリーニ
 1990年代の「ゲイラブ」におけるゲイとレズビアンとの差異——北海道札幌市における活動を事例に 斉藤巧弥
 アーシュラ・K・ル＝グウィン〈アースシー〉“第二の三部作”におけるジェンダー・ポリティクス
 ——ポストフェミニズム、クィア理論、反グローバル資本主義 青木耕平
 ジェンダー意識は結婚への移行に影響を与えるのか——パネルデータを用いた男女比較分析 コルムシ・オリガ
 強制的な喪の達成——映画『愛しい人が眠るまで』、『オールウェイズ』における遺された女性の欲望形成 五十嵐舞

書評

上野千鶴子・蘭信三・平井和子編, 岩波書店
 『戦争と性暴力の比較史に向けて』 土野瑞穂
 Julia C. Bullock, Ayako Kano, and James Walker eds., University Hawai'i Press.
Rethinking Japanese Feminisms Mire Koikari
 ライラ・アブー＝ルゴド著, 鳥山純子・嶺崎寛子訳, 書肆心水
 『ムスリム女性に救援は必要か』 山本沙希
 ホーン川嶋瑤子著, 筑摩書房
 『アメリカ社会変革——人種・移民・ジェンダー・LGBT』 中村雅子
 Swee-Lin Ho, Routledge.
Friendship and Work Culture of Women Managers in Japan: Tokyo after Ten Annette Schad-Seifert
 金英著, ミネルヴァ書房
 『主婦パートタイマーの処遇格差はなぜ再生産されるのか——スーパーマーケット産業のジェンダー分析』 金美珍
 浅倉むつ子他編著, 旬報社
 『労働運動を切り拓く——女性たちによる闘いの軌跡』 落合絵美
 金美珍著, 晃洋書房
 『韓国「周辺部」労働者の利害代表——女性の「独自組織」と社会連携を中心に』 濱田江里子
 鈴木杜幾子編著, ブリュッケ
 『西洋美術: 作家・表象・研究——ジェンダー論の視座から』 味岡京子
 味岡京子著, ブリュッケ
 『聖なる芸術——二十世紀前半フランスにおける宗教芸術運動と女性芸術』 吉良智子
 Laura Miller and Rebecca Copeland eds., University of California Press.
Diva Nation: Female Icons from Japanese Cultural History Maki Isaka
 柳原恵著, ドメス出版
 『〈化外〉のフェミニズム——岩手・麗ら舎読書会の〈おなご〉たち』 嶽本新奈
 堀江未央著, 京都大学学術出版会
 『娘たちのいない村——ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』 佐藤齊華
 神谷悠介著, 新曜社
 『ゲイカップルのワークライフバランス——男性同性愛者のパートナー関係・親密性・生活』 三部倫子
 Nadia Yaqub and Rula Quawas eds., University of Texas Press.
Bad Girls of the Arab World Nadje Al-Ali

編集後記

編集方針・投稿規定

■『ジェンダー研究』22号(2019年7月刊行)編集委員会

編集委員長

申 琪榮 お茶の水女子大学ジェンダー研究所

編集委員

石井クンツ 昌子 お茶の水女子大学ジェンダー研究所、基幹研究院人間科学系

天野 知香 お茶の水女子大学基幹研究院文化科学系

水野 勲 お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系

森 義仁 お茶の水女子大学基幹研究院自然・応用科学系

石丸 径一郎 お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系

大橋 史恵 お茶の水女子大学ジェンダー研究所

倉光 ミナ子 お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系

Jan Bardsley お茶の水女子大学ジェンダー研究所

学外編集委員

三浦 まり 上智大学法学部

金井 郁 埼玉大学経済学部

小浜 正子 日本大学文理学部

Karen Ann Shire ドイツ デュースブルグ・エッセン大学 教授

編集事務局

大野 聖良 お茶の水女子大学ジェンダー研究所

平野 恵子 お茶の水女子大学ジェンダー研究所

仙波 由加里 お茶の水女子大学ジェンダー研究所

和田 容子 お茶の水女子大学ジェンダー研究所

2) プロジェクト報告書 IGS Project Series による成果刊行

2019年度は、成果発信シリーズ IGS Project Series の報告書刊行はなかったが、年度内に実施された国際シンポジウムと特別招聘教授プロジェクトの成果の取りまとめが進められている。国際的プロジェクトについては日英バイリンガルでの作成を目指していることから編集作業に時間がかかり、刊行がおくれがちになっているが、引き続き、事業成果の国際的発信に努めたい。



IGS Project Series 24

国際シンポジウム

哲学者と皇太子妃

冷戦期日本における自由と愛と民主主義

(2020年夏刊行予定)



IGS Project Series 25

特別招聘教授プロジェクト特集

ジャン・バーズレイ

(2020年夏刊行予定)

8.

文献収集と公開・史料 電子化・ウェブ発信

- 1) 文献・資料の収集と公開
- 2) IGS 史料電子化プロジェクト
- 3) ウェブサイトでの情報発信

1) 文献・資料の収集と公開

ジェンダー研究の知の基盤の一層の充実を図る

ジェンダー研究所は、1975年創立の「女性文化資料館」時代から今日に至るまで40年以上にわたり、女性学・ジェンダー研究の文献・資料の収集を絶え間なく続けてきた。女性に関する膨大な知の集積ともいえる蔵書は、お茶の水女子大学附属図書館の専門コーナーに配架され、学内外からOPAC（Online Public Access Catalog）で検索でき、手続きを経れば学外の者も利用可能である。

2019年度も、寄贈・購入により、多数の文献・資料を収集することができた（新規収蔵図書・資料の詳細は本報告書巻末資料172～174頁参照）。今年度はとくに書架の整備に注力し、日本十進分類法による見出し板の設置を行なった。とくに蔵書数の多い社会（360番台）、教育（370番台）などは下位分類まで表示し、主題による探索の助けになるよう配慮した。また、雑誌書架ではOPAC未登録で配架されている資料が複数見つかった。入手の経緯や他館での所蔵状況などを調査し、貴重な資料については整備をしたうえで、OPACへの登録を進めている。

■附属図書館専用書架での蔵書貸出・閲覧

ジェンダー研究所収蔵文献（書籍約25,000冊、雑誌約340種）は、お茶の水女子大学附属図書館の専門コーナーに配架され、学内外の学生や研究者に利用されている。

《図書館利用案内》

○開館日

- ・月～金 8:45～21:00（授業のない日は17:00まで）
- ・土 9:00～17:00（夏・冬・春期休業期間中は閉館）
- ・日 12:00～17:00

（毎週ではありません。図書館カレンダーでご確認ください）

○閉館日

- ・日曜日、国民の祝日、年末年始、大学夏季一斉休業日
- ・夏・冬・春期休業期間中の土曜日
- ・蔵書点検、
- ・徽音祭当日、創立記念日、入学試験日当日、卒業式

■蔵書・研究者に関する情報提供

附属図書館収蔵文献・資料のほかに、ジェンダー研究所内にて、購入雑誌・寄贈雑誌の最新号、研究所の過去の成果刊行物、事業の記録、所属研究者執筆の書籍のほか、全国のジェンダー研究施設や男女共同参画団体の定期刊行物を閲覧することができる。

資料閲覧対応のほか、研究者及びジェンダーに関心を持つ方々に、これらの文献や資料、研究所に蓄積された知識を広く活用してもらうため、メールや電話による外部からの問い合わせ、訪問依頼にも随時対応している。



■お茶の水女子大学デジタルアーカイブズでの資料公開

<http://archives.cf.ocha.ac.jp/>

お茶の水女子大学デジタルアーカイブズでは、本学を卒業し、女性の先駆的研究者として活躍した保井コノ、黒田チカ、湯浅年子、辻村みちよの研究業績をまとめた資料目録などが公開されている。

これらの資料は、女性文化資料館時代の 1981 年の文部省特定研究「女性高等教育とその成果に関する総合的研究」における 2 つのプロジェクト、「III 婦人研究者の活動状況に関する調査研究—自然科学分野を中心に—」「IV 女性文化に関する文献・資料の収集及び調査研究」の中で、それぞれのご遺族の協力を得て収集した遺品のうち、研究関連のものを整理し、長い時間をかけて目録化したものである。

目録化は本研究所の前身機関のプロジェクト成果であるが、これを大学の歴史資産として広く公開するよう、2007～2009 年にデジタルアーカイブズ化された。現在、資料現物は理学部内に設置された「女性科学者資料室」で保管され、本学図書・情報課 情報基盤担当が窓口となって資料閲覧や貸出等の依頼に応じている。



2) IGS 史料電子化プロジェクト

■2019 年度成果概要

ジェンダー研究所は 2017 年度に、「IGS 史料電子化プロジェクト」を始動した。ジェンダー研究所の前身であるジェンダー研究センター（1996 年設立）、女性文化研究センター（1986 年設立）、女性文化資料館（1975 年設立）において、先人たちが開催してきた様々な研究会やセミナー、国際シンポジウムの史料を電子化し、デジタルアーカイブのかたちで後世に残すことで、ジェンダー研究のさらなる発展に寄与することを目指すプロジェクトである。

3 年目を迎えた 2019 年度も、昨年度に引き続きカセットテープの音声データの電子化、実施イベント記録一覧の整備などを進めた。実施イベントは、女性文化資料館（1975-1985）時代と女性文化研究センター（1986-1995）時代だけでも 170 件余りにのぼる。登壇者やゲストの多くは後にジェンダー研究の重鎮となる方々であり、そのテーマは学際的・国際的で、今日においてさえ褪せることのない先進性を誇っている。来年度（2020 年度）以降は、更なる電子化作業と並行し、具体的なアーカイブ構築に向けて、メタデータ、メタデータスキーマの検討を進め、既存の変換済み電子データ群をこれらに添って整理していくこと計画している。

電子化作業中の女性文化資料館（1975～1985 年度）、女性文化研究センター（1986～1995 年度）時代の実施イベント一覧と詳細は、本報告書巻末資料 175～179 頁を参照いただきたい。

3) ウェブサイト等での情報発信

英語での発信の強化

ウェブサイトでは、研究所基本情報や事業内容、研究プロジェクト、シンポジウムやセミナーの開催案内とその実施報告、刊行物のオンライン公開といった総合的な情報発信を日英言語で進めているが、日本語発信が先行し英語発信が遅れがちとなっていた。2019年度は、日英の発信が時差なくできるよう、またイベント開催後に間を置かず報告の発信ができるよう、記事掲載のワークフローと作業分担の見直しを行った。前年度に作成作業を進めた『ジェンダー研究』の特設サイトが公開になり、23号の投稿論文の募集は同サイトからのオンライン投稿が導入されるなど、IT時代に即した学術誌編集が可能になった。研究所サイトのデザイン改訂の作業も進められており、より充実した成果発信の努力を継続する。

■日本語ウェブサイト <http://www2.igs.ocha.ac.jp/>



■英語ウェブサイト <http://www2.igs.ocha.ac.jp/en/>



○新設『ジェンダー研究』ウェブサイト



投稿規定・執筆要項
オンライン投稿
(日本語サイト)

9.

社会貢献

▶社会貢献概要

ジェンダー研究の成果を積極的に社会に還元

ジェンダー研究所所属研究者は、行政機関等が開催する一般向け男女共同参画関連講座の講師を担当したり、メディアの専門家取材に応じるなど、男女共同参画分野での社会貢献や、研究成果の社会還元を積極的に取り組んでいる。

■男女共同参画センター等での講演・取材協力

石井クンツ昌子（所長）

- ・ 京都外国語大学「Gender and Families: A Comparison between Japan and the U.S.」講師（2019年6月3日）
- ・ 神奈川県川崎市高津市民館男女平等推進学習「家庭内性別役割分業の現状と家庭科教育への期待」講師（2019年6月28日）
- ・ 葛飾区男女平等推進センター 区民大学「パパとママの意識改革～それぞれの自分らしさを考えよう～」講師（2019年7月7日）
- ・ 実践女子大学人間社会学部 公開講座「女性リーダーの育成と女子大学の役割：お茶の水女子大学の事例から」講師（2019年7月20日）
- ・ 笹川平和財団「新しい男性の役割に関する調査報告書」意見交換会「日本およびアジア地域における男性意識調査の分析について」パネリスト（2019年7月26日）
- ・ 広島県男女共同参画研修会「男性の育児・家事と女性の就労から考える男女共同参画」講演（2019年8月26日）
- ・ 日本学術会議 社会学委員会 社会統計調査アーカイブ委員会 公開シンポジウム「社会調査のオープンサイエンス化に向けての課題」企画・運営・登壇（2019年10月19日）
- ・ 東京女子大学 女性学研究所シンポジウム「女性の就労と多様な役割から考える男女共同参画」講演（2019年10月25日）
- ・ お茶の水女子大学附属高校 新教養基礎～『問い』を立てる「家族とジェンダー～家族社会学のアプローチ～」講義（2019年11月21日）
- ・ Konrad-Adenauer-Stiftung (KAS) シンポジウム 進行担当（2019年12月11日）
- ・ Showa Women's University “Women Can Change the World” Symposium “Women's Employment and Men's Domestic Work in Contemporary Japan: Are They Related?” Presentation（2019年12月21日）
- ・ 明治学院大学 大学運営部会 外部ピアレビュー委員会 委員長（2019年4月～現在）
- ・ NPO 法人おっとふぁーざー（福井県） 理事（2019年9月～現在）

申琪榮（准教授）

- ・ 日本学術会議シンポジウム『男女がともにつくる民主政治を展望する—政治分野における男女共同参画を推進する法律の意義』、講演「政治リーダー養成の試み—パリテ・アカデミーの実践が示唆すること」、（2019年4月6日）
- ・ 国立女性教育会館『2019年度地域における男女共同参画リーダー研修』テーマ別分科会、講演「政治分野における女性の参画」（2019年5月23日）

- ・ 久留米市男女平等推進センター、講演「政治が変わると生活が変わる！女性議員をもっと議会に送ろう」(2019年6月21日)
- ・ 千葉県市川市男女共同参画センター、講演「異なる視点が未来を創る～女性の政治参画」(2019年6月29日)
- ・ 国会図書館研究会報告「持続可能な政治代表性は得られるのか－クオータ制の15年」(2019年7月29日)
- ・ 公益財団法人新潟県女性財団講演「政治分野における男女共同参画～政治(議会)に女性が参画すると何が変わる？」(2019年9月10日)
- ・ 台湾国立大学 Global Asia Research Center 国際シンポジウム『東アジアの MeToo 運動』、講演「#MeToo in Japan and Korea」(2019年10月28日)
- ・ 同志社大学人文科学研究所第95回公開講演会「若手女性の政治参加－女性政治リーダートレーニングの試みから」(2019年11月8日)
- ・ 名古屋大学シンポジウム『男女共同参画社会基本法とジェンダー平等：施行から20年を振り返る』、講演「政治リーダー養成の試み－パリテ・アカデミーの実践が示唆すること」(2019年11月15日)
- ・ 筑紫女学院大学女性活躍支援センター講演「若手女性の政治参画～私だからこそできる」(2019年11月21日)
- ・ 佐賀県立男女共同参画センター政治参画セミナー講演「女性議員が増えると暮らしが社会が変わる～議会に多様な声を届けるために～」、佐賀女子短期大学(2019年11月21日)、唐津市民交流プラザ(2019年11月22日)
- ・ 福島県郡山市市民部男女共同参画課講演「政治まると体験会～女性の声で政治はどう変わる？～」(2020年2月15日)
- ・ 岩手県男女共同参画センター『令和における生き方講座』、講演「意思決定の場における男女共同参画」(2020年2月16日)

大橋史恵(准教授)

- ・ 練馬区区民企画講座「もっと親子で話そう！誰がやってる？家の中のいろんなしごとの話」(企画：ねりまポレポレママの会)(2019年12月14日)

仙波由加里(特任リサーチフェロー)

- ・ スペースゆう パートナースhip事業 パネルトーク「性の多様性～自分らしく生きる～」パネリスト(北とぴあドームホール、2019年11月10日)
- ・ すまいる親の会(AIDで子どもを持った/持とうとしている親の会)勉強会講師「子どもへのテリングを考える－イギリスの事例から」(城西国際大学、2019年12月21日)

平野恵子(特任リサーチフェロー)

- ・ 小澤高等看護学院講師(全15回のうち5回。2019年9月2日「ジェンダーとは何か」「宗教」「ジェンダー・ニーズとは何か」、9月3日「多文化共生とジェンダー1」「多文化共生とジェンダー2」)

■地方公共団体男女共同参画事業への参与

石井クンツ昌子(所長)

- ・ 福井県男女共同参画審議会会長

大橋史恵（准教授）

- ・ 練馬区立男女共同参画センター運営委員

板井広明（特任講師）

- ・ 川崎市男女平等推進審議会員

■NPO 事業への参与

申琪榮（准教授）

- ・ 女性政治リーダーを養成する一般社団法人「パリテ・アカデミー」(Academy for Gender Parity)を立ち上げ 共同代表を務める

■外部機関倫理審査委員会への参与

仙波由加里（特任リサーチフェロー）

- ・ 公益財団法人 神経研究所 倫理審査委員会 審査委員
- ・ みなとみらい夢クリニック 倫理審査委員会 審査委員

■校外学習活動等への協力

- ・ お茶の水女子大学附属高校キャリアガイダンスへの協力。担当：大橋史恵（准教授）（2019年12月18日）

■新聞等記事へのコメント提供ほか

石井クンツ昌子（所長）

- ・ 第一生命 The Community 誌「LGBTQ+の現在」座談会座長（2020年3月24日）
- ・ リクルート『カレッジマネジメント』取材協力
- ・ NHK 取材協力・番組出演
- ・ 読売新聞社 取材協力
- ・ Parenting without Borders, Boardwalk Pictures, Hollywood 取材協力
- ・ 朝日新聞社 取材協力ほか、新聞・雑誌等の取材、新聞コラム執筆など多数

申琪榮（准教授）

- ・ 『東京新聞/中日新聞』2019年4月9日「(統一地方選挙) 女性議員6道県で減」
- ・ 『共同通信』(静岡新聞、長崎新聞、秋田魁新報、信濃毎日新聞、岐阜新聞ほか) 2019年4月9日「(統一地方選挙)「政治は男」の意識根強く」ほか
- ・ 『毎日新聞 (WEB版)』2019年4月10日「(統一地方選挙) 女性候補へのハラスメント深刻」
- ・ 『共同通信』(福井新聞、河北新報、南日本新聞、新潟日報、佐賀新聞、埼玉新聞、日本海新聞ほか) 4月16日~17日「女性ゼロ議会解消どこまで」
- ・ 『東京新聞』2019年4月17日「(統一地方選挙) 女性出馬 決断を後押し」
- ・ 『朝日新聞』2019年6月15日「(GLOBE+) 政治は特別な世界ではない」
- ・ 『朝日新聞』2019年6月16日 (GLOBE+) 女性の立候補を後押し、アメリカの育成プログラムはここまで実践的」
- ・ 『共同通信』(大分合同新聞ほか) 2019年7月5日「女性「当選者3割」焦点」
- ・ 『日本経済新聞』2019年7月10日「参院選・女性議員躍進なるか」

- ・『西日本新聞』2019年7月14日「政治は男の仕事？」
- ・『共同通信』（茨城新聞ほか）2019年7月23日「女性の政治参加進まず」
- ・『新潟日報』2019年8月29日、9月10日、9月11日「「男って女って 第5部」政治の世界～増えない女性議員<2><6><7>」
- ・『新潟日報』2019年9月19日「「男って女って」議員活動への視野広がる」
- ・『神奈川新聞』2019年9月29日「論説「女性政界進出阻む壁とは」」
- ・『NHK 佐賀 NEWS WEB』2019年11月22日「女性議員増の意味を考える催し」
- ・『毎日新聞』2019年11月23日「映画「82年生まれ」ヒット 均等法世代も救われた理由 _ 韓流パラダイム」
- ・『佐賀新聞』2019年11月24日「政治参画セミナー」
- ・『高知新聞（こちら情報部 東京新聞提供）』2019年11月26日「政治と女性と30%と①」
- ・『ハフポスト』2020年12月17日「男女平等また後退、ジェンダーギャップ指数」
- ・『朝日新聞』2020年12月18日「ジェンダーギャップ、韓国108位 日本を逆転したわけ」
- ・『読売新聞』2020年12月28日「回顧2019女性」
- ・『週刊金曜日』2020年1月24日「今週のジェンダー情報」
- ・『読売新聞』2020年2月1日「18歳の1票・男女格差」
- ・『エキサイトニュース』2020年2月6日「女性のモヤモヤの根っこは「政治」とつながっている／パリテ・アカデミー [前編]」
- ・『エキサイトニュース』2020年2月7日「聞き上手な女性は、実は政治家に向いている!？／パリテ・アカデミー [後編]」
- ・『PRESIDENT WOMEN Online』2020年3月9日「女性リーダーをつくる:コロナ対策も後手に、日本が世界に取り残される「おじいさん」政治から抜けられないワケ」
- ・『PRESIDENT WOMEN Online』2020年3月10日「女性リーダーをつくる:選挙に行かない人が増えるほど、男性優位主義者に有利になるカラクリとは」
- ・『PRESIDENT WOMEN Online』2020年3月11日「女性リーダーをつくる:女性が生きづらい社会を助長する、日本の「おじいさん」政治を変える方法とは」
- ・『毎日新聞』2020年3月25日「声をつないで 国際女性デー2020「ガラスの天井」を打ち砕く」

大橋史恵（准教授）

- ・『出版舎ジグ WEB サイト』2020年3月8日「【連載とメッセージ】移住労働者の権利と感染症対策をめぐる台湾の大学教員5名の共同声明」解説

仙波由加里（特任リサーチフェロー）

- ・『西日本新聞朝刊』2019年8月6日「出自を知りたい 生殖医療と子の権利」(下)ドナー求め国外へ 問われる「命」生んだ責任 <https://www.nishinippon.co.jp/item/n/533138/> コメントが掲載

平野恵子（特任リサーチフェロー）

- ・『学術の動向』6月号「インドネシア人移住・家事労働者を取り巻く「非・安全」な制度への取り組み」

資料

- ① 構成メンバー
- ② 研究プロジェクト一覧
- ③ 協力研究者一覧
- ④ 国際シンポジウム・セミナー・研究会一覧
- ⑤ 寄贈図書一覧
- ⑥ 電子化イベント一覧
- ⑦ 国立大学法人お茶の水女子大学
ジェンダー研究所規則
- ⑧ 国立大学法人お茶の水女子大学
特別招聘教授に関する規則
- ⑨ 『ジェンダー研究』編集方針・
投稿規程
- ⑩ ジェンダー研究所ウェブサイト
プライバシー・ポリシー

【資料】①構成メンバー

【所長】

石井クツ昌子(基幹研究院人間科学系・生活科学部教授)

《任期》

2015(H27)年10月1日～2020(R2)年3月31日

【専任教員】

申琪榮(ジェンダー研究所准教授)

2015(H27)年4月1日～

大橋史恵(ジェンダー研究所准教授)

2018(H30)年9月1日～

【研究員】

棚橋訓(基幹研究院人間科学系・文教育学部教授)

2019(H31)年4月1日～2021(R3)年3月31日

小玉亮子(基幹研究院人間科学系・文教育学部教授)

2019(H31)年4月1日～2021(R3)年3月31日

斎藤悦子(基幹研究院人間科学系・生活科学部准教授)

2019(H31)年4月1日～2021(R3)年3月31日

戸谷陽子(基幹研究院人文科学系・文教育学部教授)

2020(R2)年1月1日～2021(R3)年3月31日

【特別招聘教授】

ジャン・バーズレイ(ノースカロライナ大学チャペルヒル校・教授)

2018(H30)年8月2日～2019(R元)年7月31日

【特任講師】

板井広明

2019(H31)年4月1日～2020(R2)年3月31日

【特任リサーチフェロー】

仙波由加里

2019(H31)年4月1日～2020(R2)年3月31日

平野恵子

2019(R1)年5月1日～2020(R2)年3月31日

吉原公美

2019(H31)年4月1日～2020(R2)年3月31日

【アカデミック・アシスタント】

稲垣明子

2019(H31)年4月1日～2020(R2)年3月31日

梅田由紀子

2019(H31)年4月1日～2020(R2)年3月31日

滝美香

2019(H31)年4月1日～2020(R2)年3月31日

和田容子

2019(H31)年4月1日～2020(R2)年3月31日

【客員研究員】

足立眞理子

2019(H31)年4月1日～2020(R2)年3月31日



所長 石井クンツ 昌子

基幹研究院人間科学系・教授
生活科学部生活社会科学講座
博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 生活政策学コース
博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

専門分野： 家族社会学、ジェンダー社会学、社会心理学

所属学会等 日本家族社会学会(会長)
日本学術会議 連携会員／社会統計調査アーカイブ分科会(委員長)／
WEB調査の課題に関する検討分科会(幹事)／
新しい社会的課題の解決に関する総合的検討分科会(幹事)／
人口縮小社会における問題解決のための検討委員会
日本社会学会
日本家政学会家族関係部会
社会学系コンソーシアム(評議員)
福井県男女共同参画審議会(会長)
National Council on Family Relations (Legacy Circle Member)

主な業績

《著書・論文・報告書・書評》

- 2019 笹川平和財団(2019)『新しい男性の役割に関する調査報告書』分担執筆
2019 日本社会学会社会学教育委員会(2019)『社会教育のグローバルスタンダードとは？—英語圏の教科書の分析—』分担執筆
2019 「家族とメディア」西野理子・米村千代(編)『よくわかる家族社会学』pp.134-135.
2020 “Japanese Women, Past and Present.” Johnsbraten, Anne-Stine. *Good Wife, Good Mother.*

《講演・報告等》

- 2019 「家庭内性別役割分業の現状と家庭科教育への期待」高津市民館男女平等推進学習 6月
2019 “Gender and Families: A Comparison between Japan and the U.S.” 京都外国語大学 6月
2019 「パパとママの意識改革～それぞれの自分らしさを考えよう～」葛飾区男女平等推進センター区民大学 7月
2019 「女性リーダーの育成と女子大学の役割:お茶の水女子大学の事例から」実践女子大学 7月
2019 「日本およびアジア地域における男性意識調査の分析について」笹川平和財団「新しい男性の役割に関する調査報告書」意見交換会 7月
2019 「男性の育児・家事と女性の就労から考える男女共同参画」広島県男女共同参画研修会 8月

- 2019 「海外ジャーナル投稿と査読プロセス」日本家族社会学会ラウンドテーブル、神戸学院大学 9月
- 2019 石井クンツ昌子・多賀太・伊藤公雄・植田晃博「男性性とケア行動—東アジア5都市の比較から—」日本社会学会、東京女子大学 10月
- 2019「趣旨説明」及び企画・運営、学術会議シンポジウム「社会調査のオープンサイエンス化へ向けての課題」首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス 10月
- 2019 「女性の就労と多様な役割から考える男女共同参画」東京女子大学 2019年10月
- 2019 「家族とジェンダー～家族社会学のアプローチ～」お茶の水女子大学附属高校 新教養基礎～『問い』を立てる 11月
- 2019 “Women’s Employment and Men’s Domestic Work in Contemporary Japan: Are They Related?” “Women Can Change the World” Symposium, Showa Women’s University, December
- 2020 「LGBTQ+のパートナーシップ・ファミリー・子ども」*The Community* 座談会座長 3月

《競争的資金》

- ・科学研究費基盤研究B(課題番号:18H00937)「「男性性のゆらぎ」の現状と課題」、2018～2020年度(研究代表者:伊藤公雄・京都産業大学)、研究分担者



専任教員(准教授) 申 琪榮

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域
博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース(コース長)
生活科学部生活社会科学講座

専門分野: ジェンダーと政治、東アジア政治、フェミニズム理論、男女共同参画政策

所属学会等 International Political Science Association

American Political Science Association

European Conference on Gender and Politics

International Association for Feminist Economics

日本政治学会(分野別研究会「ジェンダーと政治研究会」、企画委員、書評委員)

日本フェミニスト経済学会

日本社会政策学会

ソウル大学日本学研究所『日本批評』海外編集委員

釜山大学女性学研究所『女性学研究』編集委員

ソウル大学比較地域秩序研究会共同研究員

日本政治学会(企画委員、書評委員)

「女性・戦争・人権」学会

日米女性政治学者シンポジウム(JAWS、アメリカ政治学会国際交流プログラム)日本側コーディネーター

同志社大学人文社会科学研究所客員研究員

主な業績

《論文・共著・その他》

- 2019 「女性候補者のなり手を増やすための試み——パリテ・アカデミーの実践が示唆すること」、辻村みよ子・三浦まり・糠塚康江編著『女性の参画が政治を変える——候補者均等法の活かし方——』、pp.101-114、信山社。
- 2019 “#MeToo in Japan and South Korea: #WeToo, #WithYou,” *MeToo Political Science*. Routledge. pp.97-111 (with Linda Hasunuma) (転載)
- 2019 「여성할당제를 넘어 성균형 의회로: 할당제의 운용과 20대 국회의원들의 인식 (From Gender Quotas to Gender Parity in Legislatures), 『이화젠더법학』, 11(3):207-243. 2019. (査読あり)
- 2020 “An Alternative Form of Women’s Political Representation: *Netto*, A Women’s Party in Japan,” *Politics & Gender* 16 (March): 78-98 (Special Issue 1: Special Symposium on Women’s Parties) (Online First <https://doi.org/10.1017/S1743923X19000606>) 16 Dec. 2019. (査読あり)
- 2020 “Women’s Parties: A New Party Family,” *Politics & Gender* 16 (March): 4-25, (Special Issue 1: Special Symposium on Women’s Parties) (Online First DOI: <https://doi.org/10.1017/S1743923X19000588>), 25 Oct. 2019. (with Cowell-Meyers, Kimberly, Elizabeth Evans) (査読あり)
- 2019 「関係あるかも？私、と政治」、『フォーラム通信』、横浜市男女共同参画センター、2019年夏号、p.7
- 2020 『若年女性の政治参加』(第95回公開講演会)、人文研ブックレット No.65、同志社大学人文科学研究所。
- 2020 「大韓民国の事例」『令和元年度諸外国における政治分野への女性の参画に関する調査研究』、内閣府男女共同参画局調査報告書。
- 2020 「コラム～台湾における女性の政治参画とクオータ制度」『令和元年度諸外国における政治分野への女性の参画に関する調査研究』、内閣府男女共同参画局調査報告書。162-168. 2020年3月。

《学会報告》

- 2019 “The Impact of Gender Parity Law in Japan: Survey Analysis of Japanese Diet Members,” 2019 Asian Election Studies International Conference, Oct. 29, Taiwan (with Mari Miura)
- 2019 “Who Opposes Quota and Why?: Survey Analysis of Korean and Taiwanese National Legislators,” European Conference on Politics and Gender, University of Amsterdam, July 4~6 (with Chang-ling Huang).
- 2019 申琪榮「ジェンダー化された雇用営業戦略と顧客ケア」社会政策学会、高知県立大学、5月18日～19日（金井郁と共著）。

《招待講演・ワークショップ報告》

- 2019 「政治リーダー養成の試み——パリテ・アカデミーの実践が示唆すること」、日本学術会議シンポジウム『男女がともにつくる民主政治を展望する——政治分野における男女共同参画を推進する法律の意義』、4月6日
- 2019 国立女性教育会館『2019年度地域における男女共同参画リーダー研修』テーマ別分科会「政治分野における女性の参画」、5月23日
- 2019 「政治が変わると生活が変わる！女性議員をもっと議会に送ろう」久留米市男女平等推進センター、6月21日
- 2019 「異なる視点が未来を創る～女性の政治参画」千葉県市川市男女共同参画センター、6月29日
- 2019 「持続可能な政治代表性は得られるのか——クオータ制の15年」、国会図書館研究会報告、7月29日
- 2019 「政治分野における男女共同参画～政治（議会）に女性が参画すると何が変わる？」公益財団法人新潟県女性財団講演、9月10日
- 2019 「#MeToo in Japan and Korea」、台湾国立大学 Global Asia Research Center 国際シンポジウム『東アジアのMeToo運動』、10月28日
- 2019 「日本の家族制度——夫婦別姓と女性の名前」韓国ソウル大学家族学講座特別講義、11月5日
- 2019 「若手女性の政治参加——女性政治リーダートレーニングの試みから」、同志社大学人文科学研究所第95回公開講演会、11月8日
- 2019 「政治リーダー養成の試み——パリテ・アカデミーの実践が示唆すること」、シンポジウム『男女共同参画社会基本法とジェンダー平等：施行から20年を振り返る』11月15日名古屋大学
- 2019 「若手女性の政治参画～私だからこそできる」、筑紫女学院大学女性活躍支援センター講演、11月21日 筑紫女学院大学
- 2019 「女性議員が増えると暮らしが社会が変わる～議会に多様な声を届けるために～」、佐賀県立男女共同参画センター政治参画セミナー、11月21日 佐賀女子短期大学、11月22日 唐津市民交流プラザ
- 2020 “Gender-based Public Funding for Political Parties: Why Doesn’t It Work in South Korea?” Research Workshop on Gender and Financial Cost of Elected Office Worldwide. Bergen University, Norway, Jan. 24-26. 2020 (with Soo-hyun Kwon).
- 2020 「政治まると体験会～女性の声で政治はどう変わる？～」福島県郡山市市民部男女共同参画課、2月15日
- 2020 「意思決定の場における男女共同参画」『令和における生き方講座』岩手県男女共同参画センター、2月16日

《競争的資金》

- ・ 科学研究費基盤研究 C(課題番号:19K12604)「ジェンダークオータの政治学——制度化と抵抗」、2019～2021年度、研究代表者
- ・ 科学研究費基盤研究 B(課題番号:18H00817)「女性の政治参画の障壁：国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査」、2018～2020年度(研究代表者:三浦まり・上智大学)、研究分担者



専任教員(准教授) 大橋 史恵

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域
博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース
文教育学部グローバル文化学環

専門分野: ジェンダー研究、国際社会学、中国地域研究

所属学会等 International Association for Feminist Economics

日本社会学会
関東社会学会
日本フェミニスト経済学会(幹事会役員、『経済社会とジェンダー』編集委員)
ジェンダー史学会(常任理事)
現代中国学会
中国女性史研究会
経済理論学会分野別ジェンダー分科会

主な業績

《著書・論文》

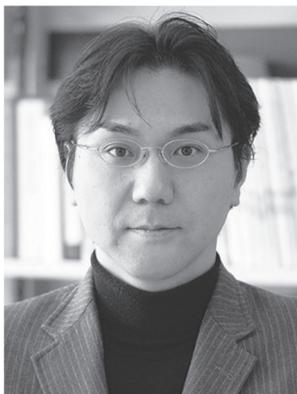
- 2019 「大娘たちとくともに歩む」という〈闘い〉 —— 中国山西省における日本軍戦時性暴力問題をめぐる運動」、『ジェンダー研究』(22)、pp.81-91
- 2019 「「香港社会の家事労働者——『中国』と『外国』の狭間における分断と連帯」、伊藤るり編著『家事労働の国際社会学——ディーセント・ワークを求めて』、人文書院、2020 年。

《学会報告・講演》

- 2019 Situated in Dislocation: Rural Migrant Domestic Workers' Mooring Strategies in Urban China, Paper presented at the 2019 IAFFE Annual Conference, Glasgow, United Kingdom, June 27, 2019.

《競争的資金》

- ・ 科学研究費補助金・基盤研究 B「新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー——インド・フィリピン・中国の国際比較」(課題番号:17H02247) 分担研究者(研究代表者:堀芳枝)、2017 年度～2019 年度
- ・ 科学研究費補助金・基盤研究 B「再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯」(課題番号:19H01578) 分担研究者(研究代表者:定松文)、2019 年度～2021 年度
- ・ 科学研究費補助金・基盤研究 C「香港における移住女性の再生産労働力配置——「グローバル・シティ」のジェンダー分析」(課題番号:19K12603) 研究代表者、2019 年度～2021 年度



特任講師 板井 広明

専門分野: 社会思想史、経済学史、食の倫理とジェンダー

所属学会等: 経済学史学会

日本イギリス哲学会

社会思想史学会

政治思想学会

日本フェミニスト経済学会(幹事)

日本有機農業学会

日本経済理論学会(分野別ジェンダー分科会コアメンバー)

【担当業務】

- ・ 研究プロジェクト「リベラル・フェミニズムの再検討」(22 頁参照) / 18 世紀末ブリテンにおける女性論の諸相: 功利主義的フェミニズムの可能性(23 頁参照)
- ・ IGS セミナー「J.S.ミルにおけるデモクラシーと女性参政権」企画・コーディネーター・司会(60 頁参照) / 「日本における女らしさの表象」企画・コーディネーター・司会(66 頁参照) / 「持続可能な社会をめざすエンパワメントの教育:ジェンダーの視点から」企画・コーディネーター・司会(68 頁参照) / 「A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives: Family, Society, and Gender」企画・コーディネーター・司会(70 頁参照) / 「コンドルセの政治社会像と女性への視点」企画・コーディネーター・司会(78 頁参照)
- ・ IGS 研究会“Shared Visions for Korea-Japan Relations: Globalism, Peace, and Gender Issue” 司会(80 頁参照)
- ・ 国際教育プログラム「AIT ワークショップ」(107~113 頁参照)
- ・ 大学院講義科目「国際社会ジェンダー論」演習(123 頁参照)
- ・ IGS ランチョンセミナー企画運営
- ・ IGS 運営会議陪席メンバー
- ・ ウェブサイト・SNS・メーリングリスト等による情報発信・広報(136 頁参照)
- ・ シンポジウム・セミナー・研究会ポスター作成(44~46 頁参照)
- ・ 情報機器・ネットワーク管理

主な業績

《著書・論文》

2019 “Surveillance and Metaphor of ‘Tribunal’ in Bentham’s Utilitarianism”, *Revue d’études benthamiennes*, no.16, 2019, Centre Bentham, <https://doi.org/10.4000/etudes-benthamiennes.6132>

《学会報告等》

2019 “Comment on Prof. Elson ‘Intersections of gender and class in the distribution of income’”, 武蔵大学国際シンポジウム『所得格差におけるジェンダーと階級 Intersections of Gender and Class in the Distribution of Income』10 月 21 日(月)

《競争的資金》

- ・ 科学研究費基盤研究 C(課題番号:19K01570)「18 世紀末ブリテンにおける女性論の諸相:功利主義的フェミニズムの可能性」、2019~2021 年度、研究代表者



特任リサーチフェロー 仙波 由加里

専門分野: 生命倫理学、生殖技術とジェンダー、生殖技術に関連する倫理的問題

所属学会等: 日本医学哲学・倫理学会(国際誌編集委員)
日本生命倫理学会(評議委員)
日本生殖看護学会
European Society of Human Reproduction and Embryology (ESHRE)

【担当業務】

- ・ 研究プロジェクト「生殖医療とジェンダー」(26 頁参照) / 「性に関する情報と実践—性教育に関する研究」(27 頁参照) / 「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究」(28 頁参照) / 「生殖補助技術で形成される家族についての研究」(30 頁参照) / 「AID で生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究」(29 頁参照)
- ・ NTNU 国際共同研究プロジェクト「NJ_BREGED プロジェクト」プロジェクトメンバー(114~117 頁参照)
- ・ IGS セミナー(生殖領域)「生殖医療技術と男性性」企画・コーディネーター・司会(58 頁参照) / 「性別二元制規範を考える」企画・コーディネーター・司会(76 頁参照)
- ・ IGS 研究会「Exploring How Women's Contraceptive Choices Can Be Influenced by Their Views on Abortion」報告: Contraception and Abortion in Japan(84 頁参照)
- ・ 『ジェンダー研究』、編集スタッフ。主に書評編集担当(128~131 頁参照) / ・ 海外からの問い合わせ・訪問者対応

主な業績

《著書・論文》

- 2019 「どのような人が理想の配偶子ドナーとなりうるか——ニュージーランドと英国のドナーたちの経験から——」『生命倫理』30 号、pp.69-76。(査読あり)
- 2019 「子どもをもつためにはいかなる生殖技術を使ってもよいのか」(pp. 280-281)「死後生殖をどのように受け止めるのか」(pp.282-283)「遺伝上の親、産みの親、育ての親が異なると、子に混乱をもたらすのか—生殖技術と親子関係」(pp.284-285)「生殖補助技術の進歩は何をもたらすのか」(pp.292-295)、盛永審一郎、松島哲久、小出泰士編『いまを生きるための倫理学』丸善出版、分担執筆
- 2020 トヨタ財団研究助成『生殖補助技術で形成される家族についての研究』、報告書(単著)『血のつながりをこえて——提供精子・提供卵子・養子でできた家族の物語』人間と歴史社
- 2020 「子どもへのテリングを考える——イギリスの事例から」科学研究費助成事業『私たちが大切にしたいもの——AID で加増になった人たちの告知への思いと実践——』pp. 106-115、平成 28 年度(2016 年度)基盤研究(C)(一般)「AID で生まれた人の「出自を知る権利」を保障するための教材作成に関する研究」(研究代表者:清水清美—城西国際大学看護学部)成果物、分担執筆

《学会報告・講演》

- 2019 国際シンポジウム招聘報告“Abolishment of Donor Anonymity : What Can Japan Learn from the Experience of Victoria State, Australia and New Zealand?”(in English)、シンポジウム名: New Reproductive Technologies and Global Assemblages: Asian Comparative Perspective、国立台湾大学、5 月 17 日
- 2019 学会発表: 日本人口学会第 71 回年次大会 企画セッション①「性に関する情報の伝達と人口」パネリスト、香川大学、6 月 1 日
- 2019 一般講演会: すまいる親の会(AID で子どもを持った/持とうとしている親の会)勉強会、「子どもへのテリングを考える——イギリスの事例から」、城西国際大学、12 月 21 日

《競争的資金》

- ・ トヨタ財団研究助成「生殖補助技術で形成される家族についての研究」、2017 年 5 月~2020 年 2 月末、研究代表者
- ・ 科学研究費基盤研究 C(課題番号:18K00034)「諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究」、2018 年~2020 年度、研究代表者
- ・ 科学研究費基盤研究 C(課題番号:16K12111)「AID で生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究」、2016 年~2019 年度(研究代表者:清水清美・城西国際大学)、研究分担者



特任リサーチフェロー 平野 恵子

専門分野: 国際社会学、ジェンダー研究、インドネシア地域研究

所属学会等: International Association for Feminist Economics

日本社会学会、国際ジェンダー学会、日本フェミニスト経済学会
アジア政経学会、東南アジア学会、移民政策学会

【担当業務】

- ・ 研究プロジェクト「送出国から見た国際労働力移動のジェンダー分析」(36 頁参照) / 「移民受入れ国—送出国の政策相互連関——国際社会学からの比較研究」(37 頁参照) / 「現代インドネシアにおける『移住・家事労働者』の変容」(38 頁参照) / 「再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯」(34 頁参照) / 「インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合」(39 頁参照)
- ・ IGS セミナー “Gender and Politics in Indonesia after 2019 Election” 企画・コーディネーター・司会(73 頁参照)
- ・ 『ジェンダー研究』編集スタッフ(128～131 頁参照)
- ・ 海外からの問合・訪問者対応

主な業績

《著書・論文》

- 2019 「インドネシア人移住・家事労働者を取り巻く『非・安全』な制度への取り組み」『学術の動向』, 24(6): pp.20-23.
- 2020 「移住家事労働者が帰還後ジャカルタで家事労働者になるとき」『インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合』, pp.17-26.
- 2020 「第3章インドネシアにおける移住・家事労働者の権利保護——『技能化』と組織化」伊藤り編著, 『家事労働の国際社会学』人文書院, pp.82-107.

《学会報告・講演》

- 2019 学会報告: 「インドネシアの移住・家事労働者: 出稼ぎ、都市化、組織化」日本フェミニスト経済学会・共通論題「東南アジアの経済成長とジェンダー——女性の移動・労働・定住」、北とびあ(東京都)、7月13日
- 2019 IGS Seminar 報告: ”Gig-economy and Unionization in Reproductive Labor” in IGS Seminar on “Gender and Development Revisited: Dialogue with Dian Elson” at Ochanomizu University、10月22日
- 2019 学会報告: ”Returning home: when Indonesian migrant domestic worker become local domestic worker” in SEASIA Biennial Conference 2019 at Academia Sinica, Taipei、12月7日

《競争的資金》

- ・ 科学研究費基盤研究 C(課題番号:17K02067)「現代インドネシアにおける『移住・家事労働者』の変容」、2017～2020 年度、研究代表者
- ・ 科学研究費基盤研究 A(課題番号:19H00607)「移民受入れ国—送出国の政策相互連関——国際社会学からの比較研究」、2019～2021 年度(研究代表者:小井土彰宏・一橋大学)、研究分担者
- ・ 科学研究費基盤研究 B(課題番号:19H01578)「再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯」、2019～2021 年度(研究代表者:定松文・恵泉女学園大学)、研究分担者
- ・ 科学研究費基盤研究 C(課題番号:17K02051)「インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合」、2017～2019 年度(研究代表者:中谷潤子・大阪産業大学)、研究分担者



研究員 棚橋 訓

基幹研究院人間科学系・教授
副理事(国際担当)

文教育学部人間社会科学科教育科学コース
博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース
博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

専門分野: 文化人類学、オセアニア地域研究、ジェンダー文化論、
セクシュアリティ研究

主な担当業務:ジェンダー研究所運営会議メンバー



研究員 小玉 亮子

基幹研究院人間科学系・教授
同 人間科学系長

文教育学部人間社会科学科子ども学コース
博士前期課程人間発達科学専攻保育・児童学コース
博士後期課程人間発達科学専攻保育・児童学領域

専門分野: 子ども社会学、教育学

主な担当業務:ジェンダー研究所運営会議メンバー
国際共同プロジェクト INTPART



研究員 斎藤 悦子

基幹研究院人間科学系・准教授
生活科学部生活社会科学講座

博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 生活政策学コース
博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

専門分野: 生活経済学、生活経営学、企業文化論

主な担当業務:ジェンダー研究所運営会議メンバー



研究員 戸谷 陽子

基幹研究院人文科学系・教授
文教育学部言語文化学科英語圏言語文化コース

博士前期課程比較社会文化学専攻英語圏・仏語圏文化学コース
博士後期課程比較社会文化学専攻言語文化論領域

専門分野: 舞台芸術論、パフォーマンス研究、アメリカ演劇、文化政策、
比較演劇論

主な担当業務:ジェンダー研究所運営会議メンバー



客員研究員 足立 真理子

委嘱期間:2019年4月1日~2020年3月31日

研究プロジェクトタイトル

新興アジア諸国のBPO産業の成長とジェンダー:インド・フィリピン・中国の国際比較
(科学研究費基盤研究B 課題番号:17H02247)

資本と身体ジェンダー分析:資本機能の変化と『放逐』される人々

研究成果

論文掲載

足立真理子「お茶の水女子大学ジェンダー研究センターの経験 排除と過剰包摂のポリティクス」、『世界』(927)、岩波書店、2019年、pp.232-240.

足立真理子「ローザ・ルクセンブルク再審:新しい収奪の形態をめぐって」『思想』(1148)、岩波書店、2019年、pp.5-22.

シンポジウム登壇

国際基督教大学 緊急シンポジウム「学問の自由とジェンダー研究:ハンガリー政府のジェンダー研究禁止問題と日本からの応答」(2019年6月8日)

日本フェミニスト経済学会 2019年大会「東南アジアの経済成長とジェンダー:女性の移動・労働・定住」(2019年7月13日)

【事務系スタッフ】



特任リサーチフェロー 吉原 公美

主担当業務:ジェンダー研究所事務局統括
ジェンダー研究所特別招聘教授招聘事務および業務活動支援
ジェンダー研究所全体予算管理
国際共同プロジェクト INTPART ファシリテーター
各種報告書・報告データ作成
国際シンポジウム等運営 ほか



アカデミック・アシスタント 稲垣 明子

主担当業務:シンポジウム等運営関連
AIT ワークショップ事務
研究所事業事務
会計事務
書類作成・書類整理 ほか



アカデミック・アシスタント 梅田 由紀子

主担当業務:文献収集・資料整理・附属図書館収蔵資料管理関連
IGS 史料電子化プロジェクト主任
研究所事業事務
シンポジウム等運営事務・マニュアル作成
会計事務
書類作成・書類整理 ほか



アカデミック・アシスタント 滝 美香

主担当業務:会計事務関連
研究所事業事務
シンポジウム等運営事務
書類作成・書類整理 ほか



アカデミック・アシスタント 和田 容子

主担当業務:成果発信関連
年次事業報告書編集
『ジェンダー研究』編集員
成果発信原稿校閲
シンポジウム等運営補佐
研究所事業事務補佐 ほか

【資料】②研究プロジェクト一覧

(I) 政治・思想とジェンダー

IGS 研究プロジェクト

「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究

【研究担当】 申琪榮 (IGS 准教授)

【研究内容】

東アジア地域はその経済発展の成果により国際的に注目されているが、政治の民主化の道筋は一様ではない。本研究プロジェクトでは、日本、韓国、台湾の民主主義の有り様と政治代表性の関係について、ジェンダー視点に立脚した国際共同研究により比較分析する。議員を対象としたアンケート調査、政党、議員、市民社会関係者へのインタビューや現地でのフィールドワークを実施するほか、定期的な国際シンポジウムや研究集会を開き、研究交流を促進する。東アジア地域において、政治代表性の男性優位性が続くメカニズムを明らかにし、政治制度におけるジェンダー公平性・多様性を実現させる政策も検討する。

2019年にはECPG(European Conference on Politics and Gender)で3カ国の研究者が集って研究成果を点検した。3カ国の議員アンケートの結果を分析した研究論文を学術雑誌に掲載したほか、今後も3カ国比較の共同研究成果を発表していく予定である。また、政治分野に限らず東アジアの#MeToo運動の広がりについても共同研究を進めた。2019年度からは[科研費 C ジェンダークオータの政治学:制度化と抵抗](本報告書 20 頁参照)が採択され、さらに充実した研究が進められるようになった。(本報告書 18 頁参照)

科学研究費基盤研究 B(研究課題番号 18H00817)

女性の政治参画の障壁:国会議員・県連への郵送・ヒアリング調査

【研究代表者】三浦まり(上智大学教授)

【研究分担者】申琪榮(IGS 准教授)、Noble Gregory(東京大学教授)、スティール若希(東京大学准教授)、MCELWAIN KENNETH(東京大学准教授)、大山礼子(駒澤大学教授)

【期間】2018～2020 年度

【研究内容】

女性の政治参画に対する障壁を国会議員および主要政党の都道府県支部への調査を通じて明らかにする。国際的な研究成果に基づいて、とりわけ「政党の候補者リクルートメントと公認決定過程」に焦点をあて、郵送調査と政党関係者へのインタビュー調査を組み合わせ、政治参画に関する男女差、政党差、地方差はどのように見られるかを考察する。

2019 年は前年実施した国会議員アンケートの結果を国際学会で報告した。また、県連へのヒアリングを始めた。さらに、上智大学にて地方政治や県議会に関する研究会を数回開催した。(本報告書 19 頁参照)

科学研究費基盤研究 C(研究課題番号 19K12604)

ジェンダークオータの政治学:制度化と抵抗

【研究代表者】申琪榮 (IGS 准教授)

【期間】2019～2021 年度

【研究内容】

本研究は、議会のジェンダー公平な代表性を確保するために導入されたジェンダー・クオータ(女性候補者割当制)の効果と、その制度が女性の政治的的代表性に及ぼす影響を韓国の事例により分析するものである。1年目の 2019 年度は、候補者リクルートメント過程におけるジェンダー・クオータ制度の運用実態を明らかにするために、データ収集、聞き取り調査を実施し、制度運用状況を評価した。

研究成果は、東アジアの研究者らとパネルを組み European Conference on Politics and Gender (ECPG)にて報告した(2019 年 7 月アムステルダム)。11 月には内閣府の国際調査研究に参加する機会を得て、韓国における女性議員の参画状況とクオータ法について現地調査を行った。国会議員、中央選挙委員会、国会調査員、政党関係者、女性団体、専門家などにインタビューを行い、最新のデータを入手するとともにクオータ法、選挙法の運用について聞き取り調査を実施することができた。その詳しい内容は、内閣府の報告書にまとめた。

また、国際共同研究で実施した韓国の議員アンケートデータを分析し、これまで韓国のクオータ法が思ったほどの成果を出していない理由を、法律の側面と議員の認識の側面双方から分析した論文を韓国の学術雑誌に発表した(2019 年 12 月)。その他、2020 年 4 月に実施された韓国の総選挙に至るまでの、選挙法改正や候補者リクルート関連のデータ、「女性の党」の誕生などに関するデータを収集した。(本報告書 20 頁参照)

IGS 研究プロジェクト

「東アジアの越境的女性運動」研究

【研究担当】大橋史恵 (IGS 准教授)

【研究内容】

今日の女性運動は、路上や広場、公共交通機関、大学キャンパス、議場、ジャーナリズム、サイバー空間など、さまざまな場で実践され、課題解決に向けた国際的連帯とアクションを生み出している。本研究は東アジアにおけるそのような越境的女性運動の展開について考察するものである。具体的には(1)ILO「家事労働者のためのディーセント・ワークに関する条約」(第 189 号条約)に関連する労働運動、(2)反軍事化をめぐる女性たちの運動、(3)中国の女権主義者たちのトランスローカル/トランスナショナルな運動に目を向ける。(本報告書 21 頁参照)

IGS 研究プロジェクト

リベラル・フェミニズムの再検討

【研究担当】板井広明 (IGS 特任講師)

【研究内容】

本研究プロジェクトの目的は、ベンサムやウルストンクラフト、J.S.ミルといった第1波フェミニズムあるいはリベラル・フェミニズムの思想・運動を再検討することにある。リベラリズムの公私二元論を前提にしたリベラル・フェミニズムは乗り越えの対象でしかないという捉え方が一般的だが、リベラリズムにおいて、「公」に対する「私」の領域は単に個人的自由の空間であると放任されるのではなく、不正義が存在すれば介入が正当化される空間でもあった。本研究では、ベンサムの女性論に関する草稿研究と、J.S.ミルの The Subjection of Women, 1869 のテキスト読解と『女性の隷従』新訳の作業を進め、リベラル・フェミニズム再検討の機運を盛り上げることを狙う。(本報告書 22 頁参照)

科学研究費基盤研究 C(研究課題番号 19K01570)

18 世紀末ブリテンにおける女性論の諸相: 功利主義的フェミニズムの可能性

【研究代表者】板井広明 (IGS 特任講師)

【期間】2019～2021 年度

【研究内容】

本研究は特に J.ベンサム的女性論と家族論を中心に、18～19 世紀の功利主義フェミニズムの諸相を明らかにする。従来看過されがちであった功利主義哲学の論理とフェミニズム思想の関わりを明らかにするために、「最大多数の最大幸福」を標語に社会改革を構想したベンサムが、各人の幸福最大化のために、両性への平等な権利付与、女性に抑圧的な社会に存在する権力関係の改革、期限付き結婚制度の確立を主張するに至った思想形成過程を考察する。このようにしてベンサムの功利主義フェミニズムを『新ベンサム全集』の最新テキストや未公開の草稿から再構成し、19 世紀の多様なフェミニズムに対する功利主義の思想的インパクトを明らかにする。(本報告書 23 頁参照)

(Ⅱ) 生殖・身体とジェンダー

IGS 研究プロジェクト

生殖医療とジェンダー

【研究担当】仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【研究内容】

生殖医療は大きく①望まない妊娠や出産を回避するための医療技術(避妊・人工妊娠中絶)、②妊娠・出産を望みながら通常の生殖行為ではそれが叶わない者を支援するための医療技術(不妊治療、生殖補助技術)、③生まれてくる命を選別する医療技術(出生前診断・産み分けなど)の 3 つに分けることができる。生殖医療の進歩はめざましく、第三者の精子や卵子、代理出産を利用した生殖医療技術の是非について社会や専門家集団の間での検討が不十分なまま、一般社会での利用が広まりつつある。また生殖医療の問題は産む性である女性たちに焦点を当て議論されることが多いが、男性の存在にも目を向ける必要がある。そこで 2019 年は不妊治療や出生前検査に関連する問題を男性側の視点からも掘り下げ、さらに避妊や中絶をめぐる問題や性別二元制規範にも目を向け、プロジェクトをすすめた。(本報告書 26 頁参照)

IGS 研究プロジェクト

性に関する情報と実践—性教育に関する研究

【研究担当】仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)、

【研究内容】

世界的に子どもへの性教育は不可欠であるという考え方が浸透しつつある。国連が発表している *International Technical Guidance on Sexuality Education* でも、正確な性教育はリスクある性行動を減少させる効果があると述べられている。日本でも性教育の重要性が認識されるようになってきてはいるが、今なお、性教育の中で「性交」「避妊」「中絶」などを取り上げることに対して抵抗感を持つ政治家や専門家が存在し、それが子どもの性行動の現実在即した性教育の足かせともなっている。また性的マイノリティの人々の存在や状況、不妊の現実を性教育の中でとりあげているところもまだ少なく、とりあげても一部の情報にすぎない場合もある。これらは子どもたちの人生においても重要な情報であり、これからの性教育のあり方を考える上で大きな課題となっている。(本報告書 27 頁参照)

科学研究費基盤研究C（研究課題番号 18K00034）

諸外国の配偶子ドナーの匿名性と出生者の知る権利の対立への対処に関する研究

【研究代表者】仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【期間】2018～2020 年度

【研究内容】

日本の精子提供はこれまで匿名で実施されてきた。近年、卵子提供にも注目が集まる中、ドナーの匿名性の是非について議論される機会がこれまで以上に増えると予測される。本研究は国内での議論に向けて、出生者の出自を知る権利を法で保障する国について、法制定までにどのような議論があったか、および法施行後の状況を明らかにするものである。(本報告書 28 頁参照)

科学研究費基盤研究C（研究課題番号 16K12111）

AID で生まれた人の「出自を知る権利」を保障するための教材作成に関する研究

【研究代表者】清水清美 (城西国際大学教授)

【研究分担者】仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【期間】2016～2019 年度

【研究内容】

日本では提供精子による人工授精が 70 年以上も実施され、精子提供者は匿名を原則としてきた。しかし諸外国では、子の福祉を考慮し、ドナーの匿名性を廃止する動きが広がっている。本研究は精子提供の利用や精子ドナーになることを検討している人が、出生者の出自を知る権利の保障の重要性を理解できるような資料の作成を最終目的とする。(本報告書 29 頁参照)

公益財団法人トヨタ財団 2016 年度研究助成プログラム(B)個人研究助成

生殖補助技術で形成される家族についての研究

【研究担当】仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【期間】2017～2019 年度

【研究内容】

近年、日本でも、生殖補助医療がますます一般化し、技術の需要も技術での出生児数も年々増加している。本研究では特に、第三者が介入する生殖技術で形成された家族について、国内外の家族へのインタビューを通して、家族の成り立ちを子どもたちとどのように共有し、家族関係を築いているのかを探る。(本報告書 30 頁参照)

(Ⅲ) 経済・移動とジェンダー

IGS 研究プロジェクト

資本と身体ジェンダー分析: 資本機能の変化と『放逐』される人々

【研究担当】足立眞理子 (IGS 客員研究員)

【メンバー】大橋史恵 (IGS 准教授)、板井広明 (IGS 特任講師)

【研究内容】

本プロジェクト「資本と身体ジェンダー分析: 資本機能の変化と『放逐』される人々」は、グローバル金融危機以降の資本の中核機能の変化を分析する。サスキア・サッセンの「放逐 expulsions」概念に着目して、従来の身体断片化や排除／包摂の概念では把握不能な「放逐」の「常態化」をジェンダー分析の視点から行う。(本報告書 32 頁参照)

科学研究費基盤研究 B (研究課題番号 17H02247)

新興アジア諸国の BPO 産業の成長とジェンダー: インド・フィリピン・中国の国際比較

【研究代表者】堀芳枝(獨協大学教授)

【研究分担者】大橋史恵(IGS 准教授)、足立真理子(IGS 教授)、長田華子(茨城大学准教授)、
落合絵美(岐阜大学特任助教)、小松寛(千葉大学特任研究員)

【期間】2017～2019 年度

【研究内容】

本研究は 2000 年代に入ってフィリピン、インド、中国でサービス部門の国際分業として展開し始めているビジネス・プロセス・アウトソーシング(BPO)の国際資本移転の動向と女性の労働、社会変容についての国際比較をおこなう。最終的には新興アジアのサービス部門の国際分業論の構築をめざす。(本報告書 33 頁参照)

科学研究費基盤研究 B(研究課題番号 19H01578)

再生産領域の国際性別分業における日本の家事・ケア労働者の歴史的系譜と連帯

【研究代表者】定松文(恵泉女学園大学教授)

【研究分担者】小ヶ谷千穂(フェリス女学院大学教授)、大橋史恵(IGS 准教授)

平野恵子(IGS 特任リサーチフェロー)、伊藤るり(津田塾大学教授)、徐阿貴(福岡女子大学准教授)

【期間】2019～2021 年度

【研究内容】

本研究は、再生産労働の国際分業が進展する日本において、次の二点に焦点を当て実証的に検討する。第一に歴史的視点からの雇用主—派遣企業—労働者の非対称的な関係、第二に家事・ケア労働者が有する限定的社会関係資本から選択する行為や集合行為による、労働者を取り巻く制度の変容。(本報告書 34 頁参照)

科学研究費基盤研究 C (研究課題番号 19K12603)

香港における移住女性の再生産労働力配置:「グローバル・シティ」のジェンダー分析

【研究代表者】大橋史恵(IGS 准教授)

【期間】2019～2021 年度

【研究内容】

本研究は、香港社会において異なる移住女性による再生産労働力がどのように配置されてきたかを、中国人家事労働者と外国籍家事労働者およびその雇用主を対象としたオーラル・ヒストリーの聞き取りから明らかにするものである。香港が輸出志向工業化路線から東アジアの金融・貿易サービスの中枢を成す「グローバル・シティ」へと転換した時期は、外国籍の家事労働者の受け入れが拡大していくとともに、主に広東省に出自をもつ中国人女性の労働力配置に変化が生じた時期と重なる。1980 年代末から今日までの香港の社会経済構造の変動において、トランスナショナルにあるいはトランスローカルに移動して家事労働者になった女性たちはどのように受け入れられたのか。異なるケアの担い手たち(移住女性)と受け手たち(雇用主)の「ケアの記憶」を通じて香港の再生産領域の変化をとらえたい。

初年度にあたる 2019 年度は、香港における民主化運動の激化と重なり、「ケアの記憶」についての聞き取りは実現しなかった。しかしアーカイブでの調査を通じて新たな知見を獲得するに至り、その成果を 2020 年 2 月に刊行された『家事労働の国際社会学』所収の論文に部分的に反映させることができた。する。(本報告書 35 頁参照)

IGS 研究プロジェクト

送出し国から見た国際労働力移動のジェンダー分析

【研究担当】平野恵子 (IGS 特任リサーチフェロー)

【研究内容】

国際労働力移動は、グローバルな政治経済状況や受入国における移民政策のみならず、送出し国の政治、経済、文化といった種々の要因に規定される。本研究では、二つの事例研究から、送出し国からみた国際労働力移動を考える。具体的には、1) 墨米間の労働力移動、2) 2019 年インドネシア選挙(大統領選挙、総選挙)における海外雇用政策の争点化。(本報告書 36 頁参照)

科学研究費基盤研究 A(研究課題番号 19H00607)

移民受入れ国-送出し国の政策相互連関: 国際社会学からの比較研究

【研究代表者】小井土彰宏(一橋大学教授)

【研究分担者】伊藤るり(津田塾大学教授)、上林千恵子(法政大学教授)、鈴木江理子(国士舘大学教授)、塩原良和(慶應義塾大学教授)、宣元錫(大阪経済法科大学等研究員)、柄谷利恵子(関西大学教授)、定松文(恵泉女学園大学教授)、園部裕子(香川大学教授)、森千香子(同志社大学教授)、北川将之(神戸女学院大学教授)、毛利さとみ(恵羅さとみ)(成蹊大学研究員)、眞住優助(金沢大学講師)、堀井里子(国際教養大学助教)、平野恵子(IGS 特任リサーチフェロー)

【期間】2019～2021 年度

【研究内容】

本研究は、移民をめぐる諸問題を、受入れ国および送出し国における諸政策の動的連関が及ぼす影響から考察する。分担者は、インドネシアの海外雇用政策分析を担当し、2019 年度は、労働省など政策担当者に聞き取りを実施する。(本報告書 37 頁参照)

科学研究費基盤研究 C (研究課題番号 17K02067)

現代インドネシアにおける『移住・家事労働者』の変容

【研究代表者】平野恵子(IGS 研究協力員)

【期間】2017～2020 年度

【研究内容】

本研究は、インドネシアにおける「移住・家事労働者」の変容を、移民政策および国内家事労働者の派遣形態の変化から検討する。

本研究の 3 年目にあたる 2019 年度は、2 年目までに得られた知見を学術誌論文や書籍所収論文において発表するとともに、暫定的な調査知見を学会にて報告し今後の研究につなげるためのフィードバックを得た。また、本研究の調査課題のうち、①移住・家事労働者を「技能化」することの含意、②新中間層をターゲットとした新たな派遣型家事労働サービスについて、インタビュー調査および現地の観察を実施した。(本報告書 38 頁参照)

科学研究費基盤研究 C (研究課題番号 17K02051)

インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合

【研究代表者】中谷潤子(大阪産業大学准教授)

【研究分担者】平野恵子(IGS 特任リサーチフェロー)、北村由美(京都大学准教授)

【期間】2017～2019 年度

【研究内容】

本研究は、インドネシア人移住労働者の再統合について、帰還後のライフステージ構築の過程を、本人や家族、コミュニティメンバーへの聞き取り調査をもとに明らかにする。分担者(平野)は特に、ジャカルタ首都圏における家事労働者組合で、移住家事労働を経験する組合員に帰還後の職業選択につき聞き取りをおこない上記課題を明らかにした。

最終年度である 2019 年は、Academia Sinica(台北)において共同パネル報告を実施するとともに、3 年間の成果を報告書『インドネシア人移住労働者における帰還後のライフステージに向けた再統合』にまとめ刊行した。(本報告書 39 頁参照)

外国人特別招聘教授による研究プロジェクト

Maiko: Imagining Geisha Girlhood in Japan

【研究担当】ジャン・バーズレイ(Jan Bardsley、米・ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授)

【研究内容】

平成時代の日本における「舞妓らしさ」の研究。平成時代の舞妓イメージは、かつての人身売買や搾取という暗い影を拭き去り、「カワイイ」京都のマスコットキャラクターとなっている。「舞妓らしさ」は京都の若い女性の理想像として語られ、舞妓をめざす少女たちはその理想像を体現することが期待される。その一方で、京都の観光局や、花街、漫画作家たちは、それぞれに異なる「舞妓らしさ」像を提供している。本研究は、商品デザインや、漫画作品、ライトノベルなどに描かれる「舞妓らしさ」を読み解き、現代の舞妓に期待されているジェンダー役割について分析する。(本報告書 90 頁参照)

Democracy's Poster Girls: Beauty Queens and Fashion Models in Cold War Japan

【研究担当】ジャン・バーズレイ(Jan Bardsley、米・ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授)

【研究内容】

冷戦初期の日本において盛んに開催された、ファッションショー、ビューティーコンテスト、デザインコンクールなどは、国際的交流を推進する文化活動であると同時に、女性の解放や民主主義、自由といった、戦後の社会改革の政治理念を象徴するイベントでもあった。本研究は、米国の占領下の日本で、ファッションが西側イデオロギーの浸透に果たした役割について分析する。(本報告書 90 頁参照)

【資料】③協力研究者一覧

氏名・所属	協力事業*	参照
【海外】		
ジャン・バーズレイ (Jan Bardsley) ノースカロライナ大学チャペルヒル校・米	特別招聘教授 (シ) 哲学者と皇太子妃 (シ) 踊る中国 (セ) 冷戦初期の日本におけるファッションショー外交 『ジェンダー研究』編集委員	89 頁 47 頁 53 頁 56 頁 131 頁
ナエル・バンジー (Nael Bhanji) トレント大学・カナダ	(シ) トランスジェンダーが問うてきたこと (セ) トランスジェンダーが問うてきたこと	50 頁 83 頁
ジェニファー・ブロンラ (Jennifer Branlat) ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED) (連) INTPART プロジェクト	103 頁 114 頁
アン・ブルノン＝エルンスト (Anne Brunon-Ernst) パンテオン・アサス大学・仏	(セ) A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives	70 頁
ジュリア・ブロック (Julia C. Bullock) エモリー大学・米	(シ) 哲学者と皇太子妃	47 頁
チェ・ヒュンジョン (Hyeunjung CHOI) 済州平和研究院・韓	(セ) Shared Visions for Korea-Japan Relations	80 頁
ド・ジョンユン (Jong Yoon DOH) 済州平和研究院・韓	(セ) Shared Visions for Korea-Japan Relations	80 頁
ダイアン・エルソン (Diane Elson) エセックス大学・英	(セ) Gender and Development Revisited	62 頁
ハン・ドンギョン (Dong-Gyoon HAN) 済州平和研究院・韓	(セ) Shared Visions for Korea-Japan Relations	80 頁
ハン・インテク (Intaek HAN) 済州平和研究院・韓	(セ) Shared Visions for Korea-Japan Relations	80 頁
フランス・ローズ・ハートライン (France Rose Hartline) ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	(セ) Legal Gender Recognition & Messy Trans Experiences in Norway (INTPART) (連) INTPART プロジェクト	64 頁 114 頁
レスリー・ホガート (Lesley Hoggart) オープン大学・英	(セ) Exploring How Women's Contraceptive Choices Can Be Influenced by Their Views on Abortion	84 頁
グロ・クリステンセン (Guro Kristensen) ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED) (連) INTPART プロジェクト	103 頁 114 頁
日下部京子 (Kyoko Kusakabe) アジア工科大学院大学・タイ	(連) AIT ワークショップ	107 頁

氏名・所属	協力事業*	参照
ガブリエル・ラディカ (Gabrielle Radica) リール大学・仏	(セ) A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives	70 頁
プリシラ・リングローズ (Priscilla Ringrose) ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED) (連) INTPART プロジェクト	103 頁 114 頁
カレン・アン・シャイア (Karen Ann Shire) デュースブルグ・エッセン大学・独	『ジェンダー研究』編集委員	131 頁
オフェリ・スイミオン (Ophélie Siméon) ソルボンヌ・ヌーヴェル大学・仏	(セ) A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives	70 頁
アニ・ウィダヤニ・スチプト (Ani Widyani Soetjipto) インドネシア大学・インドネシア	(セ) Gender and Politics in Indonesia after 2019 Election	73 頁
ソン・ジョンウク (Jung Wook SON) 済州平和研究院・韓	(セ) Shared Visions for Korea-Japan Relations	80 頁
シリ・エイスレボ・ソレンセン (Siri Øyslebø Sørensen) ノルウェー科学技術大学・ノルウェー	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED) (連) INTPART プロジェクト	103 頁 114 頁
スーザン・ストライカー (Susan Stryker) イエール大学・米	(シ) トランスジェンダーが問うてきたこと (セ) トランスジェンダーが問うてきたこと	50 頁 83 頁
游鑑明 (ユウ・カンメイ) (Jianming Yu) 中央研究院近代史研究所・台湾	(シ) 踊る中国	53 頁
【国内】		
井谷聡子 (Satoko Itani) 関西大学	(シ) トランスジェンダーが問うてきたこと (セ) トランスジェンダーが問うてきたこと	50 頁 83 頁
江上幸子 (Sachiko Egami) 中国女性史研究会／フェリス女学院大学	(シ) 踊る中国	53 頁
大濱慶子 (Keiko Ohama) 神戸学院大学	(シ) 踊る中国	53 頁
重田園江 (Sonoe OMODA) 明治大学	(セ) A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives	70 頁
小浜正子 (Masako Obama) 日本大学	『ジェンダー研究』編集委員	131 頁
金井郁 (Kaoru Kanai) 埼玉大学	『ジェンダー研究』編集委員	131 頁
菅野 琴 (Koto KANNO) 関西学院大学／国立女性教育会館	(セ) 持続可能な社会をめざすエンパワメントの教育	68 頁

氏名・所属	協力事業*	参照
北村文 (Aya Kitamura) 津田塾大学	(シ) 哲学者と皇太子妃	47 頁
齋藤圭介 (Keisuke Saito) 岡山大学	(セ) 生殖医療技術と男性性	58 頁
清水晶子 (Akiko Shimizu) 東京大学	(シ) トランスジェンダーが問うてきたこと (セ) トランスジェンダーが問うてきたこと	50 頁 83 頁
菅野摂子 (Setsuko Sugano) 立教大学	(セ) 生殖医療技術と男性性	58 頁
関口佐紀 (Saki SEKIGUCHI) 早稲田大学・院	(セ) A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives	70 頁
中村雪子 (Yukiko Nakamura) 和光大学ほか	(セ) Gender and Development Revisited	62 頁
永見瑞木 (mizuki nagami) 大阪府立大学	(セ) コンドルセの政治社会像と女性への視点	78 頁
平石耕 (Ko HIRAISHI) 成蹊大学	(セ) J.S.ミルにおけるデモクラシーと女性参政権	60 頁
深貝保則 (Yasunori FUKAGAI) 横浜国立大学	(セ) A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives	70 頁
星野幸代 (Yukiyo Hoshino) 名古屋大学	(シ) 踊る中国	53 頁
前山加奈子 (Kanakano Maeyama) 中国女性史研究会/駿河台大学	(シ) 踊る中国	53 頁
三浦まり (Mari Miura) 上智大学	『ジェンダー研究』編集委員	131 頁
三牧聖子 (Seiko Mimaki) 高崎経済大学	(セ) Shared Visions for Korea-Japan Relations	80 頁
村田陽 (Minami MURATA) 同志社大学	(セ) J.S.ミルにおけるデモクラシーと女性参政権	60 頁
山尾忠弘 (Tadahiro YAMAOKA) 慶應義塾大学・院	(セ) J.S.ミルにおけるデモクラシーと女性参政権	60 頁
ゲイ・ローリー (Gaye Rowley) 早稲田大学	(シ) 哲学者と皇太子妃	47 頁
渡辺浩 (Hiroshi WATANABE) 東京大学	(セ) 日本における女らしさの表象	66 頁

氏名・所属	協力事業*	参照
【学内】		
佐々木泰子 (Yasuko Sasaki) グローバル女性リーダー育成研究機構	(セ) Shared Visions for Korea-Japan Relations	80 頁
小林誠 (Makoto Kobayashi) グローバルリーダーシップ研究所	(セ) Shared Visions for Korea-Japan Relations	80 頁
高桑晴子 (Haruko TAKAKUWA)	(セ) A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives	70 頁
天野知香 (Chika Amano) 基幹研究院文化科学系	『ジェンダー研究』編集委員	131 頁
水野勲 (Chika Amano) 基幹研究院人間科学系	『ジェンダー研究』編集委員	131 頁
森義仁 (Yoshihito Mori) 基幹研究院自然・応用科学系	『ジェンダー研究』編集委員	131 頁
倉光ミナ子 (Minako Kuramitsu) 基幹研究院人間科学系	『ジェンダー研究』編集委員	131 頁
石丸径一郎 (Keiichiro Ishimaru) 基幹研究院人間科学系	『ジェンダー研究』編集委員 (シ)トランスジェンダーが問うてきたこと (セ)トランスジェンダーが問うてきたこと (セ)性別二元制規範を考える	131 頁 50 頁 83 頁 76 頁
大木直子 (Naoko Oki) グローバルリーダーシップ研究所	(セ) Gender and Politics in Indonesia after 2019 Election	73 頁
佐野潤子 (Junko Sano) グローバルリーダーシップ研究所	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED) (連) INTPART プロジェクト	103 頁 114 頁
松田デレク (Derek Matsuda) 国際教育センター	(国) Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED) (連) INTPART プロジェクト	103 頁 114 頁
李亜姣(リー・ヤージャオ) (Yajiao Li) みがかずば研究員	(セ) Gender and Development Revisited	62 頁
本山央子 (Hisako Motoyama) お茶の水女子大学(院)	(セ) Shared Visions for Korea-Japan Relations	80 頁
長谷川渚紗 (Nagisa Hasegawa) お茶の水女子大学(院)	(セ) 性別二元制規範を考える	76 頁

* (シ)シンポジウム、(セ)セミナー・研究会、(国)国際共同研究プロジェクト、(連)国際ネットワーク

【資料】④国際シンポジウム・セミナー・研究会一覧

開催日	イベント詳細	参照
IGS 主催 国際シンポジウム		
5/19	<p>国際シンポジウム〔特別招聘教授プロジェクト〕</p> <p>哲学者と皇太子妃:冷戦期日本における自由と愛と民主主義</p> <p>The Philosopher and the Princess: Freedom, Love, and Democracy in Cold War Japan</p> <p>【コーディネーター】ジャン・バーズレイ(IGS 特別招聘教授/ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授)</p> <p>【司会】大橋史恵(IGS 准教授)</p> <p>【基調報告】ジャン・バーズレイ ジュリア・ブロック(エモリー大学准教授)</p> <p>【コメンテーター】北村文(津田塾大学講師) ゲイ・ローリー(早稲田大学教授)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【言語】日英(同時通訳)</p> <p>【参加者数】72 名</p>	47 頁
12/15	<p>国際シンポジウム</p> <p>トランスジェンダーが問うてきたこと:身体・人種・アイデンティティ</p> <p>Transgender Questions: Body, Race and Identity</p> <p>【総合司会】申琪榮(IGS 准教授)</p> <p>【挨拶】石井クツ昌子(お茶の水女子大学教授/IGS 所長)</p> <p>【基調講演】スーザン・ストライカー(イエール大学学長フェロー/女性・ジェンダー・セクシュアリティ研究招聘教授)</p> <p>【パネル司会】石丸径一郎(お茶の水女子大学准教授)</p> <p>【パネリスト】清水晶子(東京大学教授) 井谷聡子(関西大学准教授) ナエル・バンジー(トレント大学助教授)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【共催】東京大学清水晶子研究室、科研費 挑戦的萌芽研究「性的少数者の政治と多様な諸身体の変遷 および共存をめぐる現状分析と理論構築」</p> <p>【言語】日英(同時通訳)</p> <p>【参加者数】119 名</p>	50 頁
IGS 共催 国際シンポジウム		
6/22	<p>国際シンポジウム</p> <p>踊る中国:都市空間における身体とジェンダー</p> <p>舞動的中國:城市空間的的身體與性別</p> <p>【コーディネーター/司会】大橋史恵(IGS 准教授)</p> <p>【趣旨説明】前山加奈子(中国女性史研究会)</p> <p>【研究報告】游鑑明(中央研究院近代史研究所) 星野幸代(名古屋大学人文学研究科教授) 大濱慶子(神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部教授)</p> <p>【コメンテーター】ジャン・バーズレイ(IGS 特別招聘教授/ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授) 江上幸子(中国女性史研究会/フェリス女学院大学国際交流学部名誉教授)</p> <p>【共催】ジェンダー研究所</p> <p>【言語】日中(逐次通訳)</p> <p>【参加者数】67 名</p>	53 頁

開催日	イベント詳細	参照
IGS 主催 IGS セミナー		
7/10	〔特別招聘教授プロジェクト〕 Fashion Show Diplomacy in Early Cold War Japan : A Critical Feminist Perspective (冷戦初期の日本におけるファッションショー外交:フェミニスト視点からの批判的考察) 【講師】ジャン・バーズレイ(IGS 特別招聘教授/ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授) 【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】16名	56 頁
7/26	生殖領域シリーズ 生殖医療技術と男性性 【コーディネーター/司会】仙波由加里(IGS 特任リサーチフェロー) 【趣旨説明】仙波由加里 【研究報告】菅野摂子(立教大学社会福祉研究所特任研究員) 斎藤圭介(岡山大学准教授) 【主催】ジェンダー研究所 【参加者数】40名	58 頁
10/7	J.S.ミルにおけるデモクラシーと女性参政権 【司会】板井広明(IGS 特任講師) 【報告】山尾忠弘(慶應義塾大学・院) 【討論者】村田陽(同志社大学助教) 平石耕(成蹊大学教授) 【主催】ジェンダー研究所 【参加者数】10名	60 頁
10/22	Gender and Development Revisited : Dialogues with Diane Elson (「ジェンダーと開発」を問い直す:ダイアン・エルソンとの対話) 【司会】大橋史恵(IGS 准教授) 【講師】ダイアン・エルソン(エセックス大学名誉教授) 【討論者】李亜姣(お茶の水女子大学学みがかずば研究員) 中村雪子(和光大学等非常勤講師) 平野恵子(IGS 特任リサーチフェロー) 【主催】ジェンダー研究所 【協賛】日本フェミニスト経済学会(JAFFE) 【後援】経済理論学会問題別分科会「ジェンダー」 【協力】FFU(フェミニスト自由大★学) 【言語】英語 【参加者数】30名	62 頁
10/24	〔INTPART プロジェクト〕 Legal Gender Recognition & Messy Trans Experiences in Norway (ノルウェーの性別自己決定権法制とトランスジェンダーの経験の複雑性) 【講師】フランス・ローズ・ハートライン(ノルウェー科学技術大学博士後期課程) 【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】18名	64 頁

開催日	イベント詳細	参照
IGS 主催 IGS セミナー		
10/28	<p>日本における女らしさの表象</p> <p>【司会】板井広明 (IGS 特任講師)</p> <p>【報告】渡辺浩 (東京大学名誉教授)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【参加者数】54 名</p>	66 頁
12/11	<p>持続可能な社会をめざすエンパワメントの教育:ジェンダーの視点から</p> <p>【司会】板井広明 (IGS 特任講師)</p> <p>【講師】</p> <p>菅野琴 (元ユネスコ職員ネパール事務所代表、関西学院大学特別客員教授、国立女性教育会館客員研究員)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【参加者数】17 名</p>	68 頁
1/30	<p>A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives : Family, Society, and Gender (フランスの視点からの思想史ワークショップ:家族、社会、ジェンダー)</p> <p>【モデレーター】板井広明 (IGS 特任講師)</p> <p>深貝保則 (横浜国立大学教授)</p> <p>【報告者】ガブリエル・ラディカ (リール大学教授、横浜国立大学客員教授)</p> <p>アン・ブルノン＝エルンスト (バンテオン・アサス大学教授)</p> <p>オフェリ・スミオン (ソルボンヌ・ヌーヴェル大学准教授)</p> <p>【討論者】関口佐紀 (早稲田大学博士課程)</p> <p>重田園江 (明治大学教授)</p> <p>高桑晴子 (お茶の水女子大学教授)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【共催】科研費基盤 (C)「近代英米の法の支配伝統の再検討:わが国への示唆」(戒能通弘・同志社大学)、科研費基盤 (C)「18 世紀末ブリテンにおける女性論の諸相:功利主義的フェミニズムの可能性」(板井広明・お茶の水女子大学)</p> <p>【言語】英語</p> <p>【参加者数】21 名</p>	70 頁
1/30	<p>Gender and Politics in Indonesia after 2019 Election (インドネシアにおけるジェンダーと政治:2019 年総選挙分析)</p> <p>【講師】Dr. Ani Widayani Soetjipto (インドネシア大学准教授)</p> <p>【ディスカッサント】大木直子 (お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特任講師)</p> <p>【司会】平野恵子 (IGS 特任リサーチフェロー)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【言語】英語</p> <p>【参加者数】15 名</p>	73 頁
2/12	<p>生殖領域シリーズ</p> <p>映画『性別が、ない!』上映&パネルディスカッション</p> <p>性別二元制規範を考える</p> <p>【パネリスト】石丸径一郎 (お茶の水女子大学准教授)</p> <p>藤原和希 (label X 代表)</p> <p>長谷川渚紗 (お茶の水女子大学大学院博士課程人間文化創成科学研究科)</p> <p>【モデレーター】仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【参加者数】47 名</p>	76 頁

開催日	イベント詳細	参照
IGS 主催 IGS セミナー		
2/14	<p>コンドルセの政治社会像と女性への視点</p> <p>【司会】板井広明(IGS 特任講師)</p> <p>【報告者】永見瑞木(大阪府立大学講師)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【参加者数】10名</p>	78 頁
IGS 主催 IGS 研究会		
11/18	<p>Shared Visions for Korea-Japan Relations : Globalism, Peace, and Gender Issue (グローバル化と平和)</p> <p>【開会挨拶】佐々木泰子(お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構長)</p> <p>Session 1 Globalism and Peace</p> <p>【司会】小林誠(グローバルリーダーシップ研究所長)</p> <p>【報告】三牧聖子(高崎経済大学准教授)</p> <p>HAN Intaek (済州平和研究院研究員)</p> <p>【ディスカッサント】SON Jung Wook(済州平和研究院研究員)</p> <p>HAN Dong-Gyoon(済州平和研究院研究員)</p> <p>Session 2 Globalism and Gender Issues</p> <p>【司会】板井広明(IGS 特任講師)</p> <p>【報告】CHOI Hyeunjung(済州平和研究院研究員)</p> <p>本山央子(お茶の水女子大学ジェンダー学際研究専攻)</p> <p>【ディスカッサント】申琪榮(IGS 准教授)</p> <p>DOH Jong Yoon(済州平和研究院研究員)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所、韓国・済州平和研究院</p> <p>【言語】英語</p> <p>【参加者数】12名</p>	80 頁
12/16	<p>お茶大・東大院生合同セミナー</p> <p>トランスジェンダーが問うてきたこと: 身体・人種・アイデンティティ</p> <p>【ファシリテーター】申琪榮(IGS 准教授)</p> <p>【パネリスト】</p> <p>スーザン・ストライカー(イエール大学・学長フェロー/女性・ジェンダー・セクシュアリティ研究招聘教授)</p> <p>ナエル・バンジー(トレント大学助教授)</p> <p>清水晶子(東京大学教授)</p> <p>井谷聡子(関西大学准教授)</p> <p>石丸径一郎(お茶の水女子大学准教授)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【共催】東京大学清水晶子研究室、科研費 挑戦的萌芽研究「性的少数者の政治と多様な諸身体の連帯および共存をめぐる現状分析と理論構築」</p> <p>【使用言語】英語</p> <p>【参加者数】25名</p>	83 頁

開催日	イベント詳細	参照
IGS 主催 IGS セミナー		
1/24	<p>Exploring How Women's Contraceptive Choices Can Be Influenced by Their Views on Abortion</p> <p>【報告】レスリー・ホガート(オープン大学教授) 仙波由加里(IGS 特任リサーチフェロー)</p> <p>【コーディネーター】大橋史恵(ジェンダー研究所准教授)</p> <p>【主催】ジェンダー研究所</p> <p>【使用言語】英語</p> <p>【参加者数】5 名</p>	84 頁
後援シンポジウム		
7/13	<p>日本フェミニスト経済学会 2019 年大会</p> <p>東南アジアの経済成長とジェンダー: 女性の移動・労働・定住</p> <p>【共通論題座長】堀芳枝(獨協大学教授)</p> <p>【報告者】堀芳枝(獨協大学教授) 平野恵子(IGS 特任リサーチフェロー) 巢内尚子(ラバル大学) Nagase Agalyn Salah (Kafin)</p> <p>【討論者】足立真理子(IGS 客員研究員) 大橋史恵(IGS 准教授)</p> <p>【主催】日本フェミニスト経済学会</p> <p>【後援】ジェンダー研究所、大阪府立大学女性学研究センター</p> <p>【言語】日英(要約通訳)</p>	86 頁

【資料】⑤2019 年度新規収蔵図書・資料

・2019 年度、外部からの寄贈により以下の書籍が新規収蔵された。[寄贈者名『書名』(著者名)](敬称略)

伊藤るり『家事労働の国際社会学:ディーセント・ワークを求めて』(伊藤るり編著;定松文[ほか]著)／桜蔭会『白塔選集』(白塔短歌会)／京都大学出版会『一人っ子政策と中国社会』(小浜正子)／京都大学出版会『衣装と生きる女性たち:ミャオ族の物質文化と母娘関係』(佐藤若菜)／倉橋耕平『歪む社会:歴史修正主義の台頭と虚妄の愛国に抗う』(安田浩一、倉橋耕平)／仙波由加里『いまを生きるための倫理学』(盛永審一郎、松島哲久、小出泰士編)／仙波由加里『血のつながりを越えて:提供精子・提供卵子・養子でできた家族の物語』(仙波由加里)／鳥取近世女性史研究会『ある勤番侍と妻の書状:語られる生活・家族の絆』(鳥取近世女性史研究会編)／鳥取近世女性史研究会『ある若き儒者の書状:女性史の視点でよむ』(堀庄次郎、堀金之丞;鳥取近世女性史研究会編)／中山まき子『原ひろ子先生の業績一覧:1934-2019 その人生の軌跡』(中山まき子、藤原千賀、宮下佳子編)／堀江優子『わたしの戦後史:95 歳、大正生れ、草の根の女のオーラルヒストリー:戦争の「痛み」を知る世代が求め続けたもの』(谷たみ語り、堀江優子編著)

・2019 年度、寄贈、購入によりジェンダー研究所から以下の書籍が新規収蔵された。[['書名』(著者名)]

『A paradise built in hell: the extraordinary communities that arise in disaster』(Rebecca Solnit)／『Bad girls of the Arab world』(edited by Nadia Yaqub and Rula Quawas)／『Being young in super-aging Japan: formative events and cultural reactions』(edited by Patrick Heinrich and Christian Galan)／『Breakfast at Tiffany's』(Truman Capote)／『Cross-national public opinion about homosexuality: examining attitudes across the globe』(Amy Adamczyk)／『Dispossession: the performative in the political』(Judith Butler; conversations with Athena Athanas)／『Diva nation: female icons from Japanese cultural history』(edited by Laura Miller and Rebecca Copeland)／『Friendship and work culture of women managers in Japan: Tokyo after ten』(Swee-Lin Ho)／『Fugitive life: the queer politics of the prison state』(Stephen Dillon)／『How places make us: novel LBQ identities in four small cities』(Japonica Brown-Saracino)／『Introducing Japanese popular culture』(edited by Alisa Freedman and Toby Slade)／『Japanese fashion cultures: dress and gender in contemporary Japan』(Masafumi Monden)／『Marching dykes, liberated sluts, and concerned mothers: women transforming public space』(Elizabeth Currans)／『One hundred poets, one poem each: a treasury of classical Japanese verse』(translated with a commentary by Peter MacMillan)／『Parting ways: Jewishness and the critique of Zionism』(Judith Butler)／『Pathways of desire: the sexual migration of Mexican gay men』(Héctor Carrillo)／『Pride House Tokyo 2019 guidebook = プライドハウス東京 2019 ガイドブック』(プライドハウス東京)／『Resilient borders and cultural diversity: internationalism, brand nationalism, and multiculturalism in Japan』(Koichi Iwabuchi)／『Sōseki: modern Japan's greatest novelist』(John Nathan)／『The gang's all queer: the lives of gay gang members』(Vanessa R. Panfil)／『The Palgrave handbook of intersectionality in public policy』(Olena Hankivsky, Julia S. Jordan-Zachery, editors)／『The Penguin book of Japanese short stories』(introduced by Haruki Murakami; edited and with n)／『The queer intersectional in contemporary Germany: essays on racism, capitalism and sexual politics』(Christopher Sweetapple, ed.; with contributions)／『The question of gender: Joan W. Scott's critical feminism』(edited by Judith Butler and Elizabeth Weed)／『The sportsworld of the Hanshin Tigers: professional baseball in modern Japan』(William W. Kelly)／

『Who sings the nation-state?: language, politics, belonging』(Judith Butler, Gayatri Chakravorty Spivak) / 『82 年生まれ、キム・ジョン』(チョ・ナムジュ著; 斎藤真理子訳) / 『アメリカの社会変革: 人種・移民・ジェンダー・LGBT』(ホーン川嶋瑤子) / 『アンダー、サンダー、テンダー』(チョン・セララン著; 吉川風訳) / 『イヴとアダムをこえて: 女性と人権を考える』(イヴとアダムをこえて編集委員会編) / 『今、何かを表そうとしている 10 人の日本と韓国の若手対談』(西川美和 [ほか] 著; 桑畑優香訳) / 『男が痴漢になる理由』(斎藤章佳) / 『男の絆の比較文化史: 桜と少年』(佐伯順子) / 『男も女もみんなフェミニストでなきゃ』(チママンダ・ソゴズィ・アディーチェ著; くぼたのぞみ訳) / 『女たちの精神史: 明治から昭和の時代』(伊藤由希子) / 『女も男もフィールドへ』(椎野若菜、的場澄人編) / 『概説ジェンダーと法: 人権論の視点から学ぶ』(辻村みよ子著) / 『かつこうの親もずの子ども』(柳月美智子) / 『悲しくてかついい人』(イラン著; 呉永雅訳) / 『彼女は頭が悪いから』(姫野カオルコ) / 『韓国「周辺部」労働者の利害代表: 女性の「独自組織」と社会的連携を中心に』(金美珍) / 『教科書にみる世界の性教育』(橋本紀子、池谷壽夫、田代美江子編著) / 『くららと言葉』(知花くらら) / 『ゲイカップルのワークライフバランス: 男性同性愛者のパートナー関係・親密性・生活』(神谷悠介) / 『現代エスノグラフィー: 新しいフィールドワークの理論と実践』(藤田結子、北村文) / 『恋の相手は女の子』(室井舞花) / 『国家がなぜ家族に干渉するのか: 法案・政策の背後にあるもの』(本田由紀、伊藤公雄編著) / 『国際セクシュアリティ教育ガイダンス: 教育・福祉・医療・保健現場で活かすために』(ユネスコ編; 浅井春夫 [ほか] 訳) / 『侍女の物語』(マーガレット・アトウッド著; 斎藤英治訳) / 『質的研究のピットフォール: 陥らないために』(抜け出するために / 萱間真美) / 『質的社会調査の方法: 他者の合理性の理解社会学 = Qualitative research methodology』(岸政彦、石岡丈昇、丸山里美) / 『支配と抵抗の映像文化: 西洋中心主義と他者を考える』(エラ・ショハット、ロバート・スタム著; 内田(蓼沼)理絵子、片岡恵美訳) / 『しゃべり尽くそう! 私たちの新フェミニズム』(望月衣塑子 [ほか]) / 『主婦パートタイマーの処遇格差はなぜ再生産されるのか: スーパーマーケット産業のジェンダー分析』(金英) / 『ジェンダー教育の未来を拓く』(愛知教育大学男女共同参画委員会編) / 『ジェンダー六法』(山下泰子 [ほか] 編集) / 『ショウコの微笑』(チェ・ウニョン著; 牧野美加、横本麻矢、小林由紀訳) / 『シングルウーマン白書: 彼女たちの居場所はどこ?』(ツラ・ゴードン著; 熊谷滋子訳) / 『シングル単位の社会論: ジェンダー・フリーな社会へ』(伊田広行) / 『新・社会調査へのアプローチ: 論理と方法』(大谷信介 [ほか] 編著) / 『新宿二丁目の文化人類学: ゲイ・コミュニティから都市をまなざす』(砂川秀樹) / 『聖なる芸術 (アール・サクレ): 20 世紀前半フランスにおける宗教芸術運動と女性芸術家』(味岡京子) / 『西洋美術: 作家・表象・研究--ジェンダー論の視座から』(鈴木杜幾子編著; 河本真理 [ほか] 著) / 『セクシュアルマイノリティをめぐる学校教育と支援: エンパワメントにつながるネットワークの構築にむけて』(加藤慶、渡辺大輔編著; 青木真実 [ほか] 著) / 『戦争と性暴力の比較史へ向けて』(上野千鶴子、蘭信三、平井和子編; 山下英愛 [ほか執筆]) / 『そして「彼」は「彼女」になった: 安富教授と困った仲間たち』(細川貂々) / 『台湾におけるジェンダークォータ』(黄長玲) / 『たてがみを捨てたライオンたち』(白岩玄) / 『#黙らない女たち: インターネット上のヘイトスピーチ・複合差別と裁判で闘う』(李信恵、上瀧浩子) / 『誰でもない』(ファン・ジョンウン著; 斎藤真理子訳) / 『誰も排除しないスポーツ環境づくりのためのハンドブック: sports for everyone』(テキスト虹色ダイバーシティ) / 『地球星人』(村田沙耶香) / 『鶴見俊輔伝』(黒川創) / 『同性婚: 私たち弁護士夫婦 (ふうふ) です』(南和行) / 『同性パートナーシップ制度: 世界の動向・日本の自治体における導入の実際と展望』(棚村政行、中川重徳編著) / 『特集セクシュアル・マイノリティ(LGBT)への理解と支援』(精神療法第 42 巻第 1 号) / 『日本を捨てた男たち: フィリピンに生きる「困窮邦人」』(水谷竹秀) / 『ネットと愛国』(安田浩一) / 『「買春に対する男性意識調査」報告書』(男性と買春を考える会)

／『ハタチまでに知っておきたい性のこと』(橋本紀子、田代美江子、関口久志編)／『発想の転換:生協--暮らし・仕事・コミュニティ』(高橋晴雄編著)／『パワー』(ナオミ・オルダーマン著;安原和見訳)／『ビアン婚:私が女性と、結婚式を挙げるまで』(一ノ瀬文香)／『百年の女:『婦人公論』が見た大正、昭和、平成』(酒井順子)／『フィールドワーク:書を持って街へ出よう』(佐藤郁哉)／『フィールドワークの技法:問いを育てる、仮説をきたえる』(佐藤郁哉)／『フィフティ・ピープル』(チョン・セラ著;斎藤真理子訳)／『フェイクと憎悪:歪むメディアと民主主義』(永田浩三編著)／『フェミニスト・ファイト・クラブ:職場の「女性差別」サバイバルマニュアル』(ジェシカ・ベネット著;岩田佳代子訳)／『舞台の上のジャポニズム:演じられた幻想の〈日本女性〉』(馬淵明子)／『ふたりで安心して最後まで暮らすための本:同性パートナーとのライフプランと法的書面』(永易至文)／『ヘイト・クライムと植民地主義:反差別と自己決定権のために』(木村朗、前田朗共編;前田朗 [ほか] 執筆)／『「ほとんどない」ことにされている側から見た社会の話を。』(小川たまか)／『微笑みの国の工場:タイで働くということ』(平井京之介)／『マリアン・アンダーソン』(コスティ・ヴェハーネン[著];石坂廬訳)／『万引き依存症』(斉藤章佳)／『みんなのための LGBTI 人権宣言:人は生まれながらにして自由で平等』(国連人権高等弁務官事務所著;山下梓訳)／『娘について』(キム・ヘジン著;古川綾子訳)／『ムスリム女性に救援は必要か』(ライラ・アブー=ルゴド著;鳥山純子、嶺崎寛子訳)／『村から工場へ:東南アジア女性の近代化経験』(平井京之介)／『優生保護法が犯した罪:子どもをもつことを奪われた人々の証言』(優生手術に対する謝罪を求める会編)／『揺らぐ男性のジェンダー意識:仕事・家族・介護』(目黒依子、矢澤澄子、岡本英雄編;江原由美子 [ほか])／『幼児の性自認:幼稚園児はどうやって性別に出会うのか』(大滝世津子)／『リオとタケル』(中村安希)／『ルポ同性カップルの子どもたち:アメリカ「ゲイブーム」を追う』(杉山麻里子)／『歴史と国家:19 世紀日本のナショナル・アイデンティティと学問』(マーガレット・メール著;千葉功、松沢裕作訳者代表)／『労働運動を切り拓く:女性たちによる闘いの軌跡』(浅倉むつ子 [ほか] 編著)／『わたしからフェミニズム:日本女性学研究会 20 周年記念誌:『Voice of women』selections』(日本女性学研究会「プロジェクト 20」編)／『私たちにはことばが必要だ:フェミニストは黙らない』(イ・ミンギョン著;すんみ、小山内園子訳)

【資料】⑥史料電子化プロジェクト：電子化イベント一覧

女性文化資料館(1975-1985)/女性文化研究センター(1986-1995)イベント一覧				
年度	活動区分	開催日	イベントタイトル	登壇者
1977 (S52)	講演会	1977/9/22	湯浅年子先生講演会	湯浅年子
	シンポジウム	1978/1/14	シンポジウム	
	研究会	1978/2/8	山川菊栄と女性解放思想(木下 研究会)	
	研究会	1978/3/6	社会学における家族	
1978 (S53)	研究会	1978/6/6	女性史研究会 欧米の女性論	
	研究会	1978/7/27	女性史研究会 欧米の女性論	
1979 (S54)	研究会	1979/5/24	女性の教育と女性問題	
	研究会	1979/10/4	アメリカ婦人労働の法的諸問題	
	シンポジウム	1980/1/26	総合科目「婦人問題」に関するシンポジウム	
	研究会	1980/2/12	中山みきの思想と歩み—陽気づくめの世界をめざして 50年—	吉原敬子
1980 (S55)		1980/3/1	杉田和子、小島栄子、岩本のり子 於: 中村屋	
	研究会	1980/4/1	平安時代の相続制と女子相続権—『平安遺文』文書を中心として—	服藤早苗
	研究会	1980/4/23	[マーガレット・ミードの女性研究Ⅰ]	村松弘子ほか
	研究会	1980/5/29	[マーガレット・ミードの女性研究Ⅱ]	田中和子ほか
	研究会	1980/7/3	インドにおける女性の政治的役割	Chandra Mudaliar
	研究会	1980/10/18	[コペンハーゲン婦人会議及び婦人差別撤廃条約について]【婦人問題懇話会 講演会】	船橋邦子ほか
	研究会	1980/10/20	性役割とセクシズム	小林啓子
	研究会	1980/11/5	Feminist Literary Criticism からみた『砂の女』	Chigusa Kimura-Steven
	研究会	1980/12/25	目黒依子『女役割』について	田中和子ほか
1981 (S56)	研究会	1981/2/12	アメリカの女性史	金子幸子ほか
	研究会	1981/3/27	フランス社会史の動向と女性史	小島智恵
	研究会	1981/5/27	人類学者のみた個人的アメリカ女性史	Frederica de Laguna
	研究会	1981/5/29	Role's of Women's College	Frederica de Laguna
	研究会	1981/6/12	『性の署名』について(1)	内藤和美ほか
	研究会	1981/7/4	『性の署名』について(2)	平川和子
	研究会	1981/7/12	高群逸枝の婚姻・家族形態研究の意義について	関口裕子
	研究会	1981/9/9	カナダの女性学について	Patricia Morley ほか
	研究会	1981/10/16	家族・親族理論研究動向	田中真砂子
	研究会	1981/11/25	兼業農家女性の就労形態の変容—長野県諏訪地方の場合—	久保桂子
1982	研究会	1981/12/15	オーストラリアと日本の婦人運動／ニュージーランドの女性の地位について	Romanovsky Ulrike ほか
	研究会	1982/1/27	千葉県における廃娼運動—国防婦人会との関連において—	船橋邦子
	研究会	1982/3/24	近現代日本の社会教育と婦人団体	木下 ユキエ
1982	研究会	1982/4/23	女子大学の存在意義を考える—アメリカ・フランス・インド等の各国を見て—	広中和歌子

(S57)	研究会	1982/5/22	女性学研究会 井上輝子、目黒依子		
	研究会	1982/6/4	近世における女性と家族	林玲子ほか	
	研究会	1982/10/22	平安時代の養子制度について—日本家族の特質をテーマに—	William McCullough ほか	
	研究会	1982/11/24	バングラディッシュの女性について	武藤敦子	
	研究会	1982/12/13	Consort, mother, beloved, "Vamp"; the symbolic depiction of womanhood in Indian calendar art	Patricia Uberoi ほか	
	研究会	1983/1/24	出産の社会史—家族の近代化に関連して—	落合恵美子	
	研究会	1983/2/15	韓国の女性について	鄭金子ほか	
	研究会	1983/3/22	『巫女の文化』について—古代女性史の見直しのために—	倉塚肇子ほか	
1983	研究会	1983/5/30	ガブリエラ・ミストラルと『女性読本』について	田村さと子	
(S58)	研究会	1983/6/30	Japanese-German Marriage in Japan: a tentative approach	Irene Hardach-Pinke	
	研究会	1983/7/29	『性の深層』をめぐって—現代西ドイツの女性運動との関連で—	大沢三枝子	
	研究会	1983/9/26	『妻と夫の社会史』について	山本郁子ほか	
	研究会	1983/11/1	女性の側からジェンダーを考える	若井文恵ほか	
	研究会	1983/11/21	Intellectual Differences between Woman and Man "Inherited or Acquired?"	Virginia Mann ほか	
	研究会	1983/12/15	機械女工たちの近代	古庄正	
	研究会	1984/2/22	『婦女新聞』の出版	石崎昇子ほか	
	研究会	1983/3/13	フィリップ・アリエス研究—子ども・教育・女性—	波多野完治ほか	
1984	研究会	1984/4/24	日本の離婚調停に関する研究	Taimie Bryant	
(S59)	研究会	1984/5/15	『更級日記』作者の宗教的コンプレックス	高木きよ子	
	講演会	1984/5/31	お茶の水女子大学百年史刊行記念講演会	林太郎ほか	
	研究会	1984/6/20	キリスト教文化と女性	杉田弘子	
	研究会	1984/7/6	The Function of Libraries, Women' Centers, and "Women's Studies" in doing Feminist Research	Helen Wheeler ほか	
	研究会	1984/10/23	『私生子』概念の発生と消長—明治期を中心とする法制・歴史と実際の扱い—	田中弘子	
	研究会	1984/11/20	Woman and Nature	Susan Griffin ほか	
	研究会	1984/12/11	中国女性史研究—小野和子『中国女性史』を読んで—	加藤直子	
	研究会	1985/2/25	樋口一葉の文学—『十三夜』と『人形の家』の比較を中心に—	フランシスカ・ファンチカ	
	研究会	1985/3/14	近世関東農村における女性労働者の存在形態—年季・日雇奉公人の分析から—	青木道子	
1985	研究会	1985/4/26	ユートピアと性	倉塚平	
(S60)	研究会	1985/5/29	西欧近代の結婚観—キルケゴールをめぐって—	野村明代	
	研究会	1985/6/12	清代において模範とされている女性について	Susan Mann	
	研究会	1985/6/13	食事が子供の身体と心に与えるもの		
	研究会	1985/7/4	韓国女性の政治的、社会的地位	白京男	
			1985/10/5	第三世界の女性たちと私たち—ナイロビ報告(日本婦人問題懇話会)	
	研究会	1985/10/28	『源氏物語』にみる婚姻と居住形態と相続—光源氏と紫の上と明石君をめぐる—視角—	木下ユキエ	
	研究会	1985/11/15	主婦とテレビ	香取淳子	
	シンポジウム	1985/11/27	産むことを考える	加藤シヅエほか	
	研究会	1985/12/18	イタリア女性解放思想の歴史と今日的な段階—19世紀末から現在に至る主要な事項—	Argnani Fausta	

	研究会	1986/1/16	スイスにおける女性史研究—論文集『女性』と『イティネラ』にみる女性史家の研究動向—	佐藤るみ子
	研究会	1986/3/3	「円地文子論—"自然な女"の周辺—」	宮内淳子
1986	研究会	1986/4/25	フランス現代女性思想の流れ—ボーヴォワール・クリスティヴァ・イリガライ	棚沢直子
(S61)	研究会	1986/6/24	日本文化における『悪女』	Valerie・L・Durham
	研究会	1986/10/3	航空史における女性の役割—ドイツ女性スポーツ史の視角から	Gertrud Pfister
	研究会	1986/11/20	韓国の家族について	徐炳淑
	研究会	1986/12/8	バングラディッシュの女性—女性政策の視点から—	Jowshan Ara Rahman (ほか)
	研究会	1987/1/14	中東世界の女性—イスラームの原理と実像	黒田美代子
	研究会	1987/3/3	マレーシアの女性	Goh Beng Lan
1987	研究会	1987/4/23	公民の妻/青年団における女子活動の設立	渡辺洋子(ほか)
(S62)	研究会	1987/5/15	Impact of Economics & Technological Change on Women	Tamara・Hareven
	研究会	1987/6/24	円地文子の描いた女性像	アイリーン・マイカルス・アダチ
	研究会	1987/7/14	家計構造の長期的変容	田窪純子
	研究会	1987/8/25	舞踊と語り……祖母の語りとその姿	江川まゆみ
	研究会	1987/10/26	ラテン・アメリカの女性像	三田千代子
	研究会	1987/11/25	和泉式部と仏教	小野美智子
	研究会	1987/12/16	タイ社会における女性の役割	小野沢・ニッタヤー
	研究会	1988/2/10	日本における転勤の問題とデュアル・キャリア・ファミリーについて	青木由紀
	研究会	1988/3/10	新しい家庭科をめざして	西谷洋子
	研究会	1988/3/10	家庭科における消費者教育	小関禮子
1988	研究会	1988/4/11	Income Generation of Women in Rural Bangladesh	Kohinoor Begum
(S63)	研究会	1988/5/26	South Asian Women: Challenges & Prospects	Urmila Phadnis
	研究会	1988/6/22	Some Implications of Women's Status in China	Beverly Y. B. Hong
	研究会	1988/7/8	性役割意識に関連する韓国人の価値観	金炳端
	研究会	1988/9/7	こどもの虐待と放置—小児科の全国調査から—	内藤和美
	研究会	1988/11/25	フェミニスト研究の軌跡—Stanley & Wise の『フェミニズム社会科学に向かって』が提起するもの—	矢野和江
	研究会	1989/2/21	アジアにおける女性と仕事	Noeleen Heyzer
	研究会	1989/3/7	日本のフェミニストの意識と alternative な生活スタイル	ゴー・ベン＝ラン
1989	研究会	1989/4/5	男女平等教育の実践に向けて	Peggy McIntosh
(H1)	研究会	1989/4/14	Education of Scientist who Happen to Be Women	Emily L. Wic
	研究会	1989/6/1	鎌倉期の乳父について—その存在形態と乳母との関連	秋山貴代子
	研究会	1989/6/12	Modernisation en Iran et Le Changement Socio-cultural de Role de la Femme	Nasrin F. Hakami
	研究会	1989/7/17	Problems of Homeless Children in India	Rajani Paranjipe
	合評会	1989/9/11	原ひろ子著『ヘアー・インディアンとその世界』について	田中真砂子
	研究会	1989/10/4	スペイン内戦下の女性たち	秋山充子
	研究会	1989/11/17	Women and / in Media	Ann Simonton
	シンポジウム	1989/12/13	お茶の水女子大学留学生懇談会	

	シンポジウム	1989/11/29,12/20,1990/3/19	特定研究「女性のライフコースの多様化と女子大学の役割」	Peggy McIntosh
1990 (H2)	シンポジウム	1990/4/23,24	『母性』をめぐる日独シンポジウム	館かゝおるほか
	研究会	1990/5/18	Systematic Planning for Women's in Development and Activities	Barbara Knudson
	研究会	1990/6/14	マレー農村社会における性役割—東南アジアの伝統とイスラム規範のはざまにて	花見槇子
	研究会	1990/6/26	Women's Mothering and Working Roles in Japan and the United States	Brenda Bankart
	研究会	1990/9/25	中央ユーラシア遊牧民の歴史にみる女性像	宮脇淳子
	研究会	1990/10/23	福沢諭吉の女性論	杉原名穂子
	研究会	1990/11/22	日本近代女性の自伝を読む	Ronald P. Loftus
	研究会	1990/12/5	精神的母性	Elisabeth Gössmann
	研究会	1991/3/13	女性の自然科学研究者の進路決定要因の研究について	ビヴァリー・ゲッツイ
1991 (H3)	研究会	1991/5/29	大正時代の『令女会』の歌曲—女学生の歌唱と女学生向け創作歌曲の一考察	坂本麻実子
	研究会	1991/6/10	An Anthropological Study of Gender Science in Japan & U.S.	Sharon Traweek
	研究会	1991/6/18	To a Safer Place	Dane Raphael
	研究会	1991/10/4	Woman's Movement in Comparative Perspective	Ilse Lenz
	研究会	1991/10/9	Women of the Tlingit Society in Historical Perspective	Frederica de Laguna
	研究会	1991/10/31	Confusionism and Modern Chinese Women's Family Life	黄育馥
	研究会	1991/11/15	フェミニズムの方法としてのメモリーワーク	Frigga Haug ほか
	研究会	1991/11/19	クリスティヴァ『女の時間』を読む	棚沢直子
	研究会	1991/12/19	The Situation of the Swedish Women Today	Malin Ronnblom
	研究会	1992/1/30	自治体における女性学	栗国千恵子
	研究会	1992/2/12	中国の少数民族における女性	劉耀荃
	研究会	1992/2/20	アメリカ女性学の現段階: 女性学の理論家と県空者養成システム	三宅義子
	研究会	1992/3/13	『女性と労働』日独シンポジウム	
1992 (H4)	研究会	1992/4/15	Women's Studies in Canada	Naomi Black
	研究会	1992/4/20	Sexuality and Reproduction in Women's Utopian Dystopian Literature	Blaine Martin
	研究会	1992/6/19	湯浅年子博士資料的研究の歩み	松田久子
	研究会	1992/6/22	ジェーン・アダムスの思想と行動	米澤正雄
	研究会	1992/7/20	女性と開発をめぐる諸問題	村松安子
	研究会	1992/10/26	沖繩における女性の就労と性役割分業観	国吉和子
	講座	1992/11/21,28,12/5	次世代育成能力を考える	原ひろ子ほか
研究会	1993/1/28	南インド・ナガラッターールにおける親族・婚姻及び女性	西村祐子	
1993 (H5)	研究会	1993/5/18	中国における職業分化に伴う女性の価値観と行為方式の変化について	沙蓮香
	研究会	1993/6/24	女性と表彰—「模範嫁」表彰の聞き取り調査をめぐって—	熊澤知子
	研究会	1993/7/16	ベルリンの老人ホームとケア付き集合住宅	大澤真理
	研究会	1993/9/22	女性の自己表現と文学—野上彌生子におけるフェミニズムと形式—	藤田和美
研究会	1993/10/15	—政治学者のみたジェンダー研究—オリエンタリズムとの関連—	石田雄	

	特定研究懇談会	1993/11/13	Women in Higher Education—A case of the University of California USA—	Dr.Maresi Nerad
	研究会	1993/11/14	変容する男性社会—労働、ジェンダーの日独比較	高島道枝ほか
	研究会	1993/12/3	Gender,Justice and Therapy: Can One Be a Feminist and Practise Family Therapy?	Jan McDowell
	シンポジウム	1993/12/14,15	女性とメディア	
	シンポジウム	1994/1/20	特定研究「ライフコースの多様化の時代における大学教育と女性」	
1994 (H6)	研究会/シンポ	1994/4/7	エコロジーとフェミニズムを考える	Maria Mies ほか
	研究会	1994/6/1	オーストラリア女性史研究—女性史からフェミニスト史へ	Vera Mackie
	研究会	1994/7/27	いけ花と日本女性: 知の発達・地から・ジェンダー	飛田尚弥
	研究会	1994/8/29	Feminist Studies and Qualitative Empirical Methods: the Case of Sex Tourism and Traffic in Women	Ilse Lenz
	研究会	1994/9/27	Internationalization and Gender Relations: Theoretical Approaches	Ilse Lenz
	研究会	1994/10/31	家族法改正をめぐる文献とその論点	海妻径子
	シンポジウム	1994/11/2	学内共同教育研究プロジェクト・大学における女性学及び女性学研究センターの役割について	
	研究会	1995/1/27	How to combine Parenthood and Work?—Policies on Gender in Sweden—	Rita Liljestrum
	研究会	1995/2/21	Current Trends in Women's Studies in India: Gender,Development and Empowerment/	Malavika Karlekar ほか
	研究会	1995/3/1	Women, Education, and Development in Bangladesh	Saleha Begum
1995 (H7)	研究会	1995/4/13	日本の女性国会議員—その形成と構造	大海篤子
	研究会	1995/5/12	姉さん女房の社会学	Ursula Richter
	研究会	1995/6/16	女性と政治	Elic Plutzer
	研究会	1995/7/3	遺伝子とジェンダー	Joan Hideko Fujimura
	研究会	1995/9/18	アメリカのフェミニスト法理論の現在	Frances Olsen
	研究会	1995/10/13	社会主義フェミニズムの観点から見る『雁』	玉枝 Prindle
	研究会	1995/11/24	エコロジーとフェミニズム	山本良一
	シンポジウム	1995/12/2	湯浅年子メモリアルカンファレンス—エレヌ・ランジュヴァン・ジョリオをむかえて	Hélène Langevin-Joliot
	研究会	1995/12/19	The place of women in Egyptian Society	Samia Khedr Saleh
	研究会	1996/2/14	ネパールにおける Management と WID の視点	福土恵理香
	研究会/シンポ	1996/3/19	日本の学問研究とジェンダー	館かおる

【資料】⑦国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則

(平成 27 年 3 月 25 日制定)

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構規則第4条第2項の規定に基づき、国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所(以下「研究所」という。)に関し必要な事項を定める。

(目的)

第2条 研究所は、グローバル女性リーダー育成研究機構に附属する研究所として、ジェンダーに関する総合的、国際的な研究及び調査を行うとともに、ジェンダー研究者の育成に資することを目的とする。

(研究及び業務)

第3条 研究所は、前条の目的を達成するため、次に掲げる研究及び業務を行う。

- (1) ジェンダーに関する国際的研究及び調査
- (2) ジェンダー研究に関する教育研修
- (3) ジェンダー研究に関する文献・資料の収集および整理
- (4) ジェンダー研究に関する情報の提供
- (5) その他前条の目的を達成するために必要な業務

(組織)

第4条 研究所に、次に掲げる職員を置く。

- (1) 研究所長
- (2) 教員
- (3) 特別招聘教授
- (4) 研究員
- (5) その他学長が必要と認めた職員

2 研究所に、次に掲げる職員を置くことができる。

- (1) 特任教員
- (2) 客員研究員
- (3) 研究協力員

(研究所長)

第5条 研究所長は、基幹研究院人文科学系、人間科学系及び自然科学系の系会議構成員である教授のうちから学長が任命する。

2 研究所長は、研究所の業務を掌理する。

3 研究所長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

4 研究所長が辞任を申し出たとき、又は欠員となったときの後任の者の任期は、前任者の残任期間とする。

(研究員)

第6条 研究員は、第3条に掲げる研究及び業務に従事する。

2 研究員は、基幹研究院に所属する教員のうちから、学長が任命する。

3 研究員の任期は2年とし、その終期が研究員となる日の属する年度の翌年度の末日を超えることとなる場合は、翌年度の末日までとする。ただし、再任を妨げない。

(客員研究員)

第7条 客員研究員は、第3条に掲げる研究及び業務に参画する。

2 客員研究員は、本学専任の教員以外の者を、学長が委嘱する。

3 客員研究員の任期は1年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

(研究協力員)

第8条 研究協力員は、第3条に掲げる研究及び業務に協力する。

2 研究協力員は、本学専任の教員以外の者を、研究所長が委嘱する。

3 研究協力員の任期は1年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

(運営会議)

第9条 研究所に、研究所の運営並びに研究及び業務に関する事項を審議するため、ジェンダー研究所運営会議(以下「運営会議」という。)を置く。

2 運営会議は、次に掲げる者をもって組織する。

(1) 研究所長

(2) 第4条第1項第2号に掲げる教員

(3) 第4条第1項第3号に掲げる特別招聘教授

(4) 第4条第1項第4号に掲げる研究員

(5) その他グローバル女性リーダー育成研究機構長が必要と認めた者

3 運営会議の議長は研究所長をもって充て、議長は運営会議を主宰する。

4 運営会議の構成員は、第2条の目的を達成する上で必要な事項について、運営会議での審議を求めることができる。

5 研究所長が必要と認めたときは、構成員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

6 本条に定めるほか、運営会議に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第10条 研究所の事務は、企画戦略課が行う。

(雑則)

第11条 この規則に定めるもののほか、研究所に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

1 この規則は、平成27年4月1日から施行する。

2 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究センター規則は、廃止する。

【資料】⑧国立大学法人お茶の水女子大学特別招聘教授に関する規則

(平成 27 年 3 月 25 日制定)

(趣旨)

第 1 条 この規則は、国立大学法人お茶の水女子大学職員就業規則(以下「職員就業規則」という。)第 4 条第 5 項の規定に基づき、国立大学法人お茶の水女子大学(以下「本学」という。)のグローバル女性リーダー育成研究機構に置く研究所において雇用する特別招聘教授に関し必要な事項を定める。

(定義)

第 2 条 この規則において「特別招聘教授」とは、国際的に著名な研究者又は顕著な業績を有する研究者で、グローバルな視野から本学の教育研究活動の一層の推進及び活性化を図ることを目的として、本学が常勤の教員として採用する者をいう。

(選考)

第 3 条 特別招聘教授の選考は、教員人事会議の議を経て、学長が行う。ただし選考に係る審査は、基幹研究院長に付託するものとする。

2 前項の規定にかかわらず、学長の戦略的人事による選考は、役員会の議を経て、学長が行うものとする。

3 前 2 項の選考にあたっては、国立大学法人お茶の水女子大学教員選考基準第 1 条の規定を準用する。

(定年・雇用期間)

第 4 条 特別招聘教授の定年は 65 歳とし、当該定年に達した日以降における最初の 3 月 31 日(以下「定年退職日」という。)に退職するものとする。ただし、学長が特に必要があると認める職員については、この限りでない。

2 前項の規定にかかわらず、学長が必要と認める場合には、5 年以内の期間を定めて雇用することができる。

(給与及び退職手当)

第 5 条 特別招聘教授の給与は、国立大学法人お茶の水女子大学職員就業規則第 4 条第 4 項の規定に基づき年俸制を適用して雇用する教員の就業に関する規則(以下「年俸制適用教員の就業に関する規則」という。)

第 2 条第 1 号の規定に基づき採用された教員に関する同規則第 6 条から第 13 条の規定を適用する。

2 特別招聘教授の退職手当は支給しない。

(赴任及び帰国旅費)

第 6 条 特別招聘教授には、赴任及び帰国のための旅費を支給する。ただし、帰国のための旅費は退職後 3 か月以内に本邦を出発する場合に限り支給し、一時帰国のための旅費は学長が必要と認める場合に支給するものとする。

(就業等)

第 7 条 特別招聘教授の就業に関し、この規則に定めのない事項については、職員就業規則の定めるところによる。

2 特別招聘教授の給与に関し、この規則に定めのない事項については、国立大学法人お茶の水女子大学職員給与規程の定めるところによる。

(雑則)

第 8 条 この規則に定めるもののほか、特別招聘教授に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

1 この規則は、平成 27 年 4 月 1 日から施行する。

2 この規則の施行後最初に採用される特別招聘教授は、この規則に基づき選考されたものとみなす。

附 則(平成 27 年 10 月 23 日)

この規則は、平成 27 年 10 月 23 日から施行する。

附 則(平成 28 年 2 月 19 日)

この規則は、平成 28 年 2 月 19 日から施行する。

【資料】⑨『ジェンダー研究』編集方針・投稿規程

《編集方針》

1. 『ジェンダー研究』(以下、本誌)は、学際的・国際的なジェンダーに関する最新の研究成果を発信し、グローバルなジェンダー研究の発展に寄与する。
2. 本誌は、特集記事・投稿論文・書評からなる。
3. 本誌は特集記事を企画し、時宜にかなったもの、国際的な関心の高いもの、新領域を開拓するものなど、現在のジェンダー研究にとって重要であるテーマで、質の高い論文を掲載する。
4. 投稿論文は、国内外・学内外を問わず公募し、厳正な審査を経て掲載することで、質の高い学術論文の国内外への頒布を進める。
5. 書評は、国内外のジェンダーに関する書籍を厳選し、最先端の研究動向の紹介およびそれについての考察を加えた論評を行う。
6. 本誌の刊行により、国内外・学内外のジェンダーに関する研究の発展を促進し、グローバルかつ有機的な研究交流の構築を目指す。そして、国立大学法人として、男女共同参画社会の実現に貢献する等の、社会的要請にも応える。

《投稿規程》

- 1 投稿する論文は、女性学・ジェンダー研究に関する、学術的研究に寄与するものとする。
- 2 投稿者は、国内外を問わず、学際的に女性学・ジェンダーに関する研究に従事する者とする。
- 3 投稿する論文は、未発表の論文に限る。
- 4 論文執筆における使用言語は、原則として日本語または英語とする。日本語／英語以外の言語による投稿に関しては、編集委員会において検討する。
- 5 投稿論文は原則として、
日本語の論文は、注・図表・参考文献を含めて20,000字以内
英語の論文は、注・図表・参考文献を含めて8,000ワード以内
- 6 論文の提出時には、本文・図表・参考文献のほか、以下についても提出すること。
6-1 表紙。論文タイトル(副題も含む)と投稿者氏名・所属を、日本語と英語とで記す。
(タイトル等の英語表記は、確認のうえ編集事務局で変更する場合もある。)
6-2 日本語要旨。400字以内。
6-3 英語要旨。200ワード以内。ネイティブチェック済のもの。
6-4 キーワード。日本語・英語ともに5語以内で、それぞれの要旨の後に記載する。

- 7 投稿論文は、ジェンダー研究所ウェブサイト上の、以下のいずれかの投稿フォームより、必要事項を入力したうえで、メール添付にて送付すること。

日本語投稿フォーム

<https://form.jotform.me/72482244933459>

英語投稿フォーム

<https://form.jotform.me/72488720633461>

- 8 本文と要旨などのテキストのデータは Word と PDF のファイルにし、図、表のデータは Word または Excel と PDF にし、写真は JPEG と PDF のファイルにして提出すること。
- 9 他の文献等から図、表、写真などの転載を行う場合は、原則として投稿者が自らの責任において必要な手続きを行う。その際の費用に関しては投稿者が負担する。
- 10 本文、引用文、参考文献、注については、別に定める<『ジェンダー研究』執筆要項>に従う。英語の投稿論文は Harvard Referencing System とする。
- 11 投稿論文の掲載の可否は、査読者による審査のうえ、編集委員会が決定する。
- 12 編集委員会は、査読者の審査にもとづき、投稿者に論文の修正を求めることがある。求められた投稿者は、速やかに論文を修正し、メールにて提出しなければならない。
- 13 投稿者による校正は原則 2 回までとする。
- 14 投稿後、投稿論文を取り下げる場合は、速やかに編集委員会に申し出ること。
- 15 原稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。ただし、図・表・写真などが多い場合には、執筆者による自己負担となることがある。
- 16 掲載論文の著作権はお茶の水女子大学ジェンダー研究所に帰属するものとする。転載を希望する場合には、編集委員会の許可を必要とする。

(2017 年 10 月 27 日改訂)

【資料】⑩ジェンダー研究所ウェブサイト プライバシー・ポリシー

1. 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所(以下、本研究所)ウェブサイトでは本研究所のイベント開催に際して、イベント参加申込者の個人情報(氏名等により特定の個人を識別できるもの)を、本ウェブページ上にて収集することがあります。
2. 収集した個人情報はイベント開催における会場手配や安全確保、配布資料作成の参考として利用するものであり、本研究所のイベント開催通知以外では利用することはありません。
3. 収集した個人情報の管理は、ウェブ担当者が漏洩、紛失、改竄等に対する安全対策を行うことで保護し、その責任は本研究所所長が最終的に負います。
4. 本研究所では、プライバシー・ポリシーを改定することがあります。改定する場合は、当ウェブサイトでお知らせします。

附 則

このプライバシー・ポリシーは、2015年7月1日から施行します。

国立大学法人お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構
ジェンダー研究所（IGS）
2019年度事業報告書

編集担当：申琪榮・和田容子

発行：お茶の水女子大学ジェンダー研究所
〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel: 03-5978-5846

igsoffice@cc.ocha.ac.jp

<http://www2.igs.ocha.ac.jp>

2020年9月作成

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
お茶の水女子大学 ジェンダー研究所

Institute for Gender Studies, Ochanomizu University
2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610 Japan

TEL: 03-5978-5846 FAX: 03-5978-5845

igsoffice@cc.ocha.ac.jp

<http://www2.igs.ocha.ac.jp>

